



パパが見た映画

365本

(下)

磐田 匠

第一集下巻です

みなさんこんにちは。

映画感想文集、つらつらと書き綴っておりましたら、原稿がめっちゃごっつい量になってしまいました。

データ容量もけっこうでかくなっちゃいまして、編集とか校正とか、かなり時間がかかるようになってしまったってえ物理的な理由から、上下分冊にしようと思ひまして。

本来でしたらちょうど半分くらいの量のところで分けるのがきれいなのでしょうが...

そもそもはこの本、ホームページで公開した記事を手直しして書いているわけでございます。ホームページ版のほうは、執筆時時点のテレビオンエア情報とか、そのオンエアを見た感想とか、そういう並びになっているわけだったのでございまして。

シリーズ作品の並びにイマイチ統一性がないのはそのへんが原因でございます。

この作品はいついつオンエアです、次回はいついつオンエアのこの作品のご紹介です、で、そのあとは今回のオンエアで見たこの作品の感想です、みたいな流れで書いておりますので。

オンエア終わった時点では関係ないっすよね。

だもんで、並びが変なの。

んで。

この本の執筆にあたっては、そこらへんの記述を削除して、必要ならその後の情報書き足してって形で執筆しております。

書き直し部分はここで直接書き込みしてございまして。

って事情があるので、この記事ってある意味コピーの残っていない、オリジナルでございます。

でね、ここの記事って一旦書いてしまうと、削除はできるけどコピーできないでしょ。

だからきれいに半分のところから書き直してのがつらいから、こんな形になっちゃった。

あ、ここまでは上下巻の作品数のバランスが悪いことへの言い訳ざんす。

みたいな事情を抱えながらの第一集下巻でございます。

みなさま下巻もごゆっくりお楽しみくださいませ。

荒野の七人

1960年アメリカ映画

監督 ジョン・スタージェス

主演 ユル・ブリナー、スティーヴ・マックウィーン、チャールズ・ブロンソン、ジェームス・コバーン、ロバート・ヴォーン、ホルスト・ブッフホルツ、ブラッド・デクスター

今日も懐かしの名画シリーズです。西部劇の傑作、「荒野の七人」です。

かなり昔ですが、雑誌「ビクリハウス」の「ロッキン川柳」というコーナーで、素晴らしい川柳が掲載されておりました。

「あとひとり 思い出せない ミカバンド」

素晴らしい川柳です。だって本当にそうなんだもん。

この感じで川柳を作ると、

「あとふたり 思い出せない 荒野の七人」

って感じでしょうね。ホルスト・ブッフホルツさまと、ブラッド・デクスターさまの名前がどうにも出てこない人が多いと思います。

そもそもこの作品、黒澤監督の「七人の侍」の翻案です。

盗賊団が略奪を繰り返す村。村人たちは、用心棒ガンマンを雇って村を守ろうとします。物語前半部は、村人から依頼をうけたガンマンのリーダー・ブリナーさまが、仲間を探す描写です。やがて一人また一人と仲間が増えていきます。仲間は七人集まります。そして盗賊団との決闘。一人また一人とやられていく仲間たち。村人たちも戦う。甚大な犠牲を出しながらも、ガンマンたちは戦います。そして、とうとう盗賊たちは敗走していきます。

ガンマンのリーダー、ブリナーさまは言います。「勝ったのは我々ではない。村人たちだ」これ、「七人の侍」でも聴いた台詞のような気がする。

マックウィーンさまは早撃ち。コバーンさまはナイフ投げの達人。子供に好かれるブロンソンさまは子供の命を守って撃たれる。「荒野の七人」オリジナルキャラの臆病者キャラ・ヴォーンさま。一人一人のキャラが際立っています。さすが名作。

テーマ曲も「明日に向かって撃て」同様、名曲でございます。

次回はシルヴェスター・スタローンさまとシャロン・ストーンさま主演の「スペシャリスト」です。

スペシャリスト

1994年アメリカ映画

監督 ルイス・ロッサ

主演 シルヴェスター・スタローン、シャロン・ストーン、ジェームス・ウッズ、エリック・ロバーツ、ロッド・スタイガー

スタローンさま主演のクライムサスペンス。

スタローンさまはCIAの爆破工作員。ある仕事で仲間というか上司というか、そういう存在のウッズさまとモメて、今では一匹狼の殺し屋（爆破屋）です。

そんな彼に依頼がくる。依頼人はストーンさま。かつて自分の父母を殺したマフィア、ロバーツさまとその一味の命を狙っています。ストーンさまはスタローンさまに一味殺しを依頼する一方でロバーツさまに近づき、油断を誘うために父の仇に抱かれるという、悲惨な復讐を決意しております。

ウッズさまはマフィアの大ボス・スタイガーさまに雇われています。で、スタイガーさまの息子がエリック・ロバーツさまね。

仕事を請け負ったスタローンさまは、一人また一人と一味を的にかけていきます。最後の一人、ロバーツさまを片付けるスタローンさま。しかし、ストーンさまはロバーツさまを爆殺したときに巻き添えになってしまう。

スタローンさま、彼女の葬式に出向いたら、生きていましたシャロン・ストーンさま。

いぐわあああ。

スタローンさまとストーンさまは一緒に逃げることになります。

といますのも、ストーンさまのこの大芝居に騙されたのはウッズさままでございまして。

実は話せば長い。彼はスタイガーさまに依頼され、スタローンさまを殺そうとしてストーンさまを囮にしようとしていたのです。

でもストーンさまはスタローンさまのことを愛しはじめている。スタローンさまも同じ。やがてウッズさまは二人の隠れている場所を探り当てます。

そしてそして、スタローンさまとウッズさまの直接対決となります。すげえ。

とにかくシャロン・ストーンさまがいやらしくていいです。なぜか服を脱ぐシーンがあるけど、ことごとく黒のティバック下着。普段でも黒のミニスカート。いいなあ。こんな人と知り合いになりたいなあ。

さて。次回はトムクランシー原作の「トータル・フィアーズ」のご紹介です。

トータル・フィアーズ

2002年アメリカ映画

監督 フィル・アルデン・ロビンソン

主演 ベン・アフレック、モーガン・フリーマン、ジャームズ・クロムウエル

トム・克蘭シーさま原作の「恐怖の総和」の映画化です。「CIA分析官 ジャック・ライアン」シリーズ。このジャック・ライアンものは過去「レッドオクトーバーを追い（アレック・ボールドウィンさま）」「パトリオット・ゲーム（ハリソン・フォードさま）」「今そこにある危機（ハリソン・フォードさま）」が映画化されています。

イスラエルを飛び立った戦闘機が撃墜されます。その戦闘機には核爆弾が搭載されていました。核爆弾は砂漠の中に放置されることになります。

その29年後。この核弾頭がテロリストの手にわたります。テロリストは右翼政権・国粋主義者・ネオナチなどのファシスト連合軍。

彼らの目的は、アメリカとロシアの間に核戦争を勃発させるというもの。折りしもロシアでは政権交代がなされます。新大統領は自らの指導力を誇示しようとしています。実は親アメリカ派。しかしアメリカ大統領や彼の側近はそのことを知らず、ライアンだけがそれに気づいています。

やがてアメリカ・ボルチモアで核爆発が起こります。これはもちろんテロリストの手によるもの。さらにロシア空軍に潜入していたファシストが、クレムリン空爆のニセ情報を流し、ロシアの爆撃機一個小隊はアメリカの空母を攻撃。

アメリカは当然の反応として核ミサイルの発射体制を整え、それによりアメリカロシア両国は警戒レベルを最高レベルにまでひきあげるようになります。あわや第三次世界大戦勃発。この事態の收拾にジャック・ライアンが奔走することになります。

まるでバラバラのパズルのピースが埋まっていく気分というか、名人の詰め将棋を見ている気分というか。謎解きのプロセスそのものがとても楽しめます。

ベン・アフレックさまけっこうがんばってますね。

他の作品も見てみたくなりました。史実無視ともっぱらの評判の「パール・ハーバー」はあんまり見たくないけど。

今、会いにゆきます

2004年東宝・TBS・博報堂メディアパートナーズ・小学館・「いま、会いにゆきます」制作委員会作品

監督 土井裕泰

原作 市川拓司

主演 中村獅童、竹内結子、武井 証、YOU、小日向文世

ドラマ化もされた「今、会いにゆきます」の映画版です。ドラマ版はミムラさまと成宮寛樹さまが主演されておられました。映画版はというと中村獅童さまと竹内結子さまの主演。この作品の共演が縁でお二人はご結婚されてましてございます。

ドラマの出来がすごくよかった、というか、私は原作の素晴らしさに感動しまくりまして、恋愛映画ではありますが、ドラマの最終回翌日にレンタルで見た思い出があります。

男の親子の二人暮らし。タックン＝中村さまとユウジ＝武井くん親子。母親滯＝竹内さまは亡くなっています。竹内さまは、「雨の季節に帰ってきます」という言葉を残して亡くなりました。

で、武井君は「逆さ照る照る坊主」なんかを作って雨の季節を待っています。やがて訪れる雨の季節。竹内さまが本当に帰ってきます。でもどうやら過去の記憶の一部が欠けている様子。彼女に問われるまま、中村さまは高校時代の二人の出会いからの自分の思いを彼女に伝え、結婚するに至る経緯を話すことになります。雨の季節が終わると彼女がまたいなくなってしまうと知りながら。雨の季節に帰ってくることも、雨の季節が終わると彼女が去っていくことも、彼女が息子のために書いた絵本に書かれていた内容だったのでございます。

このお話、実は黄泉がえりものではなく○○○○○○○（この言葉だけは未見の人のために書けない）ものだったわけで、その仕掛けが映画終了十五分前あたりで全て明らかになるという素晴らしい構造をもっています。そこに至る伏線も見事。ドラマでは情報が膨大になりすぎてややもたついたこの仕掛けの種明かし部分が、見事なビジュアル処理で表現されています。

物語の展開を知っていても泣かせてくれる主演三人（もちろん子役の武井君を含みます）の名演技に拍手、でございます。

さてと。次回は「ハムナプトラ2」でございます。

ハムナプトラ2・黄金のピラミッド

2001年アメリカ映画

監督 スティーブン・ソマーズ

主演 ブレンダン・フレイザー、レイチェル・ワイズ、アーノルド・ヴォスル、フレディ・ボーズ

「ハムナプトラ」の続編。2やからね。そら続編やわな。

前作で滅ぼされた魔王イムホテップ＝アーノルド・ヴォスルさま。

その魔力を封印から解き放ったのは博物館の館長、ハファズ＝アラン・アームストロングさま。

彼らの狙いはですねえ、これまた魔王スコープオン・キングの伝説の腕輪。

スコープオン・キングってのは、邪悪の神アヌービスと契約し、悪の軍隊を率いる勇士。彼は邪神との契約にしたがって滅ぼされましたが、彼を復活させて戦い、彼を倒すと、彼の軍隊を手に入れることができるってことになっています。

遺跡を発掘して、伝説の腕輪を手にしたのは、これまた運が悪いことに前作イムホテップを封印したリック＝ブレンダン・フレイザーさま。あろうことか腕輪は彼の息子アレックス＝フレディ・ボーズさまがはめてしまい、外れなくなってしまいます。妻のエブリン＝レイチェル・ワイズさまも誘拐されてしまいます。

再びイムホテップと戦うことになったフレイザーさま。やっぱり今回の敵もミイラだとか虫だとかゾンビ。ようやります。結局フレイザーさまは妻を取り返したものの、代わりに息子を拉致されます。

フレイザーさまはイムホテップたちを追って、エジプトの黄金のピラミッドを探すことになるわけです。

今回の話はちょい微妙。特撮は素晴らしいんだけど。ただね、イムホテップの恋愛エピソードが描かれててよかったですね。前はただの悪の大魔王だったけど、今回は人間的な描かれ方していました。

ピラミッドの中で、魔力を失って「人間として」フレイザーさまと戦って苦戦したり。第三弾があったらもっと人間らしくなるんでしょうね。

さて次回。懐かしの名画シリーズに戻りましょう。「荒野の七人」を書いたから、ええ感じでつなげるとしたらこれかな。「ウエスト・ワールド」のご紹介です。

ウエストワールド

1973年アメリカ映画

監督 なんとマイケル・クライトン

主演 ユル・ブリナー、リチャード・ベンジャミン、ジェームス・ブローリン

先日、「荒野の七人」を紹介したから、ディープな感じでのこの映画につなげてみました。

この映画、西部劇ではありませんよ。ビデオとかDVDのジャケットにはカウボーイハットかぶったユル・ブリナーさまの写真があつたりしますが。

近未来、大人むけのハイテクテーマパーク「デロスランド」がオープンします。ここには三つの世界があって、中世の町・古代ローマの町・開拓時代の西部の町と、三つの世界が選べるようになっていきます。それぞれの世界にはすごい量の間人そっくりのアンドロイドがいて、お客さんの相手をしてくれる。アンドロイドはランドの中核コンピューターで制御されています。料金は一日1000ドルって設定だったと思います。1970年代の1000ドルだから、かなり高い娯楽ですなあ。主人公は、西部の町を選び、数日間をここで過ごすことになります。

しかあし。コンピューターが故障し、アンドロイドたちが制御不能の状態に陥ります。「荒野の七人」のガンマンそっくりの扮装をしたアンドロイド（荒野の七人でガンマンを演じたユル・ブリナーさま、怪演！）が主人公をつけ狙う。

どこまでもどこまでも追ってくる。主人公の友人はアンドロイドに撃たれて死んでしまいます。逃げる主人公、追うアンドロイド。

ん？ターミネーターやないの、これ。で、アンドロイドを「恐竜」に置き換えたならジュラシック・パークやし。

監督のマイケル・クライトンさまは後にジュラシック・パークの原作を書く人。あの小説のルーツはここにあったというべきでしょうか。んで、恐らくジェームス・キャメロンもこの映画の影響をかなり受けているんじゃないかと思います。

だって途中のサスペンスのもっていきかたがそっくりなんだもん。

ということで、後の映画に多大なる影響を与えた、歴史的傑作であると評価して間違いじゃない作品だと思います。

さあて。今回は、もう一本SFの古典的傑作。「2001年宇宙の旅」でございます。

2001年宇宙の旅

1968年アメリカ・イギリス合作

監督 スタンリー・キューブリック

主演 キア・デュリア

懐かしの名画シリーズ。今は亡き巨匠スタンリー・キューブリック監督作品。とにかく物議をかもした作品です。哲学的な冒頭。普通に理解できる中盤。観る者全てをつき放すエンディング。すげえとしか言葉がでませんです。

えっとですねえ。この作品では「モノリス」と呼ばれる石板が重要なパーツになっております。オープニング、類人猿がこの謎の石板に触れ、道具を持つことを覚える。猿人は道具を手に狩りをし、その道具を空に投げると...狩りのための棒は宇宙船の画像とオーバーラップ。印象的な画像処理です。2001年という設定ですが、残念ながら現実世界では映画ほどの宇宙進出は叶わなかったですね。実際に映画レベルまで技術が進んでいるかどうかは私レベルではわかりませんが。しかしかなり近い線までいっているのは確か。

物語中盤は宇宙船の中で進行します。デュリアさまが船長を務める宇宙船。飛行中、この宇宙船の生命線をつかさどるコンピューターが反乱を起こし、乗組員が殺されていきます。船長はコンピューターの機能を停止させるという行動にでます。ここらまではいいんです。まだわかる。問題はここから。

つき放されます。どうつき放されるのかは映画をご覧くださいと思います。

私はこの映画、四～五回見ましたが、その度に解釈かわったりして、まだ正解には至っていないような気がして。そんな折に「2010」みたいな映画が公開されたりして。まあ「2010」のお話は回を改めて。

ちなみの反乱をおこすコンピューターの名前は「HAL」。このHとAとLのアルファベットを一文字ずつ後ろにずらしていくと「IBM」になるって話はけっこう有名でございます。

さて次回です。「男たちの挽歌」シリーズの第二弾、「男たちの挽歌2」です。

男たちの挽歌II

1987年香港映画

監督 ジョン・ウー

主演 チョウ・ユンファ、ティ・ロン、レスリー・チャン

「男たちの挽歌」の続編。あたりまえやろ。2やねんから。

前作のラストで（書いていいのかなあ）チョウ・ユンファさまは頭を撃たれ、さらに蜂の巣みたいに撃たれて劇的に死にました。ティ・ロンさまは自ら手錠をはめ、弟の刑事レスリー・チャンさまに自首しました。

それから数年後。ロンさまは服役囚。チャンさまは相変わらず刑事稼業です。そんなロンさまに警察から声がかかる。FBIからもマークされている香港マフィアの大家を内偵して欲しいとの申し出です。香港では偽札事件が横行しており、香港警察の威信にかけ、FBIに先んじてそいつを捕まえたいと、こういうわけです。

かくしてロンさまは警察の手先として組織に入り込みます。しかし潜入した組織が実はカタギの組織っぽくて、彼らは別のマフィアの的にかけられてて、社長が別の組織のマフィアにはめられて、とかそういう展開になります。

はめられて殺人容疑をかけられたカタギ社長はアメリカへ逃げる。そこで何と前作で劇的に死んだユンファさまの双子の弟に助けられます。一方のロンさまは社長をはめたマフィアに潜入。チャンさまも組織に潜入。かくして香港・アメリカ（ニューヨーク）二元で物語が進行していきます。この二元がやがて重なりあって、怒涛の友情アクション超大作へと物語がシフトしていくわけでございます。

もうねえ、ラストの銃撃戦がすごい。爆破シーンも半端じゃない。ってことは出る死体の数も半端じゃない。日本映画って死体を描写するのって避けたりすることが多いですが、この映画では、死体も流血も撃たれて悶えながら倒れる様子もモロに写します。それがまた強烈な印象を残す効果をあげてるんじゃないかなって思います。

前作の大成功で気前がよくなったのか、爆破シーンの火薬の量もすげえスケールアップです。爆破シーン見るだけでも見る値打ちあります。香港映画でよく出てくる「横分け眼鏡の悪役」は今回は敵組織の殺し屋。

前作では警察のえらいさんでしたが。

なかなかうまい具合に1から2へレベルアップしています。3はどうなることやら。

ってことで、次回は「アゲイン・男たちの挽歌III」です。

アゲイン～男たちの挽歌Ⅲ

1989年香港映画

監督 ツイ・ハーク

主演 チョウ・ユンファ、アニタ・ユイ、時任三郎

「男たちの挽歌」シリーズ第三弾。今回はベトナムと香港が舞台。なんかますますスケールアップしてまんなあ。

第一作で死んだユンファさま演ずるマークが主人公。その若き日のエピソードって感じですよな。

舞台はサイゴン陥落前のベトナム。ユンファさまはいとこを頼ってベトナムにやってきた青年。入国の時点でベトナム全体が腐敗していることを悟ります。

ユンファさま＝マークが訪ねていったのはいとこのマイケル。彼はベトナム脱出のための金を稼ぐために危険な仕事をしています。ある企業の仕事で中国外務省経由でビジネスしている女性がアニタ・ユイさま。ユンファさまらの仕事ってのは、ベトナム軍とその企業の取引の仲介が仕事だったわけです。しかしベトナム軍が突然裏切るわけです。ユンファさま・ユイさまらとベトナム軍の銃撃戦が始まる。

ユイさますごい。マシンガンで片手でぶっ放すキャラです。コマンドーみたい。軍の介入によって銃撃戦は収拾。ユンファさまとユイさまのラブラブ系のおつきあいが始まる。ユイさまには三年間行方不明の恋人がおります。

さて、金をためたユンファさまらは香港へ。ユイさまも香港へ戻ります。そこに突然現れたのはユイの元恋人時任さま。

ここいらから急速に話がややこしくなってきます。時任さまとユイさまには「片付けなければならない仕事」があって、戦時下のベトナムへ。ユンファさまといとも二人を追ってベトナムへ。そこでベトナム軍と時任さま一派とユンファさま一派の熾烈な戦いが始まるわけですね。

時任三郎さま、思っていたよりかっこええ悪役ぶりでございます。身長もあるし、なかなか堂に入ったもんです。クライマックス、ユンファさまと時任さまはユイさまを奪い合って決闘します。

いぐわあああ。んで、いかにも「男たちの挽歌」みたいなラストを迎える。うひょおおおお。よろしゅうおまんなあ。ちなみにこの作品はジョン・ウー監督作品ではありません。前二作と明らかに雰囲気が違うのはそのせいでしょうか。

えっと、次回は「タクシードライバー」のご紹介です。

タクシードライバー

1976年アメリカ映画

監督 マーティン・スコセッシ

主演 ロバート・デ・ニーロ、ジョディ・フォスター

「ゴッドファーザーパート2」で世界中に鮮烈な印象を植えつけたロバート・デ・ニーロさま。彼の評価を決定づけた傑作でございます。

大都会を流すタクシードライバーの物語。そのまんまやんげ。ただ、主人公トラビス＝デ・ニーロさまをベトナム帰りのあんちゃんに設定したところが実にアメリカっぽい。タクシーを運転しながら、彼は大都会の狂気を目の当たりにすることになります。浮気している自分の妻を監視し続ける男だとか、少女の娼婦だとか。そんななかで彼はある女性に好意を抱く。その女性は議員候補の運動員。でも都市は腐敗しているし、おかしいことだらけ。狂気が蔓延している。で、彼は議員候補暗殺を企てます。

スプリング式で袖に隠された銃が腕を振ると飛び出す仕掛けだとかを用意して、候補の街頭演説会場へ。結局暗殺は失敗。デ・ニーロさまはそのまま少女売春の娼婦宿へ向かい、ポン引きたちを銃撃戦の末に射殺して、売春婦少女を救い出す。彼は少女売春組織を倒し、少女を救ったヒーローとして扱われます。でも彼の日常は変わらない。そのままタクシーに乗り続ける。

なんかやるせなさの不条理とせつなさと。こんな都会を作ったのは誰なんだろう。みたいなどんよりした気分を残しつつ、淡々とタクシーの運転を続けるデ・ニーロさまがたくましく思えたりして。ちょっと考えさせられてしまいました。

さて、今回は。アーノルド・シュワルツェネッガーさま主演「トゥルーライズ」のご紹介です。

トゥルー・ライズ

1994年アメリカ映画

監督 ジェームズ・キャメロン

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー、ジェイミー・リー・カーティス

「ジングル・オール・ザ・ウェイ」だとか「ツインズ」だとかで、コメディセンスもある役者だったことを万人に知らしめたシュワさま。「本人は真面目なんだけど、冷静に見るとおかしい」って感じのアクションコメディ路線の最高傑作がこの作品ではないでしょうか、と、勝手に思っております。

監督は盟友、「ターミネーター」のジェームス・キャメロンさま。キャメロン監督のアクションコメディの手腕も大いに評価された作品ではないでしょうか。

シュワルツェネッガーさまは諜報員です。しかし、家族には内緒。あたりまえですな。むっちゃ普通にマイホームパパしたりしています。カーティスさまはその妻。家庭生活にちょっと不満を感じています。夫が出張（実は諜報活動なわけですが）の間、ちょっくら火遊びめいたことをしてしまいます。ここいらがすごい。妻の浮気（というか、火遊び・入門編ですな）に気づいたシュワさま、浮気調査にCIAの尾行をつけたり、さらに追跡用ヘリ飛ばしたり、盗聴装置使ったり、特殊部隊投入したり。アホちゃうか。

これを真面目にしかめっ面したシュワさまがやるからたまらなくイケます。カーティスさまはCIAに拉致され、お灸をすえられます。で、浮気されるくらいなら安全な諜報活動でもやらせれば？みたいなノリで諜報員の仲間入り。やがてシュワさまが物語前半から追っていた悪玉が本格的に動き出して... みたいな話。

シュワさまはもちろんですが、ジェイミー・リー・カーティスさまがすごくいいです。この人こんなに上手かったんだって改めて見直しました。

若いころは「スクリーミングクイーン」なんていわれてたんですが。とにかく面白いので、是非ご覧いただきたいと思います。

さて、次回は、「大怪獣ガメラ」です。

大怪獣ガメラ

1965年大映作品

監督 湯浅憲明

主演 船越英二

私が子供のころは、特撮ものの怪獣映画は、夏休みとか年末年始とか、たまに日曜祝日の昼間のオンエアでした。ゴールデンに怪獣映画とかほとんど見なかったなあ。最近はときどきゴールデンで怪獣映画オンエアしてはります。

ちょっと難しい系の怪獣映画はプライムタイムの九時～十一時台にオンエアしてはりますが。主演の船越英二さまは、二時間ドラマの帝王、船越栄一郎さまのお父様です。「熱中時代」（これも若い人は知らんやろなあ）の校長先生役の俳優さん。懐かしいですね。

昭和ガメラは水没したアトランティス王国の守護神だったって設定です。放射能を積んだ船が沈没したか何かで、ガメラが目覚めてしまいます。ここらあたり、放射能を持ち出すとたいがいの設定が許されてしまうから不思議ですなあ。ガメラはまず北海道に上陸。そのときに灯台から落ちそうになっている子供を助けます。「ガメラは子供が好き」という後々にまでつながる大事な設定が生まれた瞬間ですな。そんなガメラの優しさを知らない大人たちはガメラ退治に躍起になります。そのうち日本のあちこちでUFOが目撃され、実はそれがガメラだったってことがわかったりします。人類とガメラの戦い。人類は果たしてガメラを倒すことができるのでしょうか...シリーズ化された怪獣は、当時はゴジラとガメラだけだったですよ。そういう意味では日本特撮の歴史に名前を残す大事な作品なのかもしれません。

今回は、「レッドブル」です。

レッド・ブル

1988年アメリカ映画

監督 ウォルター・ヒル

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー、ジェームズ・ベルーシ、ピーター・ボイル、エド・オロス、リチャード・ブライト、ローレンス・フィッシュバーン

いぐわあああ。シュワルツェネッガーさまがロシアから派遣された刑事を演じるってだけで見てしまった快作。

そもそもシュワルツェネッガーさまという人は生粋のアメリカの人ではありません。名前を見たらわかると思いますが。んだもんで、州知事にはなれるけど大統領にはなれない、なんて選挙のときに言われてましたよね。話す英語も少し癖があります。そんなところに目をつけたのでしょうか。いいセンスだなあ。古くはクルト・ユルゲンスさまやオマー・シャリフさま、ロバート・ショウさま、最近ではドルフ・ラングレインさまやハリソン・フォードさま、リアム・ニーソンさまなんかロシア人役を演じましたが、このシュワ様のロシアの警官役も捨てがたい。とはいってもかなり前に見た映画なので記憶とかあやふや。確かロシアでおお暴れした犯罪者がアメリカに逃げ、それを追ってロシア人の警察官シュワルツェネッガーさまがアメリカにやってくるって話でした。

アメリカ側はジェームズ・ベルーシさまにお守り役を押し付けます。ここに泊まってくださいって案内された安ホテルで、テレビで流されているおっぱい丸出しの女性の映像を見て、シュワルツェネッガーさまが一言、「カピタリズム（資本主義...）」って言うところが妙に笑えました。シュワルツェネッガーさま、ベルーシさまと何かとモメながらも犯人を追い詰めます。で、お決まりのパターンですが、二人の間に友情が芽生える。おお、「ブラック・レイン」のパターンだ。

けっこう後味よく、さわやかな感じで物語が終わるってところも同じかな。

とにかくシュワルツェネッガーさまをロシアの警官役に起用した時点で作品の成功は決まっていたんじゃないかと教授は思います。

さて、次回は、「バック・トゥ・ザ・フューチャー・パート2」です。

1989年アメリカ映画

監督 ロバート・ゼメキス

主演 マイケル・J・フォックス、クリストファー・ロイド、リー・トンプソン、トーマス・F・ウィルソン

誰もが知ってる人気シリーズの第二弾。前作のラストでまた未来に行くはめになったフォックスさま。彼は過去の世界でめでたく自分の両親のキューピットになることに成功しました。んでまたロイドさまがやってきて、今度は未来に行く。未来で自分の息子が警察に逮捕されることを阻止します。やれやれ。いたずら半分に未来の世界で「スポーツ年鑑」みたいな本を買ったら博士がそれを見咎め、その本を捨てて現代へ帰る。今回の話はこの本がキーになります。

未来の世界で相変わらず性悪の老ビフ。彼がタイムマシンを目撃してしまう。あろうことかフォックスさまの両親がキスをした時代に戻り、若いビフに「未来のスポーツ年鑑」を渡してしまいます。てことは、あらゆるスポーツの勝者がわかってしまうので、スポーツ賭博はいただきですよ。そしてこっそりタイムマシンを元に場所に戻してたわけです。そんなこと知らないフォックスさまが自分ももといいた時間に戻る。と、そこは自分が出発した未来じゃなかったわけです。その未来は、老ビフが若いビフに「スポーツ年鑑」を渡し、ビフの人生が変わることによって書き換えられた時間軸の上に戻ったわけです。困ったフォックスさま、また過去に戻り、「スポーツ年鑑」を取り戻そうとします。果たして時間は正しく戻されるのでしょうか。

タイムマシンものでありながら、ありがちなタイムパラドックスに陥らないように細心の注意がなされています。さすが。

さて、今回はホラー。「キャンディマン」です。

キャンディマン

1992年アメリカ映画

監督 バーナード・ローズ

主演 バージニア・マドセン、トニー・トッド、ザンダー・バークレー、カシ・レモンズ

真夜中、鏡に向かって三度つぶやく。「キャンディマン、キャンディマン、キャンディマン」。すると鏡の中に奴の姿が浮ぶ。キャンディマン。きゃあああああああ。

この作品を初めて見たときはかなり期待しました。私の感触としては、ジェyson、フレディ、マイケルに次ぐ新連続殺人鬼系キャラの誕生かと思いましたが。残念ながら1・2でお役御免になってしまいました。

キャンディマンはジェysonやマイケルみたいに実体がある系のホラーキャラではなく、フレディみたく実体がない系キャラです。見たのはかなり昔。十年くらい前のことだから記憶とかかなりあやふやですが、でも私的には面白かったって記憶だけは鮮明に残っております。

確かねえ、この世に恨みをもって死んでいった男がキャンディマンになったんですよね。身体じゅうに砂糖が何か塗られたくられて養蜂場かどこかに放りだされ、体中を蜂に刺されて死んだ男の霊がキャンディマンの正体でございます。だからね、キャンディマンのコートの下は骸骨で、骸骨の上で蜂がうごめいているんだぞ〜。

キャンディマン以降はイカしたホラーキャラ生まれてないような気がします。スクリームもルールも特定の殺人鬼はでてこないですもんね。ラストサマーはフィッシャーマンは果たして誰？みたいな話だったし。

さて、次回は「スピード」です。

スピード

1994年アメリカ映画

監督 ヤン・デ・ボン

主演 キアヌ・リーブス、デニス・ホッパー、サンドラ・ブロック、ジョー・モートン

キアヌ・リーブスさまの出世作でございます。リーブスさまはロサンゼルス警察のSWAT隊員。

彼の管轄管内で連続して爆弾事件が発生します。犯人はデニス・ホッパーさまでございます。ドラマ「24」といいこの映画といい、このひと、ええ感じでセンキレ系連続殺人鬼役が続いております。

ホッパーさまは元爆発物処理班。政府を深く恨んでいます。腕利きの爆発物処理班員が爆弾作るわけですから、かなり複雑な仕掛けの爆弾がビシバシ作られるわけで。リーブスさま、そんなこと知らないなりにこれまたビシバシ爆弾を処理していきます。そんな中、バスに精巧な仕掛けの爆弾が仕掛けられ、リーブスさまは乗客の命を助けるためにバスに乗り込むことになります。バスの爆弾の時限装置は解除不可能。バスは一定スピード以下になると爆発します。さらに悪いことに、車内で起こった別件の事故で運転手は負傷。たまたまバスに乗り合わせたブロックさまがバスを運転するはめになります。

この高速で走るバスに次々とふりかかる試練と、リーブスさま・ブロックさまがいかにしてその苦難を乗り越えるかってあたりが見どころでございます。

ヤン・デ・ボンさま、なかなか手馴れた演出。でもバスから脱出してから犯人逮捕までがとってつけたような決着のつけかただったのが気になりました。もう少し渋い終わり方なかったのでしょうか。

次回は「大怪獣決闘ガメラ対バルゴン」です。

大怪獣決闘ガメラ対バルゴン

1966年大映作品

監督 田中重雄

主演 本郷功次郎、江波杏子、藤岡琢也

「ガメラ対バルゴン」は私にとってかなりレアな作品です。ガメラ第一作と、ガメラ対ギャオス以降はかなり何度も見ているんですが、こいつは一回だけしか見ていないはず。

しかもかなり幼い頃です。ある意味幻の作品でございます。

しかし確実に見てる。ラストの虹（まあ見た人はわかると思いますが）の場面はかなり鮮明に覚えております。

ニューギニアの奥地に入り込んだ探検隊。彼らの目的は巨大なオパール。彼らはその宝石を手に入れ、日本に持ち帰ります。しかししかし。オパールに似たその物体は、二千年に一度生まれるというニューギニアの伝説の怪獣「バルゴン」の卵でした。そしてその卵が孵化し、冷凍怪獣バルゴンが生まれます。

ニューギニア生まれの怪獣なのにどうして冷凍怪獣なんのでしょうか。ここらへんのセンスがよくわかりません。まあとにかくバルゴンが生まれるわけです。で、ガメラはというと、前作（見てない人ごめんさい）、ロケットに乗せられて宇宙に飛んでいったはずですが、ロケットの不調で地球に帰ってきてしまいます。かくしてガメラ対バルゴン対自衛隊の戦いがはじまることとなります。

ガメラ、第二作でいきなり人間に味方するベビーフェイスになっちゃってます。ゴジラは「ゴジラ」「ゴジラの逆襲」「ゴジラ対キングコング」「ゴジラ対モスラ」まで悪役で、その次のキングギドラ登場編ではじめて善玉になるのに。

まあいいか。ここいらの強引な手腕はさすが大映って気がしますが。

さて、次回は「英雄の条件」です。

英雄の条件

2000年アメリカ映画

監督 ウィリアム・フリードキン

主演 トミー・リー・ジョーンズ、サミュエル・L・ジャクソン

この映画は数年前の社員旅行のときにオンエアされていたのを見ました。同僚の皆さんが宴会の二次会で飲みまくっていたころ、同室の映画ファンの人と見てました。

戦争映画で法廷映画。厳密には軍事法廷のドラマです。

イエメンのアメリカ大使館がデモ隊に包囲されます。当初はただのデモだと思われていましたが、デモ隊はいつまでも撤収しない。孤立した大使館員たちをチルダース大佐＝ジャクソンさま率いる部隊が救出に向かいますが、大佐は部下にデモ隊に向けての発砲を命じます。この指示が引き金となり、八十名を超える死者がでる大惨事になってしまいます。彼は軍事法廷の被告人として裁かれることとなります。彼を弁護するのはかつて彼に命を助けられたホッジス大佐＝ジョーンズさま。ホッジスはチルダースを助けることができるのでしょうか。

かなり綿密に組み立てられた作品です。さすがウィリアム・フリードキン監督。公開時期、世界情勢が不安定になっていました。それがこの作品の意味を重くしたような印象があります。しかしね、こういう状況は完全に戦争なんだし、戦争ってことは当事者双方に思想も正義も主張もあるわけであって、それを一方の理屈、すなわちアメリカだけの理論で話を推し進めるってのはいかなものかと思いました。ヒューマニズムにあふれた、良い作品だとは思いますが、大国の主張が表にすぎかもしれないですね。

さて、今回は「踊る大捜査線・ザムービー」です。

踊る大捜査線・ザ・ムービー

1998年フジテレビ作品

監督 本広克行

主演 織田裕二、柳葉敏郎、深津絵里、いかりや長介、水野美紀、小泉今日子、ユースケ・サンタマリア

テレビドラマから生まれた、バケモノシリーズ。テレビで2シーズン、スペシャルドラマも本編二本と番外編三本、映画は本編三本と番外編二本。記憶違いがあったらごめんなさい。ただ、今後はみんなビッグネームになりすぎちゃったのと、いかりや長介様が亡くなられてしまったって事情がありますので、ドラマの新シリーズは無理で、映画での展開に絞られるのではないかと思います。

青島刑事殉職か？という衝撃的な内容の映画編第一作。複数の事件が並行して発生。それら事件がからみあいながら最大の事件へとつながっていきます。ここいらの物語の進め方はもう感動的。実はテレビ版スペシャルの稲垣吾郎様がゲストで出ていたエピソードのほうが、「複数の事件が一気にからみあう」という設定は生きていました。そのエピソードは、まるで推理小説の謎解きのようにクライマックスで全ての事件が「偶然という糸につながれて」全貌を明らかにするという、もう出来すぎのお話だったです。んで映画版ですが、テレビ版スペシャルがあまりにも私の好みバッチリだったので、ちょっと物足りなかったです。一気に全ての事件がつながるといった感じではなく、パズルのピースが徐々に埋まっていくような感覚だったです。

映画版の第二作目は、クライマックスがちょっと消化不良だったように感じましたね。二作目よりはこっちのほうが好きなんだけど。お話の性質上、あらすじは書かないほうがいいかもしれませんね。事件そのものが伏線だったりするんで。

物語の冒頭に、ラストにつながる伏線があります。お見逃しなきよう。

さて、今回は「大怪獣空中戦ガメラ対ギャオス」です。

大怪獣空中戦・ガメラ対ギャオス

1967年大映作品

監督 湯浅憲明

主演 本郷功次郎、上田吉二郎

旧ガメラシリーズの最高傑作といえはこの作品。しかし冷静に物語を見つめてみれば、やたらとんでもなさが目立ってしまうと感じるのは私だけでしょうか。

謎の怪獣出没。三角形の頭。蝙蝠のようなシルエット。高速で空を飛び、生き物の生き血を喰らう。自衛隊はその怪獣の退治に乗り出す。しかし、退治の作戦本部を設営するにあたって、その怪獣を特定するために名前をつけなけりゃならない。えっと、怪獣の名前は...「ギャオスだよ。ギャオーって鳴くからギャオス」作戦本部になぜか紛れ込んだ子供が言う。それ以来、怪獣の名前はギャオスになりましたとさ。

ギャオスを退治するためには、ギャオスをおびきだして、そこにガメラを呼べばいい。でもどうやってガメラを呼ぼう... ガメラは火が好きだってところまではわかっているのだが。「簡単だよ、うちの（おじいちゃんが持っている）山に火をつければいいんだよ」と子供が言う。そこでその子のおじいちゃんの山に火を放ち、山を全焼させようとする自衛隊。

んなアホな。後に百恵ちゃんドラマだとかスチュワーデス物語系のドラマで一世を風靡する大映ドラマにも通ずるムチャクチャな物語展開。うひょおおおお。

かくしてこの映画に登場するお馬鹿な大人たちは、子供の意見に振り回されながらギャオスを退治するのであった。

しかし...これでええんかいな。

さて、今回は「ブリット」です。

ブリット

1968年アメリカ映画

監督 ピーター・イエーツ

主演 スティーヴ・マックウイーン、ロバート・ボーン、ジャクリーン・ビセット

スティーヴ・マックウイーンさまの伝説的名作であります。

こいつもかなり昔に見た映画ですなあ。記憶とか断片的。ただ、カーチェイスがすごかったことはよく覚えております。というか、カーチェイスしか印象に残っていない感じです。

フレンチコネクションだとか、このブリットだとかがカーチェイス映画のはしりだったような気がします。

ここらあたりから徐々に「カーアクション」ってのが映画でもバンバン見られるようになったのではないかと思います。「バニシングポイント」だとか「バニシングイン60秒」とか。

「激突」とか「続・激突カージャック」なんかもこのグループに入れていいんだろうか。この二本はちょっと違うような気がします。

とっても面白い映画だった印象があるんですが、なんせ小学生か中学生のころに見た映画なので、物語とかまるで覚えておりません。ブリットってのはマックウイーンさま演ずる刑事の名前。出演しているロバート・ヴォーンさま、この人とデビッド・マッカラムさまは小学生（低学年）のころからよく知っておりまして、「あ、ナポレオンソロやあ」とか思ったことも覚えてますなあ。でもマックウイーンさま見て「あ、拳銃無宿やあ」とは思わなかったから、その頃、私はまだ拳銃無宿はまるで見てなかったんでしょうね～

すみませんねえ、こんなうろ覚えで記事書いて。この作品、見直す機会とかあったら書き直そうと思っております。

さて、次回は「ミクロの決死圏」です。

ミクロの決死圏

1966年アメリカ映画

監督 リチャード・フライシャー

主演 スティーブン・ボイド、ドナルド・プレザンス、ラクウェル・ウェルチ

この映画、一時期しょっちゅうテレビでオンエアされてました。

パターンでいうとねえ、ナイターの雨天中止用の予備プログラム。実はオンエアのたびに見てました。でも、最初から最後まで通して見たのは一度か二度。クライマックスの「白血球の場面（ご覧になられた方はこれでわかると思いますが）」は五回は見てるような気がします。

亡命してきた東側の天才科学者。この人が襲撃にあって瀕死の重傷。外科的手術は不可能。でもどうしてもその人の命を助けなければならない。さてそこでやることは何か。レーザー光線発射装置を装備した潜水艦に折から研究されていた縮小光線を照射してミクロの大きさにし、その患者さんの血管から潜水艦を体内に入れて身体の内部から外科的治療をしようとする、そういうとんでもない話でございます。

かなり昔の映画ですが、かなり頑張った特撮を見せてくれてます。この後、ミクロ化して体内に侵入する系の映画が何本か作られました。インナースペースでしたっけ。今はCG合成で簡単にそういうシーンが作れますが、この頃はもちろんセット撮影。力の入った特撮は必見でございます。

さて、次回は「狼・男たちの挽歌・最終章」です。

狼・男たちの挽歌・最終章

1989年香港映画

監督 ジョン・ウー

主演 チョウ・ユンファ、サリー・ IPP

このシリーズで認められたジョン・ウー監督は、アメリカに招かれ、ハリウッドに進出することになります。

「男たちの挽歌」ってタイトルがつけられてはいますが、この作品はこれまでのエピソードとは関係ありません。

主人公はユンファさまが演じる一匹狼の殺し屋。彼はある仕事で、クラブ歌手の IPP さまを失明させてしまいます。ユンファさまは殺し屋をやめる決意をします。で、最後の仕事と決めた仕事の稼ぎを彼女の角膜移植手術の費用にしようとしています。

しかし仕事の依頼人は組織の秘密を知りすぎているユンファさまを殺し、口を塞ごうとするわけですな。

ユンファさまを消しにきたのは、ユンファさまの親友で、ユンファさまとボスの連絡を仲介していた男。しかしユンファさまは（例によって）二丁拳銃での銃撃戦の末、親友だけを残して殺し屋軍団を返り討ちにしてしまいます。

さてさて。警察はユンファさまの「仕事」を調べるうち、殺し屋の銃撃戦に巻き込まれたという過去をもつ IPP さまにたどりつきます。IPP さまのもとに帰ったユンファさまと刑事は部屋で鉢合わせ。これがきっかけとなって、ユンファさまと刑事はお互いに通じるものを感じはじめます。

ユンファさま・刑事・親友、そして IPP さま。四人の運命の糸は蛇行しながらも一点に向かっていきます。そして最後には銃撃戦が待っているのであった。いぐわあああ。

この映画の銃撃戦も凄いです。そしてあまりにもせつないラスト。涙ちょちょ切れまっせ。この「男たちの挽歌」のジョン・ウー監督ものはどれも良いです。たっぷり浸っていただきたいと思います。

次回は、「フレンチコネクション」のご紹介です。

フレンチ・コネクション

1971年アメリカ映画

監督 ウィリアム・フリードキン

主演 ジーン・ハックマン、フェルナンド・レイ、ロイ・シャイダー

刑事アクションの不朽の名作でございます。「ブリット」と並ぶ刑事ドラマの傑作ですわ。これに「夜の大捜査線」が加われば完璧かもしれない。昔話ですが、私世代にとって、NHKの名画劇場って、白黒の名作ばかりでした。「カサブランカ」とか「第三の男」とか「会議は踊る」とか。60年代とか70年代のカラーになってからの作品って、NHKの放送枠にはなかなか入ってこなかったです。衛星ってチャンネルの登場で、実に渋いラインナップで映画劇場を組めるようになりましたよね。

さて「フレンチ・コネクション」。この映画でジーン・ハックマンさまは押しも押されもせぬ大スターになりました。ロイ・シャイダーさまも主演級スターになりました。ロイ・シャイダーさまに関しては、この映画のあとの「ザ・セブン・アップス」を経て「ジョーズ」「ブルー・サンダー」あたりで本格的ブレイクですが。

麻薬王シャルニエ＝レイさまを執念で追う刑事「ポパイ」＝ハックマンさまの物語。この物語は実話でございます。シャルニエがフランス経由で密輸する麻薬の販売ルートが「フレンチ・コネクション」。

フレンチ・コネクションはシャルニエとポパイの追いかけっこが最大の見所となるドラマです。この構造はパート1も2も同じ。1の実話は知ってるけど、2も実話なんでしょうか。気になるところだなあ。

ロイ・シャイダーさまがすごく良いです。ジーン・ハックマンさまも良いんだけど。ハックマンさま、年とりましたよね。「クイック・アンド・デッド」見て、なんだか悲しくなっていましたです。

次回のお知らせ。次回は「太陽がいっぱい」のご紹介です。

太陽がいっぱい

1960年フランスイタリア合作

監督 ルネ・クレマン

主演 アラン・ドロン、マリー・ラフォレ、モーリス・ロネ

「太陽がいっぱい」でございます。

太陽がいっぱいなんだこの野郎。往年の名画でございます。主演はアラン・ドロンさま。

この映画でスターダムにのしあがりました。この人、二枚目だけど悪役顔していますから、刑事役とかほとんどやってなかったです。初の刑事役が「リスボン特急」、次が「フリック・ストーリー」だったと思います。この「太陽がいっぱい」でも悪人。お金持ちの友人、ロネさまを殺し、彼のサインを真似て彼の財産を手に入れようとする貧しい若者役。

なんかすごく下品です、アラン・ドロンさま。演技なのか地なのかよくわかりませんが。

この下品さを演技として出しているならアラン・ドロンさまはたいしたものだし、監督のルネ・クレマンさまの演出力もそうとうなものです。

衝撃的なラストはあまりにも有名。物語そのものはむっちゃ普通。二時間ドラマなんかでありそうな話ですが、それを割り引いて余りある映像の美しさと音楽の素晴らしさ。私より少し上の世代の方は「我が青春のベストワン映画」に推す人が多い名作でございます。

今回は「ガメラ対宇宙怪獣バイラス」のご紹介です。

ガメラ対宇宙怪獣バイラス

1968年大映作品

監督 湯浅憲明

主演 本郷功次郎

大映ガメラシリーズの第四作。ここらあたりまでくると、かなり内容がこなれてきております。もうガメラなんか人間の子供とツーツーです。もう完全に人間の心強い味方状態でございます。それに今回の敵はシリーズ初の宇宙怪獣。わかりやすい敵が登場したせいか、わかりやすい物語になっております。これまでは地球の怪獣。バルゴンはニューギニア産だし、ギャオスは凶暴な肉食怪獣ではあったものの、まちがいなく地球産。こうなるとどっちが悪い怪獣でどっちが良い怪獣なのかって色分けが必要になってくるわけで。

そうなると人間にとってガメラは明らかに敵ではないって構図が必要であって。対ギャオスあたりですでにガメラは破壊行為を行わないおりこうさん怪獣でした。しかし「ギャオスを倒すためにやむを得ずガメラの力を借りる」みたいな話はあまり説得力がない。やっぱり普通、自衛隊はガメラも敵対怪獣も攻撃すべきであってね、ガメラを攻撃しない理由を作らないといけなくなるんですね。そこいくと宇宙怪獣はとても便利な敵でして、ガメラと人間が共闘しやすい。

バイラスってのはほとんどイカみたいな造形の怪獣。円盤に乗って地球侵略にやってきた宇宙人が合体してバイラスになります。人間体からバイラスに変身するときの描写が夢にでてくるほど強烈。子供ごころにすげえ恐かった。

すげえわかりやすい怪獣映画ですね。

この後、ガメラシリーズはもっとわかりやすい世界に突入していきますです。

さて次回は「白鯨」のご紹介です。

白鯨

1956年アメリカ映画

監督 ジョン・ヒューストン

主演 グレゴリー・ペック、リチャード・ベースハート

とにかく有名な冒険小説の映画化。執念で白鯨＝モビーディックを追うエイハブ船長をグレゴリー・ペックさまが好演しております。

でっかい鯨がいたと思いなせえ。幻の白い鯨ですな。そいつをなんとか捕まえようとして、片足を失ったのがエイハブ船長。船長は強烈な復讐心でモビーディックを追いつづけます。物語は船長の船に雇われた若い船員の目を通して描かれます。船長の登場シーンからかなりいけてます。うおおお、かっこええ～みたいな感じ。私は小学生くらいのときに、映画好きな父といっしょにテレビでのオンエアを見たはずです。そのせいか、船長の登場シーンとか、クライマックスの鯨との格闘シーンなんかはかなり楽しめましたが、中盤あたりはけっこう長かったように感じました。しかし、後半のもりあがりはすごい。半端じゃないです。船長と白鯨との戦いが終わってからまだまだ盛り上がりがあります。

ネタバレしてしまうので詳しくは書かないですが、このクライマックスシーンはかなりどんよりしました。映画を見たその日は「その場面」を思い出して恐くて眠れなかったことを覚えております。

言っておきますけど、かなりどんよりしますよ。この映画。

そんなどんよりにも負けずに、是非見ていただきたいと思います。良い作品ですよ。

次回は「恐怖のメロディ」のご紹介です。

恐怖のメロディ

1971年アメリカ映画

監督 クリント・イーストウッド

主演 クリント・イーストウッド、ジェシカ・ウォルター

懐かしいなあ。私は二つ年上の兄貴の影響で、小学校五年くらいから映画ファンでした。ちょっと生意気な小学生だったです。当時の「ロードショー」とか「スクリーン」誌上での映画スター人気ランキングではブルース・リーさま、アラン・ドロンのさま、ジェームス・ディーンさまが三強でした。女性はけっこうランキングが変動してて、オードリー・ヘップバーンさまが強かったものの、ジャクリーン・ビセットさまとかキャンディス・バーゲンさまとかの新作が公開されると、順位が変動してました。そんな時期です。「恐怖のメロディ」はそんな時期に見た映画。テレビの洋画劇場だったかな。私はその時点で「ダーティー・ハリー」とか「夕陽のガンマン」なんかを見てましたから、すっげえ期待して見てました。

イーストウッドさまが演じるのは地方ラジオ局のDJ。彼にはいつも「ミスティ」って曲をリクエストする熱烈なファンがいました。でもイーストウッドさまには、もう、超ベタベタの彼女がいたりなんかする。で、スケベなイーストウッドは「ミスティ女」と仲良くして、そこから「ミスティ女」が次第に暴走を始める。いろいろと怖い状況に陥っていくわけですな。

この映画って、元祖ストーカーものと思っていただいてさしつかえないかと思います。

しかし、私はこの映画、いちばん肝心の「怖いところ」を見ておりません。映画が始まって一時間二十分くらいで見るのをやめました。何故でしょう。答え。横で父が見てたから。「超ベタベタの彼女とのシーン」が問題だったわけで。

イーストウッドと彼女、全裸で抱き合ったりする。それを延々と映したりします。ほんま、ポルノ映画のノリです。今見たらたいしたことないんだろうけど、なんせ当時小学生でしたから。苦い顔して見ていた父が、ついに一言。「子供がこんな映画見たらあかんなあ」私も納得。すごすごと見るのをやめました。

ってことで、映画雑誌とかを読んで結末は知ってるけど、厳密にはラスト四十分は見ていないです。私にとっての幻の映画。早いうちに最後までしっかり見ようと思っております。

次回は「夕陽のガンマン」のご紹介です。

夕陽のガンマン

1965年イタリア映画

監督 セルジオ・レオーネ

主演 クリント・イーストウッド、リー・バン・クリーフ

いぐわあああ。少年時代に見た、映画ファンとしてはかなりアーリーな時期に見た作品。

マカロニウエスタンの傑作でございます。ってマカロニウエスタンとかいってもわからないだろうなあ。ウエスタンってアメリカの西部劇ですよ。ジョン・ウェインさまとかバート・ランカスターさまとかヘンリー・フォンダさまとかが出てるやつです。それに対して、イタリアで作られた西部劇ってのがあります。「荒野の用心棒」とか「夕陽のガンマン」とか「荒野の1ドル銀貨」とか。

そいつをマカロニウエスタンって呼びます。アメリカではスパゲティウエスタンって呼ぶらしいですが。このマカロニウエスタンを足がかりにしてスターになった人の代表がクリント・イーストウッドさま、ジュリアーノ・ジェンマさま、フランコ・ネロさまのマカロニウエスタン三羽ガラスって呼ばれてた三人。

クリント・イーストウッドさまが主演を務めたマカロニウエスタンの傑作です。傑作、という意味では「荒野の用心棒」のほうが評価が高いようですが、これはこれでなかなか面白い作品、だったような記憶があるのですが、「続・夕陽のガンマン」とごっちゃになってしまっております。近いうちにちゃんと確認しなきゃいけませんなあ。

次回コラムは「インファナルアフェア」のご紹介です。

インファナル・アフェア

2002年香港（中国）映画

監督 アンドリュー・ラウ、アラン・マック

主演 アンディ・ラウ、トニー・レオン、アンソニー・ウォン、エリック・ツァン

英語タイトルは無間道。無間地獄のことを指しているような。警察学校ですれ違う二人の男。警察からマフィアへの潜入捜査を命じられた警察学校の生徒。そしてマフィアから警察の動きをさぐるために警察学校に入り、警官になった男。潜入捜査員はトニー・レオンさま。マフィアに通じる警察官はアンディ・ラウさま。うおおおお。すげえ。

潜入捜査官ものや、マフィアのスパイものはこれまでもけっこうありましたが、ほとんどのものはスパイは誰だとか、裏切り者は誰だとか、そういう描かれかたをしていたような気がします。スパイが敵スパイは誰だってことを探るドラマの場合でも、相手スパイが誰だかわからないようにして、推理仕立てでドラマをつくっていくのが一般的でした。この映画の場合は物語最初にネタバレをさせてしまっております。で、その仕掛けが見事に成功しているから憎いです。スパイはこいつだったのかあ、っていうサプライズ効果をあえて切り捨て、ネタをばらすことによって、登場人物が『いつ』『そのこと』（例えばマフィア側が潜入捜査官の正体はトニー・レオンさまなのだってことにいつ気付くのか）に気付くのかってことがサスペンス効果を高めることに成功しています。

そしてそれによってかなりもりあがる人間ドラマが作られています。潜入だけど、マフィアの若者にシンパシーを抱いたり、スパイだけど普通の生活に憧れたり。

そして全てが決着した後、さらなるドラマが始まる。お互いがお互いの存在を知る。そのとき二人はどう動くか。うおおおお。はっきり言ってあまり期待しないで見た映画ですが、すげえ面白かったです。2も3も見たくなっちゃった。

アジア映画は避けて通る傾向にある映画ファンですが、そんなことってちゃいけないなあとちょっと反省させられました。

ちなみにこの作品、後に名匠マーティン・スコセッシ監督の手でレオナルド・ディカプリオ、マット・デイモン主演で「ディパーテッド」としてリメイクされますです。

さて次回は、キアヌ・リーブスさま、ジェームス・スペイダーさま主演の「ザ・ウォッチャー」です。

2000年アメリカ映画

監督 ジョー・シャーバニック

主演 キアヌ・リーブス、ジェームス・スペイダー

とっても微妙な映画ですなあ。私としてはこいつは「面白くない」部類に入る映画です。

リーブスさまは連続暴行殺人犯。スペイダーさまは彼を追う刑事。スペイダーさまはひょんなことからリーブスさまからの一方的な連絡をうけるようになってしまいます。次の被害者の顔写真を送りつけてきたり、襲われて縛られた状態の被害者を救出したり、犯人が電話かけてきたり。スペイダーさま、必死の捜索って感じです。果たして物語の決着はどうつくのでしょうか。

私は映画を見ながら、リチャード・ニーレイさまの「ウォルターシンドローム」って小説を思い出しました。この映画が「ウォルターシンドローム」的な展開を見せたら、感動するのになあって思いながら見てました。キアヌ・リーブスさまとジェームス・スペイダーさまの競演ってわりにはあまり息詰まらないです。ちょっと展開がもたもたしすぎたからでしょうか。私的にはリーブスもスペイダーも好きな俳優さんなんで、もうちょっとがんばってほしかったですね。

さて今回はヒッチコックの名作「サイコ」をガス・バン・サンド監督がリメイクしまして、今回はこの問題作のご紹介でございます～

サイコ

1996年アメリカ映画

監督 ガス・バン・サント

主演 ビンス・ボーン、アン・ヘッチ、ジュリアン・ムーア、ビゴ・モーテンセン

サイコスリラーの原点といわれるアルフレッド・ヒッチコック監督の作品を、「誘う女」のガス・バン・サント監督がリメイク。時代を現代に、モノクロをカラーにした以外は、脚本もオリジナルを使用し、カメラワークも同じにするという徹底ぶりで忠実に再現しました。でもねえ～ちょっと難しかったですね、素材が。

アンソニー・パーキンスさまとはひと味ちがった主人公をビンス・ボーンさまが演じております。

1996年12月11日、アリゾナ州フェニックス。40万ドルの大金を会社から持ち逃げしたOLのマリオン＝ヘッチさま、とあるモーテルにたどりつく。ノーマン＝ボーンさまという青年に迎えられ宿泊するわけですが...

まさかこのコラム読んでる人で結末知らない人おられませんよね。この映画の元ネタ、ヒッチコック版の「サイコ」は映画のラスト30分は劇場に入ることが禁じられたって映画でございます。原作がとにかく伝説的名作ですから、これはどんな映画作っても渋い採点されるしかないです。そういうこと承知の上で作った映画なんだと思うわけですが。

で、今回気づいたことですが、やっぱりこの作品はモノクロでなければならなかったんじゃないかと思えますね。前作が制作されたころ、時代はとっくにカラーだったんですが、ヒッチコック監督はあえてモノクロで撮影しました。今回カラーでリメイクを見てて、ああ、そうなのかって思いました。一説にはシャワーのシーンがどぎつくなりすぎるからって話でしたが、もう一ヶ所、モノクロだとある伏線をごまかせるけど、カラーだったらそれがごまかせないってところがあるなあって気づきました。さてどこでしょう。ヒッチコックが意図的にそこをごまかすつもりでモノクロにしたわけではないとは思いますが。

さて次回はベッド・ミドラーさま主演の「ローズ」です。

ローズ

1979年アメリカ映画

監督 マーク・ライデル

主演 ベッド・ミドラー、アラン・ベイツ

かなりすごい映画でした。高校時代の友人が、この映画のサウンドトラックを持ってきて、「すごくいいから絶対この映画見ろ」って言ってました。二十年かかりましたね。映画みるまで。ベッド・ミドラーさまは私にとって「ローズ」の主演女優のイメージが強烈だったので、その後、とんでもない技量をもったコメディエンヌだと知ってびっくりしました。でもベッド・ミドラーさまがこの映画のサウンドトラックを歌っているのだとしたら、彼女の歌唱力ってとんでもないですね。表現力もとんでもない。「この人こんなに才能あったんや」って映画のオープニング曲から思わされてしまいます。

女性ロック歌手ローズのステージと、過労と麻薬で破滅していく様子を描く音楽映画です。この映画のモデルはかのジャニス・ジョプリンさま。

彼女の歌には、女のかわいさ、哀れさ、醜さ、そういった女そのものが見事に表現されていました。本当にすごいシンガーだったわけですが。彼女をモデルにしたこの作品、ベッド・ミドラーさまの演技と歌唱力がポイントにしかないわけで、彼女は見事にローズ＝ジャニスさまを演じきりましたです。

物語のクライマックスは彼女のホームタウンでのウエルカムバックコンサート。逆に言うと、そのライブ後に彼女は破滅してしまう。ってことはつまり、「その日」に向かってひたすらつき進んでいくローズの鮮烈な生き方を描くわけです。ロックと酒とドラッグと。そして過労でフラフラになって。そんな身体で恋をして。いぐわああああ。

定められた結末に向かってつき進んでいく壮絶な人生。私的には傑作であります。

さて次回。カテゴリー分けにちょっと困るホラー作品。ナオミワッツ主演の「ダウン」のご紹介です。

ダウン

2001年アメリカ映画

監督 ディック・マース

主演 ナオミ・ワッツ、ジェームス・マーシャル、エリック・サール、マイケル・アイアンサイド

「ザ・リング」シリーズに主演したナオミ・ワッツさまの主演作品です。意思をもったエレベーターが人を襲うってえとんでもない話。

同じエレベーターで事件が続けば、普通の間感ではエレベーターを使用禁止にして徹底調査ってのが当然だと思いますが、そのエレベーターで事件続発ってのがまずありえませんか。そこいらをどう説得力もって説明するかがポイントだったわけですが。

超高層ビルのエレベーター。そのエレベーターを長時間使用禁止にしたらビルが大損するからって論理で危険なエレベーターを使用し続け、そのおかげで被害者続出。「タワーリング・インフェルノ」を思い出しましたねえ。

まずビルで開講されているマタニティビクスの妊婦たちが閉じ込められます。同じ日の深夜、警備員がエレベーターのドアに首をはさまれ、そのまま動きだしたエレベーターに首を切られるというショッキングな事故が起こります。おお、これは「バイオハザード」にあったような場面。ジャーナリストのワッツさまはこの事故の謎を探ろうとします。おお、ここらの展開は「リング」やないですか。さてさて、ここからは「着信アリ」につなげるか「ボイス」につなげるか。そう思いながら見てたらおやまあ。怨念ホラーじゃなくて、ハイテクホラーのモンスターホラーだったんだ。事故を起こしていた存在は人工〇〇だったんだ。それに気づいたエレベーターエンジニアのマーシャルさまは「ダイハード」みたいな活躍をしちゃいます。

どこかで見た映画が大集合したような感じ。まあこれはこれでサービス満点のサスペンス描写たっぷり楽しめましたが。

あまり深読みせず、素直にびっくりしたりどっきりしたりって楽しみ方をしていただきたい映画ですね。こいつは。

さて次回。エロティックSFホラーのシリーズ第二作「スピーシーズ2」です。

スピーシーズ2

1998年アメリカ映画

監督 ピーター・メダック

主演 マイケル・マドセン、ナターシャ・ヘンストリッジ、マージ・ヘルゲンバーガー

前作のコラムは記念すべき上巻第一作品目でございます。

種の保存を全てに優先するってエイリアンがいたとしなさい。しかもそいつは火星探検をしたヒーロー宇宙飛行士のDNAにとりついた。彼はエイリアンに取り込まれてしまいます。というか、エイリアンの遺伝子が組み込まれた状態で地球に戻ってくるわけですね。宇宙飛行士、火星から帰っていきなりエッチしまくり。で、遺伝子あちこちにふりまきまくり。一方、帰還した宇宙飛行士の血液検査を担当した博士が死体で発見されます。殺された博士の傷口からエイリアンのDNAが検出されます。そのDNAは前作滅ぼされたエイリアンのDNAと酷似していたことで、第一作で女性エイリアンと対決したマドセンさまが再び召集されます。

かつてマドセンさまとともにエイリアンと戦った女性博士ヘルゲンバガーさまは研究所の所長に昇進しています。で、エイリアンのクローンをつくり、イブ=ヘンストリッジさまと名づけて研究しております。さてさて、宇宙飛行士とエッチした女性はその場で子供を産み、死んでしまう。ということはエッチした回数分子子供が生まれるわけで、大量の子供エイリアンが生まれます。エイリアンは三週間で蛹になり、羽化すると生殖能力をもつようになります。さあどうするようになる。やがてイブは宇宙飛行士エイリアンとテレパシーで交感、彼とエッチするために研究所を脱走。

いぐわあああ。

いかにも第三部につながるラストにはちょっと笑いました。第三部は三体の女性型エイリアンが登場してエッチしまくるんだそう。

さて、次回は日本もののホラーでございます。「富江・リプレイ」まいりましょう。

富江・リプレイ

2000年大映作品

監督 光石富士朗

主演 山口紗弥加、宝生 舞、窪塚洋介

ホラーメーカー、伊藤潤二様原作の連作ホラーの第二弾。あのなあ、いきなり冒頭、少女の腹の中から生まれるなよ、富江、って感じでございます。

殺しても殺しても死なない美少女、富江の物語第二弾。少女の胃の中から首だけの状態で生まれてきた魔性の美少女・富江。再生して普通の少女の姿になった富江＝宝生さま、生まれた(?)病院の入院患者窪塚さまの友人の家に行きます。富江の悪意の力でだんだん変になっていく友人。ついに彼は富江を殺し、首を切断してそれを埋める。しかあし。首を切断された胴体からまた頭が生えてくる。きゃああああ。一方、最初に富江の誕生に立ち会った医師や看護師たちはみんな病院から姿を消したり、自殺したりします。そのうちの一人が山口さまの父親。彼女の父は行方不明。日記だけが残されていて、そこには意味不明の記述と「富江」という名前が。友人から聞いた「富江」という名前を口にしていた窪塚さまと知り合った山口さま。二人は協力しあって「富江」の存在の謎に迫ります。しかし彼女の目の前に姿を見せたのは... 富江。きゃああああ。

宝生 舞さまって何代目の富江なんでしょう。初代はおそらくテレビドラマだったんじゃないでしょうか。白井 晃さまが出演してました。二代目が菅野美穂さまのはずだから、三代目でしょうか。しかし、みんなみごとにキレイ系の化物顔。って書いたら怒る人いるかなあ。

本作は不気味にしようとしすぎてるように感じてしかたないです。もっとストレートに作ったほうがよかった思うんですが。不気味に気持ち悪くしようとしすぎて、逆にあんまり恐くない。へんなの。

さて次回は。ジョン・トラヴォルタさま主演の「ソードフィッシュ」です。

ソードフィッシュ

2001年アメリカ映画

監督 ドミニク・セナ

主演 ジョン・トラヴォルタ、ヒュー・ジャックマン、ハル・ベリー

こいつは予想してた以上に面白かったです。トラヴォルタさまが思っていた以上によかったです。というか、トラヴォルタさまはジョン・ウー監督やタランティーノ監督の作品に起用されてから円熟してきましたですね。

こうなると、良い作品がどんどん彼の周囲に集まってくるというか何というか。本作でも彼はカリスマ的な魅力をもつ悪の天才を演じております。いきなりの爆破シーンの迫力たらないです。まことに素晴らしい。

物語は天才ハッカーとして世界じゅうに知られているジャックマンさまを軸に進んでいきます。彼は離婚した妻から娘をとりかえすため、謎の男トラヴォルタさまがもちかけてきた仕事を引き受けます。麻薬取締局の秘密作戦「ソードフィッシュ」。その作戦で作ったダミー会社が莫大な利益を生み出してしまい、やがてその作戦は終了。その利益の95億ドルをコンピューター回線に侵入して奪うというのがトラヴォルタさまの作戦です。ハッカーとして逮捕歴のあるジャックマンさまの行動はFBIにマークされています。一方、トラヴォルタさまの情婦っぽいハル・ベリー、彼女はジャックマンさまに「自分はガブリエル（トラボルタさま）を逮捕するために潜入している麻薬捜査官である」と打ち明けます。

おお、すげえねじれた人間関係。ジャックマンさまはFBIに協力することで、子供と暮らせるようにしてやると言われます。トラヴォルタさま逮捕に協力する決意をしたジャックマンさま。彼はやがて回線にアクセスするシステムを完成させますが、トラヴォルタさまの事情を知ることになります。トラヴォルタさまはある政治家の依頼で動いていたわけですが。しかし途中でその依頼関係は決裂。政治家はトラヴォルタを消そうとして、返り討ちにあってしまいます。かくしてトラヴォルタは単身で巨額の資金を手に入れようとするわけです。

二転三転する物語。ドンデン返しに次ぐドンデン返し。ラストはとにかく啞然。そして思わずニヤリ。いやあ、面白い映画見せていただきました。

私好みです。この映画。

次回は、ジーン・ハックマンさま主演の「アンダー・サスペション」でございます。

アンダー・サスペクション

2000年アメリカ映画

監督 スティーブン・ホプキンス

主演 ジーン・ハックマン、モーガン・フリーマン

連続少女レイプ事件の真相を描くサスペンスでございます。

少女の遺体が発見されます。第一発見者は弁護士ハックマンさま。事件を捜査するのはフリーマンさま。フリーマンさまはハックマンさまの証言の矛盾点に気づきます。二週間前に発見された別の少女の遺体発見現場でも、彼の車が目撃されています。くさいなあ。とにかく臭い。あらゆる状況が彼を犯人だと示している。フリーマンさまはハックマンさまに対する扱いを参考人の任意捜査から逮捕に切り替え、捜査を継続します。フリーマンさまはハックマンさまの妻が事件の鍵を握っているのではないかとにらみます。フリーマンさまはハックマンさまの妻を参考人として呼びます。妻はハックマンさまに対して批判的。ハックマンさまが不利になる証言も積極的に行います。妻はどうやら彼女の妹の娘（妻のめいですな）とハックマンさまが妙に仲がよいことから疑念を抱いていたようです。妻は警察からの任意の家宅搜索の申し出を受け入れる。写真が趣味のハックマンさまの暗室からは、直接犯行を立証するようなものでこそありませんが、ハックマンさまの少女性愛嗜好を照明するような写真が多数発見されます。二週間前の事件の現場のすぐ近くで、ハックマンさまに買われたという若い娼婦も証言する。

妻が自分に不利な証言を始めたと知ったハックマンさま、ついに観念して自供をはじめます。彼は「二人の少女は自分がレイプし、殺した」と自供します。そしてその頃...

ここから先は書きませんぜ。

これでハックマンさまが犯人で、頑なに態度をとり続けるハックマンさまをいかに自白させるか、というサスペンスだったら面白くないなあと思ってましたが、大詰めでハックマンさまが自供しちゃった。なあんや、と思ってたら、まだ話の続きがありました。うむむ。でもこの自供の場面はあとで見たらちょっと無理があるように思います。もう少しこなれてて欲しかったように思いますです。

次回予告。アニマル・ホラー・アンド・サスペンスでございます。ジョン・ボイドさま主演の「アナコンダ」でございます。

アナコンダ

1997年アメリカ映画

監督 ルイス・ロッサ

主演 ジェニファー・ロペス、アイス・キューブ、ジョン・ボイト、エリック・ストルツ

はいみなさんこんばんは。今日は怖い怖い映画をご紹介しますんですねえ。

ジョン・ボイトさま主演の「アナコンダ」でございます。少し前のアニマルホラーだと、着ぐるみ・ハリボテを駆使した撮影が当たり前でしたが、本作では実物のアナコンダを使った実写とCGをいい感じで合成させてサスペンスを盛り上げております。

伝説の民族を求め、女性監督ロペスさま率いる映画の撮影隊チームがアマゾンにやってまいります。彼らは密猟者ボイトさまを道案内として雇いますが、彼の目的は巨大蛇アナコンダを生け捕りにすることだったわけです。

この手のアニマル系ホラーサスペンスのテキストといいますと、かのスピルバーグさまの「ジョーズ」につきると思うわけですが、今回もやっぱり、その定石を踏んでくれております。冒頭、いきなりハンターが襲われる場面とかは、物語構成上、ジョーズで最初に襲われる女性と同じですよ。途中から一人また一人やられていくあたりのドラマ運びは「エイリアン」を思い出してしまった。そう思ったら人間同士で殺しあったりするし。やっぱり一番凶悪な生物は人間なんではないかな。

CGによるアニマルホラー、けっこう新鮮に感じてしまいました。モンスターホラーのCGはけっこうあったと思うんだけど、実在の生物、特にアナコンダの皮膚の質感がとても素直に表現されていたので、「やや、お主なかなかやるな」とか思ってしまいましたです。

さて次回は。ハリウッドに行ったジャパムービー。役所広司さま主演「シャル・ウィ・ダンス」のご紹介です。

Shall we ダンス？

1996年日本テレビ、博報堂、日本出版販売

監督 周坊正行

主演 役所広司、草刈民代、竹中直人、渡辺えり子

ハリウッドでリメイクされた、傑作映画ですね。かのリチャード・ギアさまをして、「役所さんの演技はパーフェクトだ」と言わせた名演が光ります。「ファシイダンス」のお坊さん、「シコふんじゃった」の相撲と、ひと味違うテーマに取り組んできた周坊監督。今回もやってくれてますね。

主人公は中年サラリーマン役所さま。彼は会社帰りの電車の窓から、社交ダンス教室の窓辺に立つ女性を見ます。その女性が気になってしかたない。教室の窓には「見学自由」なんて書いてあるわけです。役所さま、勢いで教室に入り、ダンスを練習することになります。ダンス教室には渡辺さま・竹中さまって先輩がおります。役所さまと同じ初級コースには「引越しのサカイのおじさん」（名前が出てこない〜）とか田口さま（おでぶの元コメディアンのは今は役者さん。これも下の名前が出てこない〜）とかがいます。窓辺の君は草刈さま。彼女はイギリスでプロダンサーを目指していましたが、突然のコンビ解消で、新しいパートナーを探すために帰国しています。で、ダンス教室を経営する父から、ダンスを教えることを命ぜられ、嫌々ながらダンスを教えているってわけです。

徐々に役所さまは社交ダンスの世界にはまりこんでいきます。役所さまの奥さんは、「特定の曜日に帰りが遅い」「女性の香水の匂いがする」なんてことが心配で、探偵を雇って旦那の浮気調査とかを始めます。この探偵が柄本 明さま。なんかねえ、絶妙のキャスティングですよ。やがて役所さまはダンスのコンテストに、渡辺さまのパートナーとして出場することになります。真摯に、一生懸命ダンスに取り組む役所さま。彼の姿が、やがてプライドでこりかたまった草刈さまのダンスに対する考え方を変えていくことになるわけですね。

とにかく物語の流れが巧みです。次から次へといろんなことが起こります。でもその一つ一つが新鮮で、見ていて退屈しません。社交ダンスなんて世界、私もわからないのですが、そんな知識があるなし関係なしにグイグイひっぱっていく力を持った快作です。こいつはぜひゆっくりと見ていただきたい作品ですなあ。

さてさて次回は... これも傑作です。トム・ハンクスさま主演の「グリーンマイル」をご紹介します。

グリーンマイル

1999年アメリカ映画

監督 フランク・ダラボン

主演 トム・ハンクス、デビッド・モース、ボニー・ハント、マイケル・クラーク・ダンカン

ある刑務所で起こった奇跡の物語。時は1935年。ハンクスさまはコールドマウンテン刑務所の看守主任です。

彼は部下のモースさまとともに死刑囚監房を担当しています。ハンクスさまは重症の泌尿器病を患っています。ある日、幼女姉妹虐殺の罪で死刑を宣告された黒人の大男、ダンカンさまが護送されてきます。彼には不思議な力がありまして。ヒーリング能力ですな。手をふれるだけで相手の病んだ部分を癒すことのできる力でございます。

えっと。日本の人にはちょっとなじみ薄いと思いますが、キリスト様がみせた奇跡の力ってのは、このヒーリング能力ですな。日本では超能力ってえとテレパシーだとかサイコキネシスとかを連想する人が多いでしょうが。ダンカンさまはハンクスさまの泌尿器病を治してしまいます。それから、同じ死刑囚房の囚人が飼っている（飼っちゃいけないんだらうけど）鼠がおりまして、そいつが新入りのイヤキチの看守に踏み潰されてしまいます。ダンカンさまは死にかかったその鼠の命を助けたりします。小さな奇跡が次の奇跡を生む。やがてハンクスさまはダンカンさまのあまりの純粋さにひとつの結論にたどりつきます。ダンカンさまは他人を手にかけることのできる人間ではない。

しかし彼の刑の執行の日が近づいてくるわけですな。

かわいそうな話。でもええ話やなあ。死刑囚と看守の心と心の交流の物語。この交流の軸となるのがただ超能力ってだけで、これは熱い人間ドラマなんだあ。

って思ってたら。物語最大の仕掛が、最後になって明らかにされる。これには驚きました。果たしてハンクスさまは癒されたのでしょうか。それとも他の何かを背負うことになってしまったのでしょうか。

原作はスティーブン・キングさま。さすがでございますね。

さて次回予告。井上陽水さまのテーマ曲でひたすら有名になった映画。「少年時代」のご紹介です。

少年時代

「少年時代」制作委員会作品

監督 篠田正浩

原作 柏原兵三、藤子不二雄A

主演 藤田哲也、堀岡裕二、山崎勝久、小日向範威、岩下志麻、細川俊之、芦田伸介

数年前、社員旅行で京都に行ったときに、NHKBSでたまたまやってた作品です。

なんとなく見始めましたが、ついつい見入ってしまいました。かなり集中してみてしまいましたですよ。

原作は藤子富士夫A様の漫画「少年時代」です。しかもその漫画にも原作があります。柏原兵三様の小説でございます。今回の記事を書くにあたって、いろいろ調べましたが、原作小説を読んで感激した藤子先生が、ご自身の疎開経験をもとに書かれたのが原作漫画。

終戦直前の富山が舞台。主人公の少年藤田さまは大阪からの疎開で富山にやってきます。彼の母は岩下さま。父は細川さまで、軍関係の仕事に就いております。藤田少年、絵に描いたようなボンボンです。富山の同級生たちが見たこともないような本を大量に持っていたりします。少年に最初に近づいてきたのはガキ大将の堀岡さま。どうやら彼は他の同級生たちに、藤田さまと話をするなど言っているようです。堀岡少年、ガキ大将だけあって口より先に手が出る。藤田少年は友人のそんなところに不快感をもつわけですな。同学年の疎開組の女の子に子分呼ばわりされて反発したりする。

やがて学級全体がガキ大将に反発するなんて事件が起きたりする。ガキ大将、失脚。彼はいじめられっこになってしまいます。それでも彼と友達でいたい藤田少年。なんかねえ、少年時代の微妙な心の動きなんかがすげえでております。でねえ、主題歌は有名な、井上陽水さまの「少年時代」なわけですから、結末の一番盛り上がるところでこの曲が流れることはわかっているわけ。

で、主人公は東京から富山に疎開してきた少年だし。終戦になる時期とかわかっているわけだし。流れますよ。「少年時代」。思いっきり泣いちゃった。

少年時代のあだこうだ。時代は違っても「あるある」って感じです。なんか、小学校に通ってたころにあったあんなことこんなこと、すげえ思い出しちゃいました。

さて、今回は。「ガメラ対大悪獣ギロン」でございます。

ガメラ対大悪獣ギロン

1969年大映映画

監督 湯浅憲明

主演 加島信博、笠原玲子

人類の敵だった第一作。バルゴンの登場で、いきなり破壊活動から卒業した第二作。いきなり子供の味方になっちゃった第三作。地球を守った第四作。この第五作あたりまでくると、完全に正義の味方ですなあ。いいことだか悪いことだかわからないですが。まあ正義の味方の怪獣ってキャラが完成してしまうと、あとは敵キャラをうまく出していけばそれだけで物語ができてしまいますから、楽していえば楽なんです。

今回物語は宇宙に広がります。大悪獣ギロンと地球最強のガメラを戦わせて、ガメラを倒して宇宙最強の怪獣の称号を手に入れようと思った宇宙人が、ガメラを拉致してある惑星でギロンと戦わせます。ガメラ対ギロンの前に、ギロン対宇宙ギャオス、みたいな場面があったりします。宇宙ギャオスめっちゃ弱いぞ。

ギロンは包丁に目と口をつけたような、実に適当な造形の怪獣です。まあそういう適当なデザインだからかえって怪獣的な凄みはあるんですが。

とにかくすっかり大人になったガメラとギロンの戦いが見どころ。まあ特撮ですからねえ。それ以外に見どころとかあったら変だけど。

さて次回は「猿の惑星」をご紹介します。

猿の惑星

1968年アメリカ映画

監督 フランクリン・J・シャフナー

主演 チャールトン・ヘストン、キム・ハンター、ロディー・マクドウォール

あまりにも有名なSF映画。傑作中の傑作と呼んで良いと思いますね。

この作品が高い評価を受けたおかげで、作品はシリーズ化され、連続テレビドラマまで制作されました。ティム・バートン監督もリメイクしました。ルパート・ワイアット監督がさらに新エピソード「猿の惑星・創世記」を撮ったあたりは記憶に新しいお話でございます。それくらい素晴らしい作品でございます。

ヘストンさまが演ずるのは超高速宇宙船のテイラー船長。物語冒頭で重要な伏線が説明されます。高速を超える速度で長期間の宇宙旅行を行うため、船内と地球の時間の流れが異なるわけですね。人工冬眠なんて設定もあったと思います。宇宙船クルーの一人が人工冬眠装置の不具合でミラ化して死んでしまう、みたいな事件も起きます。

宇宙船はある惑星に不時着。その惑星はすごく地球に似ております。人間に似た生物もいる。しかしその「人間」には話す能力がない。地球での「人間」に代わって地球上を支配しているのはなんとお、猿だったわけです。オランウータンの政治家。ゴリラの軍人。そしてチンパンジーの科学者。おお、見事なキャラ分け。ヘストンさまは猿たちの人間狩りにつかまってしまいます。拘束されるときに喉に負傷し、声が出せなくなったヘストンさまは、他の人間たちと同じように檻に閉じ込められ、あわやチンパンジーたちが行う生体実験のモルモットになりそうになります。チンパンジーの科学者はハンターさま＝ジーラとマクドウォールさま＝コーネリアス。二匹はヘストンさまが文字を書くのを見て、ヘストンさまの持つ知能を確信し、彼とコミュニケーションをとろうとします。そしてそして、知能を持った「人」ヘストンさまは猿の支配する世界からの脱出をはかることになります。そしてあまりにも衝撃的なラスト。私はこのラストを見て、マジ吐きそうになりました。それくらい強烈なラストでしたです。

とにかく特殊メイクも筋運びも素晴らしい。歴史に残る名画と言わせていただきます。

次回はニコール・キッドマンさまの「冷たい月を抱く女」のご紹介です。

冷たい月を抱く女

1993年アメリカ映画

監督 ハロルド・ベッカー

主演 ニコール・キッドマン、アレック・ボールドウィン、ビル・プルマン、ジョージ・C・スコット

このお話は映画を見るより先に原作を読みました。その原作があまりにも強烈だったのでよく覚えております。しかし、しかし。映画そのものの印象はちょい薄い。原作に負うところが大きかったのでしょうかね。

とはいえ。うむむ。ちょっと書きにくい映画です。ジャンルとしてはサスペンス。物語前半からかなり周到な伏線が張ってあります。あまりにも普通に物語が進んで、その普通に進みすぎる物語に「え？なんで？」って思ってたら、物語そのものがとんでもないフェイクであって、ありゃありゃ、何じゃこりゃって感じの物語。

話に集中すればするほど騙される。主人公たちに感情移入すればするほど騙される。だまされたくなければ全てを疑うこと。ひょっとしたら物語そのものが騙しかもしれませんです。

って書くからいけないんだらうなあ。推理サスペンスとかは、「この話、意外ですよ」とか「だまされないように見てくださいね」とか「犯人が意外ですよ」とか言われた瞬間に「だまされないぞ」モードに入ってしまうから、その瞬間に素直に物語を見ることができなくなってしまいます。これであまり楽しむことができなかつた物語はションコネリーの「理由」。この話は前にもしましたですね。

肝心の映画の話がほとんど書けなかつたですね。というより、この映画に関してはあまりくくだ書かないほうがいいと思います。とりあえず見たまま感じたままにいろんな人に感情移入しながら見ていただきたいです。そのほうが楽しめます。

さて今回は、「ファインディングニモ」をご紹介します。

ファインディング・ニモ

2003年アメリカ映画

監督 アンドリュー・スタントン

声の吹き替え 木梨憲武、室井 滋

米国ピクサー社制作の作品ですね。アニメ技術の向上はこんなに楽しい映画を生みましたです。フルCGアニメでございます。

ファインディングニモ。最初、字面だけ見て「ファイティングニモ」って読んでしまいました。戦わへんっちゅうねん。

カクレクマノミの親子が主人公。父が「ニモ」という名前の子供魚を探す物語。だから「ファインディング・ニモ」。

父カクレクマノミ（声は木梨様です）は、亡き妻の忘れ形見の息子ニモと暮らしております。「サカナの学校」に入学したニモ、父の言いつけに背いて「人間が現れるポイント」に行ってしまう、案の定人間に捕獲されてしまいます。ここから父魚の涙ぐましい大冒険が始まるわけですね。とにかく物忘れが激しい青い魚のドリー（声は室井様）とともに、仲間の魚が見た「人間のボートに書いていた文字」、シドニーという言葉だけを頼りに、オーストラリアのシドニーまで息子を探す旅にでます。

途中出会うのはやっぱり鮫だとか海亀だとかクラゲだとか。

親魚にも子魚にも試練が与えられ、どちらの魚もそれを乗り越えていきます。さすがピクサー。

ご家族でご覧いただきたい一編でございます。

さて次回はまたまた特撮。「ガメラ対大魔獣ジャイガー」をご紹介します。

ガメラ対大魔獣ジャイガー

1970大映作品

監督 湯浅憲明

出演 高桑 勉、ケリー・ドリス、キャサリン・マーフィー

実に時代を感じさせる映画でございますよ。大映のこの作品と、東宝の「ゴジラ対ヘドラ」の二本は、怪獣映画のなかでもその時代性ってのが非常に明確に描かれているように思います。もちろん第一作の「ゴジラ」は、ビキニでの核実験によって日本籍漁船が被爆したって事件が作品全体に暗い影を落としていたわけだし、エビラ登場編の「南海の大決闘」（でしたっけ、タイトル）とか「ガメラ対バルゴン」なんかは、南の島のどこかには想像を絶する怪獣がいてもおかしくないっていう無邪気な世界観が許された最後の時代の作品だと読めるわけですが。

これはこれで微妙な世界。作品の舞台は1970年、大阪万博が開催された年です。南の島（また出ました）ウエスター島の遺跡に祀られていた「悪魔の像」。こいつが万博出品のため日本（というか大阪）に運ばれてきます。しかしこの像の力で封印されていた魔獣ジャイガーが復活。ジャイガーは像を追って大阪にやってきます。んでガメラはジャイガーに引き寄せられるように大阪へ。なんとガメラとジャイガーは万博の建設が進められている会場のすぐ近くで戦うことになります。すげえすげえ。

映画ではガメラの体内にジャイガーが卵を産み付け、子ジャイガーがガメラに寄生するなんて設定があります。それはそれでショッキング映像。けっこうこの作品はガメラ最大の危機を描いていたかもしれません。

建設されかかった万博会場のすぐ横でガメラとジャイガーが戦うなんて、あの時代をぎりぎり知っている私にとってはもう涙が出そうな設定です。この後、仮面ライダーが万博跡地でショッカー怪人「死神カメレオン」と戦ったのも懐かしい話ですよ。

さて次回はコッポラ監督の「ペギー・スーの結婚」をご紹介します。

ペギー・スーの結婚

1986年アメリカ映画

監督 フランシス・フォード・コッポラ

出演 キャスリン・ターナー、なんとニコラス・ケイジ

すげえ前に見た映画です。公開は86年ですから、大学生のころかなあ。

この時期は急速にビデオデッキが普及しはじめた頃で、「ビデオレンタル」ってものが文化として定着しはじめたころだと思います。映画館で見逃した作品を、一泊か二泊で千円以下で自宅で見られるようになった最初のころの作品でございます。ひょっとしたら一週間レンタルってシステムのはじめの頃かもしれないですね。

なんでこんな話を長々と書いたかというと、この頃に大量にビデオを通して映画を見たわけです。どちらかというと苦手ジャンルの恋愛映画も、この時期リリースされたものに関してはけっこう見てるかもしれません。

まあねえ。こいつは純粋な恋愛映画ではなく、恋愛ファンタジー映画でございます。

もしも家庭をもっているあなたが青春時代に戻ることができたら。あなたはそれでも今のパートナーを選びますか？ってとんでもない仮定を投げかけてくる作品。

難しい問いやなあ。最近、マジでそんなことをけっこう考えます。ってことは私は早くも人生の総括にかかっているのでしょうか。少なくとも、「あの日あのとき、あの子にあの一言が言えていたら、自分の人生は変わっていたかも」ってことをやたら考えたりします。

作品の主人公ターナーさまは、マンネリながらも幸せな家庭生活を送っている。そんな折、彼女は事故か何かにあって、意識だけが過去に飛ばされるわけですね。おお「ウィングス・オブ・ゴッド」やんけ。というか、ネタバレになるからタイトルが書けない「あの作品」というか。学生時代に戻ったターナーさま、自分が知っている未来を選ぶのか、自分が知らない新しい未来を選ぶのか。

おお、究極の選択。私はどうするって？うむむ。答えは出てるけど、あえてノーコメントってことで。

さて次回はチャールトン・ヘストンさま主演の人気SFシリーズ。「続・猿の惑星」でございます。

続・猿の惑星

1970年アメリカ映画

監督 テッド・ポスト

出演 チャールトン・ヘストン、ジェームス・フランシスカス

傑作「猿の惑星」の続編です。でもなあ。これはなあ。ちょっとなあ。前作のラストで海岸でへたりこんでしまったヘストンさまのその後を描いた作品、ではないのだ。

えっと、消息不明になったヘストンさまの宇宙船。彼らの消息を調べるために、第二弾の宇宙船が発射されます。うむむ。ここからして話に無理がありますなあ。この宇宙飛行計画ってのは、高速に近い速さで進むため、地球時間と宇宙船内の時間の流れ方が違う。そんな危険性があることが最初からわかっていた計画だったはずなんです。前作の冒頭でヘストンさまがそう言ったから。だから宇宙船の時間は半年なんだけど、地球では十数世紀が経っているはずで、それが物語のポイントだったわけなんですね。

そんな計画で地球を出発した宇宙船の消息が不明になって、普通その消息を探る宇宙船は派遣しませんでしょ？自分の生きている世代ではその宇宙船計画が成功したか失敗したかさえわからないんだから。で、消息を調べるために探査チームが派遣されるってことは、とんでもない初期の時点で計画に問題があったってえことがわかったってことになるし。難しいなあ。宇宙旅行ものは。とりあえずその探査チームのパイロットがフランシスカスさま。彼はヘストンさまと同じように未来の「猿の惑星」にたどりつき、同じように捕われて逃げ出して、ヘストンさまの後を追います。結局ヘストンさまはどこにいたかってえと、人間に出会うわけです。核爆弾で地球をボロボロにして、放射能の影響でミュータント化した「地底人」として人類は生きていたわけです。おお、ダークな未来図。そしてそこからもっとダークな方向に物語は向かいます。私はシリーズの中でこの作品が一番苦手。救いがなさすぎます。何を描きたかったんだろって思ってしまう。

今回はまたまた特撮。「ガメラ対深海怪獣ジグラ」でございます。

ガメラ対深海怪獣ジグラ

1971年大映作品

監督 湯浅憲明

出演 坂上也寸志、グロリア・ゾーナ

昭和ガメラ最後の作品。作品としてはこの後、総集編っぽい「宇宙怪獣ガメラ」なんてえ作品がありますが、こいつは総集編というか、過去のフィルムをつなぎあわせてむりやり映画を作ったものですから、私的にはガメラシリーズには入らないです。

さてガメラ対ジグラ。えっと。この記事を書くにあたっていろいろなサイトのガメラフィルムグラフィックを拝見しましたが、うむむ。実に微妙ですね。第一作のガメラ登場からシリーズを見つづけ、ガメラ関連のサイトを開設してるようなディープなファンでさえ、この映画を見ていないとか平気で書いていたりします。ガメラ対ジャイガーまではやっぱりほとんどの人が見ております。この映画を見ていないって人が多いってことは、つまりはシリーズそのものが終わるべき時期に近づいていたってことです。私がこの作品を見たのはロードショーのとき。小学校二年生のときですね。

公害で自分の母星、ジグラ星に住むことができなくなってしまったジグラ星人。彼らは地球侵略を企みます。この宇宙人の前に立ちはだかるのが我らがガメラでございます。

なんかねえ、作品そのものがめっちゃしょぼいって感じるのは私だけでしょうか。小学校二年生当時、私は怪獣ブロマイドを集めていました。この映画のブロマイド、すげえかっこよかったんですごく映画を期待してたのですが、残念ですがそのブロマイドのほとんどが宣伝用の合成スチールってやつでした。映画の一場面ではなかったです。とっつてもがっかりしたことをよく覚えております。

さて。次回は人気SF Xシリーズの完結編。「バックトゥザフューチャーパート3」でございます。

バック・トゥ・ザ・フューチャー・パート3

1990年アメリカ映画

監督 ロバート・ゼメキス

出演 マイケル・J・フォックス、クリストファー・ロイド

かなり面白いシリーズだと思っておりますよ。私的にはお気に入りです。

2と3は並行して撮影されたそうですね。3で生きてくる微妙な伏線が2で張られていたりします。あと、全作共通して楽しむことができるシリーズお約束ネタとかもあちこちに見られるし。何より使われている英語がそんなに難しくないのがいいと思います。ヒヤリング教材としてはかなり良いセンいってると思うのは私だけでしょうか？

前作（パート2）ラストで落雷の直撃をうけ、過去に飛ばされてしまったドク＝ロイドさまとタイムマシン「デロリアン」。主人公のマーティ＝フォックスさまは「その時点（ってことは若いころのビフから未来スポーツ年鑑を取り戻した時点ですよ）」でタイムマシンを作りうる唯一の男、「その時点でのドク」に会いにいきます。そして「その時点でのドク」の協力で時間の逆行に成功し、「過去に飛ばされたドク」と合流することに成功します。

そこは西部の町でございまして、やっぱりいたのが父親そっくりの父親のご先祖さまと母親そっくりの母親のご先祖さま、そして父の宿敵ビフそっくりのビフのご先祖さま。

やっぱりマーティ君巻き込まれる。こいつはもうお約束だからいいんです。巻き込まれても。特にパート3はラストにも思わずニヤリのオチがついていたりして、笑えるだけじゃなくてとてもいい気分させてくれる一本でございませう～

次回はファンタジー映画の傑作。「フック」のご紹介でございませう。

フック

1991年アメリカ映画

監督 スティーヴン・スピルバーグ

出演 ロビン・ウィリアムス、ダスティン・ホフマン

えっと。個人的な話で申し訳ございませんが、この映画は結婚前につきあっていた大好きだった女の子と見に行った映画です。その子とのデートはこの映画を見に行った一回きり。映画見について、食事して、家まで送って帰ったかな。当時も、もちろん今も、ファーストデートで18禁の場所にお誘いする度胸なんてない人間ですもん。この子じゃないけど、結果的にそれが理由でふられたこともあったなあ。なはは。だから「フック」ってえと、映画そのものよりも、映画館でチラチラ見てた、その女の子の横顔しか覚えておりませんです。おお、青春やなあ。

まあこういう話はどうでもええんですが。

ピーター・パンの後日談みたいな感じで物語ははじまります。かのピーター・パン、あろうことが自分がピーター・パンだったことを忘れ、おっちゃんになって普通に暮らしてたりします。ここんこの構造面白いですね。で、いろいろあって例の「ネバーランド」に戻ることにになります。でも大人になってしまっただけで子供の心を忘れた「おっちゃんピーター・パン」はもう飛ぶことができない。哀愁あふれるこのピーター・パンをロビン・ウィリアムスさまが熱演。

ネバーランドには、やっぱりおりました、この人。フック船長でございます。ピーター・パンとフック船長はやっぱり宿敵だから、やっぱり戦うことになるわけですなあ。このフック船長役はダスティン・ホフマンさまが怪演しております。なかなかええ感じです。

まるでおもちゃ箱をひっくり返したようなキラキラした世界。スピルバーグさまの面目躍如かな？ピーター・パンと大人ってネタは、「トワイライト・ゾーン」の第二エピソードでちょこっととりあげてましたよね、スピルバーグ監督は。あの作品で消化不良だった、というか表現しきれなかった部分を改めてやり直したんでしょうか？そんな印象を受けました。

次回はまたしても特撮。「宇宙怪獣ガメラ」のご紹介でございます。

宇宙怪獣ガメラ

1980年大映作品

監督 湯浅憲明

出演 マツハ文朱、小島八重子

ガメラ対深海怪獣ジグラの回でちょこっと触れましたが、シリーズのおまけみたいな作品です。この作品は過去のガメラ映画を解体して再構成したような作品。というか総集編的な意味があるのかなあ。これまでガメラと戦った全怪獣が登場。ただし、過去の映像の使いまわしです。総集編だったらしかたないか。

物語をリードするのは、マツハ文朱さま演ずる女の子の宇宙人。彼女があーだこーだ言いながらガメラとともに宇宙船で移動、彼女があちこちに登場する怪獣の情報をガメラに伝え、ガメラとともに戦うって構造です。ってことで、この作品は怪獣映画でありながら「特撮組」がほとんど撮影に参加していないという変わった映画になってしまいました。

あ〜あ。ガメラ対ジグラで止めとけばよかったのに。もしくはジャイガー戦とか。

物語をリードするのがマツハ文朱さまってところもなんか時代を感じさせていい感じですよな。この映画、がっつり見るんじゃなくて、録画しておいて、気が向いたら見るって感じで見ていただきたいと思います。

次回は007シリーズでございます。「ゴールデンアイ」のご紹介でございます。

ゴールデン・アイ

1995年アメリカ・イギリス合作

監督 マーチン・キャンベル

出演 ピアース・プロスナン、ショーン・ビーン

いやあ、007ですなあ。どこまで続くんやろ。またがっつり007シリーズやらなきゃいけないなあ。好きな作品たくさんありますから。その人にとって誰が演じたボンドがベストかって話、映画ファンならでてくると思います。私は「黄金銃をもつ男」あたりからリアルタイムで007をみはじめましたから、ロジャー・ムーアさまのイメージが強いです。ただ、「黄金銃」からその次の「私を愛したスパイ」までの間に、ショーン・コネリーさま版のほとんどの作品をテレビで見えてしまいました。ってことで、私的にはコネリーさまムーアさまが五分五分って感じでしょうかね。

さて今日は「ゴールデン・アイ」。プロスナンさま版ボンドの第一作。

あんまり違和感なかったです。ってのは先代のティモシー・ダルトンさまがあまりボンドらしくなかったから。それを証明するかのように、プロスナンさま版はこの後、何本か製作されております。

今回の敵役は元英国諜報部の006ことショーン・ビーンさま。ボンドとの作戦で命を落としたと思われていたビーンさまですが、犯罪組織「ヤヌス」のボスとして生き延びておりました。ビーンさまは謎の女を使って最新鋭タイガーヘリコプターを奪取。さらに世界中の電子機器の昨日を麻痺させることができる宇宙兵器「ゴールデン・アイ」をも奪取してしまいます。おおすげえ。で、ボンドはこいつと戦うことになるわけですな。

その前のダルトンさま版が自分的にはあまり盛り上がらなかったんで、あまり期待しないで見ましたが、なかなかいけてました。

次回はジャパンホラーでございます。「灰暗い水の底から」のご紹介です。

灰暗い水の底から

2002年「灰暗い水の底から」製作委員会作品

監督 中田秀夫

出演 黒木 瞳、小日向文世、小木茂光

きゃああああ。ホラー映画です。しかもジャパニーズホラー。原作は鈴木光司さま。映画版「リング」の中田監督の作品です。

主人公の黒木さまは娘と暮らすシングルマザー。夫と離婚調停中。夫は黒木さまが精神的に不安定だってことと、生活能力に欠けることなどを理由に、娘をひきとろうとしています。娘との生活のことを考え、黒木さまはあるマンションに引っ越してきます。これが恐怖のはじまりなのでありました。怖い、怖い。けっこう怖い。

水ってものを利用したサスペンスの盛り上げ。中田監督のセンスが光ります。黒木 瞳さま、けっこう好演。彼女がだんだん（ある意味で）壊れていくってあたりがサスペンスのもう一つの柱だし、だんだんとその恐怖の真相が明らかにされていくサスペンス描写もさすがです。中盤から後半にかけて、いい感じでもりあがってくるんだけど、ラストがちょっとどんよりするような作りになっていたのが残念かなあ。

今回は伝説のホラーサスペンス映画の禁断の続編。「サイコ2」のご紹介でございます。

サイコ2

1983年アメリカ映画

監督 リチャード・フランクリン

出演 アンソニー・パーキンス、ヴェラ・マイルズ

ヒッチコック監督永遠の名作の続編。こいつはねえ、公開直後にロードショーで見ました。もうねえ、ソッコーとびついたらって感じですね。すんごく楽しみに見にいったら、で、感想は...うむむ。

私的には大好きなんですけど、あんまり評価高くないですね。どうしてなんだろう。あ、そうそう。以下の記事にはヒッチコック監督版、並びにガス・ヴァン・サント監督版「サイコ」の結末部分に関するネタバレ書いてます。未見の人はそのおつもりで。まあこの作品の犯人知らない人なんか珍しいだろうけど。

物語はかの「サイコ」事件から十数年後です。前作ラストで警察に逮捕されたノーマン・ベイツ＝パーキンスさまは長い精神治療から社会復帰を果たします。面白くないのは前作の「第一被害者マリオン」の妹でございます。ベイツは絶対回復なんてしていない。間違いなく再び罪を犯す。彼女はそう主張します。しかし受け入れられないわけですね。被害者の親族の主張ですから。彼女はノーマンの精神を再びぶっ壊して、また病院に送ってやろうと画策するわけですね。母はもういないのだ。母はもう死んだのだ。そう現実を受け入れたはずのノーマンですが、彼の目の前に母が生存する証拠がちらほら。死んだはずの母から突然電話がかかってくる。徐々に再び狂気にむしばまれていくノーマンの神経。やがてノーマンを病院に叩き込もうとしていた妹が殺されてしまいます。誰じゃあ、犯人は誰なんじゃあ。徐々に混乱していく物語。そして意外な結末。さらに意外なドンデン返し。私的には大好きな結末。この映画の評価がイマイチなのが不思議でしかたないですわ。

次回は故・伊丹十三監督の名作。「マルサの女」のご紹介でございます。

マルサの女

1987年伊丹プロ作品

監督 伊丹十三

出演 宮本信子、山崎 努、津川雅彦

「お葬式」で世間をあっと思かせ、「タンポポ」や「スウィート・ホーム」でその才能をみせつけた故伊丹十三監督。その伊丹監督の最高傑作といえはこの作品ではないでしょうか。

国税局査察室。通称マルサ。このセクションに籍を置く女、だからマルサの女。脱税摘発が彼女に課せられたミッション。お葬式だとか、ラーメン屋さんだとか、国税局だとか。伊丹監督のテーマ選定は実に素晴らしいですね。だって国税局の職員が主人公でっせ？んで脱税を摘発するのがドラマなんですぜ。この当時はこういう発想、ほとんどなかったです。今でこそいろんな職種を描いてドラマにする手法、ありますが。

主演は宮本信子さま。この人が脱税摘発のプロでございます。彼女の上司が津川雅彦さまで、ターゲットになるのが山崎 努さま。なんかすっげえ濃いキャスティングです。しかしとっても芸達者な皆さんが物語を巧みに進めていきます。ありがちなコメントだろうけど、おお、こんな脱税の手口があるんだ、とか、それをこうやって摘発するんだ、とか。そういった内幕見本市的な印象が残りました。でも作品的にもすごくよくできております。伊丹監督の新作がもう見られないなんて信じられないですね。合掌。

次回はちょっと懐かしいファンタジーもの。「ある日、どこかで」のご紹介でございます。

ある日、どこかで

1980年アメリカ映画

監督 ジュノー・シュウォーク

出演 クリストファー・リーブ、ジェーン・シーモア

この作品を見たのはファンタジー系作品ばかりを集めた深夜放送の特集。このとき、初オンエア、みたいな紹介のされかたをしていたような記憶があります。一部に熱狂的なファンをもつファンタジー系SFの名作でございます。

映画の内容はほとんど覚えてないんですよ。主演はクリストファー・リーブさま。スーパーマン役者です。この映画の何年か後に、乗馬中の事故で頸椎を骨折。再起不能となってしまいました。それでもリーブさまはリハビリを重ねて復帰。復帰作品は「裏窓」。ヒッチコックの名作のリメイク。これは当然車椅子の役。しかし残念ながらその後、事故の後遺症による合併症で帰らぬ人となりました。

競演はジェーン・シーモアさま。ほとんどの人はわからないだろうけど、「007死ぬのは奴らだ」のボンドガール。ゴールデン・アイのときにも書きましたが、私は「黄金銃…」あたりで007をみはじめましたが、それまでの007作品ボンドガールのなかで私が一番美人だと思ったのがこの人。ジェーン・シーモアさまかダニエラ・ビアンキさまが一番キレイだと思っています。

さて映画のほうは、運命の二人の再会系ファンタジー。恋愛系のタイムスリップ系。多いなあ、こういう題材。残念ながら、間違いなく見てるんですが、ラストシーンしか記憶に残ってないんですね。

かといってラストシーンを書いちゃうとネタバレになるからやめておきます。一回見直ししたいのですが。

次回は社会派の作品。「スリーパーズ」のご紹介でございます。

スリーパーズ

1996年アメリカ映画

監督 バリー・レビンソン

出演 ブラッド・ピット、ロバート・デ・ニーロ、ダスティン・ホフマン、ケビン・ベーコン

ロバート・デ・ニーロさまが出ているってだけの理由で録画して、録画していたことをずっと忘れてて、古いビデオを整理してた出てきたので見たらすっごい良い作品でびっくりしたっていう不遇な作品です。

スリーパーズっていうのは少年院帰りの人を指すスラングだそうです。主人公の四人の少年は、神父のデ・ニーロさまにいろいろな教えをもらいつつ、やんちゃを重ねています。ある日、彼らはかっぱらいの悪戯がもとで屋台のアイスクリーム売り（キャンディ売りだったかなあ）に重傷を負わせてしまいます。四人は揃って少年院へ。そこの看守がベーコンさま。四人は性倒錯者のベーコンさまから性的虐待を受け続けます。で、時は流れ。出所した少年たちは成人しております。少年のうち一人がブラピさまでございます。ブラピさまは検事だとか弁護士だとか、その辺の仕事についております。ある日、四人のうちチンピラになった二人がレストランでベーコンさまを見かけてしまう。復讐心に燃えた二人はベーコンさまを射殺。二人は刑事事件の被告人になってしまいます。ブラピさまはここで一計を案じる。ブラピさまは二人を告発する検察側に立ち、裁判を通してベーコンさまら看守の少年たちに対する性的虐待を立証し、告発しようとしています。

二人の弁護士は何とダスティン・ホフマンさま。すごいキャスティングですね。「スタンド・バイ・ミー」系の少年ドラマだと思ったら「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」系の少年から青年に至るギャング一代記ものっぽくなって、あれよあれよという間に法廷サスペンスへ。物語の詳細知らなかったからびっくりしました。しかしねえ。結末読めますよね。弁護士と検事が共通の目的をもって裁判進めるわけだから。主人公たちの狙い通りに話が進まないほうがおかしい。かくして物語は皆が予想した方向に決着するしかないのであった。

でも予備知識なしに見たからとっても面白かったです。ちなみにおまけのようなブルーなラスト（四人のその後を描いた物語後の結末）はマジ蛇足でした。

次回はちょっと良い映画のご紹介。ロバート・レッドフォードさま主演「ナチュラル」です。

1984年アメリカ映画

監督 バリー・レビンソン

出演 ロバート・レッドフォード、グレン・クローズ、ロバート・デュバル、キム・ベイシンガー

野球を通して描くアメリカンドリーム映画です。すんげえ野球がうまい少年がおりまして、彼は大リーグチームに見出されて大都会へ。そこで知り合った黒いドレスの女。女はホテルの一室に彼を呼び出し、いきなり彼を拳銃で撃ちます。ひええええ。

そして十数年後。もう中年になりかかっている撃たれた少年がレッドフォードさま。都会に行く列車で知り合った新聞記者がデュバルさま。レッドフォードさまは勝利から見放されたような弱小チームに入団します。

列車に乗ったのが16歳の年だとして、入団がその16年後だとして三十二です。監督は馬鹿にしてレッドフォードさまのことを使おうとしないのですが、ちょこっと試しに起用してみたら、大ホームラン。その後もバカスカ打ちまくります。あれよあれよといううちにチームは優勝候補になってしまいます。そんな彼のもとにしのびよる八百長の影。いぐわあああ。大リーグでのアメリカンドリーム。けっこう純粋に感動できたし、純粋に楽しめました。なんかハリウッド的な感動大作です。「危険な情事」で線キレ女を演じていたグレン・クローズさま、この映画ではとってもいい感じ。野球チームのスポンサーのイケズ娘を演じているのがキム・ベイシンガーさま。なんかキャラ的にはクローズさまとベイシンガーさまは逆のような気がするんだけど。ま、どっちもけっこう似合ってたからいいですが。

次回の映画コラムは珍しくコメディ。レスリー・ニールセンさま主演「裸の銃を持つ男」です。

裸の銃を持つ男

1988年アメリカ映画

監督 デビッド・ザッカー

出演 レスリー・ニールセン、プリシラ・プレスリー、O・J・シンプソン、リカルド・モンタルバン、ジョージ・ケネディ

この映画はメッチャ好きで、ビデオ買ったくらい好きです。

デビッド・ザッカー監督は、「ケンタッキー・フライド・ムービー」で頭角を現し、「フライング・ハイ」「フライング・ハイ2」、でこの「裸の銃を持つ男」三部作を撮って、その後「ホット・ショット」「ホット・ショット2」なんかを撮ります。キアヌリーブスの「雲の上を散歩」みたいな恋愛映画の製作なんかやってるみたいですね。多才な人やなあ。

ザッカー監督作品は、一貫して「おバカな映画」を撮り続けてる人です。この映画も実にオバカ。冒頭からしてすごい。ゴルバチョフ、カダフィ、ホメイニ、アミン、その他もろもろの映画公開当時のアメリカに敵対していた国の指導者に「似た人」が対アメリカ作戦を相談しているところに、いきなりドレビン警部＝ニールセンさまが現れ、大暴れして去っていく。こんな映像、当時のアメリカの劇場では大喝采だったんでしょうね。

物語の本筋は、訪米する英国エリザベス女王暗殺を企てる麻薬シンジケートのボス＝モンタルバンさまを追い詰めながら、女王を暗殺者の手から守る、って話。

70年代のパニック映画の常連、ジョージ・ケネディさまだとかO・J・シンプソンさまだとか、おバカな演技を繰り広げるのもとても楽しいです。とにかくドタバタ。感動的なシーン（なのかなあ、この映画のクライマックス）でも、馬鹿馬鹿しい仕掛けがあちこちに。あと、画面の隅々まで見る必要のある映画です。画面のすみっこのほうで面白いことしてたりしますのでお見逃しなきよう。

今回はSF。「タイムクラッシュ・超時空カタストロフ」です。

タイムクラッシュ・超時空カタストロフ

1999年アメリカ映画

監督 マリオ・マッツオ・ヴァルディ

出演 キャスパー・ヴァンディーン、キャサリン・ベル、マーティン・シーン、ジョージ・C・スコット

なんだかとっても微妙な映画。ちょっとコメントに困る性質の映画でございますなあ。原題は「Thrill Seeker」だったと思うんだけど。主人公のヴァンディーンさまはニュース記者でございます。化学工場の火災をルポしているときの強引な取材がもとで、彼は同僚を死なせてしまいます。謹慎期間中、デスクワークを命ぜられた彼は二十世紀の大事故の記録を調べていくうちに、とんでもないことに気づきます。

過去の歴史的な大惨事の記録写真に、同一人物と思われる男が写っている。何なんだ、この男はってことで、彼は調査をはじめます。しかししかし、たまたま乗った飛行機にその男が乗り合わせていたからあらびっくり。男が席をはずしたすきに荷物を探ると、「大災害体験ツアー」なるパンフレット。そのパンフレットには、過去の大惨事はもちろん、ここ数日のうちに起こる大災害も書いてありまして、そしてそこには彼が今乗っている飛行機が空中衝突で墜落するなんて書いてある。ひえええええ。

ヴァンディーンさま、謎の男が持っていた銃を奪ってハイジャック状態。近くの空港に着陸を命じますが、気流の影響で管制塔と連絡がとれない。折からの雷雲で視界は極めて悪い。とっさに彼はパイロットに高度をあげるよう指示します。そしたら、あらびっくり。正面から迫る飛行機。とっても危険なニアミス。高度を上げてなかったら間違いなく衝突していたことを知らされます。うひょおおお。結果的に彼は飛行機事故を回避させたことになります。あとでわかるのですが、謎の男は未来からやってきた時間旅行者。「大災害見学ツアー」の客だったらしい。ここから話がすごくややこしくなってきます。

ヴァンディーンさまが飛行機事故を回避させたせいで、未来世界ではとんでもないことになってしまいます。未来が変わってしまうわけですね。で、未来からやってくるのは歴史のずれを修正しにやってきた奴ら。どうやら未来でタイムマシンの開発に成功する科学者が、飛行機事故で助かった男の運転する車にはねられて死んでしまってタイムマシンが使用できなくなるとか、そういったことが未来で起こっています。いぐわあああ、ややこしい。

で、ここからは飛行機事故翌日の、「スタジアム大火災」を未然に防ごうとするヴァンディーンさまと歴史を変えさせまいとする奴らとの攻防になるわけですね。

ここから先の展開はかなり強引。せっかくの面白い素材なのに、いかにも消化不良の内容になってしまいましたね。残念です。どうせだったらヒンデンプルグ号の爆破とか阻止してほしかったんですが。

次回予告だあ。ご存じ「チャーリーズ・エンジェル」です。

チャーリーズ・エンジェル

2000年アメリカ映画

監督 マック・ジー

主演 キャメロン・ディアス、ドリュー・バリモア、ルーシー・リュー、ビル・マーレー

1970年代に日本でも放送され、大人気だったテレビドラマシリーズの21世紀的リメイク。テレビドラマではシェリル・ラッドさまとかファラ・フォーセットさまなんかブレイクしましたね。今回はすでにビッグネームの三人、キャメロン・ディアスさま、ドリュー・バリモアさま、ルーシー・リューさまなんかを主演に配して盛り上げてくれています。

テクニカル系の企業の社長が誘拐されます。仕事帰り、自らが開発したソフトウェアとともに、です。企業の共同経営者からの依頼で動き出したのはチャーリー探偵事務所の女性探偵、チャーリーズ・エンジェルたちでございます。彼女たちは誘拐された社長の奪還に成功。しかしソフトウェアは奪われたまま。エンジェルたちの次の任務はソフトウェアのありかを探ることになります。ライバル会社を探っていくうちに、だんだん共同経営者の女性が怪しくなってきます。果たしてエンジェルたちは真実にたどりつくことができるのでしょうか。

これでもかというくらいガンガン登場するコスプレシーン。ええ感じやけど、どうなんでしょう。あんまり物語の展開に関係ないような気がするけど。ま、いいか。目の保養になるし。

スパンダー・バレーとかハートとかの懐かしいヒット曲がかかりまくり。これはこれで楽しい。学生時代に戻ったような楽しみ方をさせていただきました。

次回はファンタジーです。ジェレミー・アイアンズさま主演の「ダンジョン&ドラゴン」でございます。

ダンジョン・アンド・ドラゴン

2000年アメリカ映画

監督 コートニー・ソロモン

主演 ジャスティン・ワリン、ジェレミー・アイアンズ、ソーラ・バーチ

有名なロールプレイングゲームの映画化らしいですな。えっとねえ。うむむ。改めて思いましたが、私はこういう系のファンタジーは苦手。ドラゴンや杖や刀や魔法や。どないやねんって思っていますです。

悪の魔法使いアイアンズさまが支配しようとする王国。アイアンズはその王国の女王バーチさまから王位を奪おうとしているわけです。それを阻止するためには「サブリースの杖」を手に入れ、レッド・ドラゴンを操るしかない。アイアンズさまはその杖を狙っているわけですな。

杖のありかを記した地図ってのがありまして、青年ワリンさまは偶然その地図を手に入れ、杖を探す旅に出かけることになります。

ジェレミー・アイアンズさま、年をとりましたねえ。当たり前か。最近の映画に出ている若い頃からのスターだとか、今でも活躍しているスターが若い頃チョイ役で出ていた映画とか見たら、うほおおおとか思っています。自分も年をとってるんですけど。

この前とりあげた「タクシー・ドライバー」見てたら、ジョディ・フォスターさまで稼ぐポン引き役ですっげえ若い頃のハーヴェイ・カイテルさまとか出てましたです。めっちゃびっくりした。

しかしねえ。今回はジェレミー・アイアンズさまが悪の魔法つかいですからねえ。時は流れるって感じやなあ。映画のほうですが、クライマックスのドラゴンの大空中戦はなかなか迫力があっていけてました。

次回は新感覚ミステリー。サム・ライミ監督の「ギフト」でございます。

ギフト

2000年アメリカ映画

監督 サム・ライミ

主演 ケイト・ブランシェット、ジョバンニ・リビシ、ヒラリー・スワンク、キアヌ・リーブス

物語の設定はちょっと前にやってた海外ドラマの「トゥルー・コーリング」みたいな感じで、画面の雰囲気は「ブレア・ウィッチ・プロジェクト」みたいな陰鬱な感じ。これで伝わるかなあ。ブランシェットさまは夫を亡くした子持ちの母。生活保護を受けながら占いなどをして生計をたてています。彼女には特殊な能力があります。超能力用語で言うとプレコグニション、予知能力ですわな。残留思念を読み取る力もあるようです。

彼女をとりまく環境はとっても微妙。まず幸せいっぱい男友達一号。彼は結婚間近。でもブランシェットさまは紹介された婚約者の未来を見てしまう。彼女近いうちに死ぬ、みたいな画像。次にブランシェットさまに人生相談をもちかけてくる女友達。夫（これがまたキアヌ・リーブスさまなわけですわ）からのDVに悩んでいます。さらに彼女に精神的な悩みを相談している男友達のリビシさま。

さてここで事件発生。彼女は感じてしまうわけですわ。男友達一号の婚約者が殺され、湖に沈められているイメージをです。さらに彼女はその場所の明確なイメージまで感じてしまう。その場所はなんとリーブスさまの所持する土地。ブランシェットさまが感じたとおり、そこの湖から婚約者の死体が発見されます。きゃあああ。果たして犯人は誰なのか。彼女はどんなイメージを感じるのでしょうか。

予知能力があるとはいえ、彼女が知ることができるのは断片的な未来。それだけにサスペンスがええ感じでもりあがります。こういう手法もありなんだ、と感心しましたです。

さて次回はファンタスティック映画とホラー映画の境界のような映画。「狼の血族」です。

狼の血族

1984年イギリス映画

監督 ニール・ジョーダン

主演 アンジェラ・ラズベリー、スティーブン・レイ

この映画はけっこう思い出深い映画です。劇団やってたとき、同じ劇団の子が相米監督の「台風クラブ」って映画に出演しましてですねえ。で、ちょうどこの「台風クラブ」と「狼の血族」がある国際映画祭に出品されました。グランプリをとったのはこの「狼の血族」。「台風クラブ」は惜しくも栄冠を勝ち得ることができなかつたです。その子はそれからあとは作品に恵まれず、今では芝居とは無縁の生活をおくっていると噂にききました。「台風クラブ」がグランプリとってたら、彼女のその後の人生変わってたかもしれないね。

さて「狼の血族」でございます。童話「赤ずきんちゃん」をモチーフにした、人間と狼（この映画の場合は人狼ですな）の世界を描いた作品。もっとしょぼい世界をイメージしていましたが、けっこうちゃんと作られていたからびっくりしました。というのも私、ホラー映画ファンだから、本編を見るより先に予告編とか映画雑誌やホラー映画解説本なんかでSF Xシーンを先に見てしまうことが多いのです。この映画のSF Xって、すごく微妙な出来。よくできている特撮もあるし、なんじゃこりゃみたいな特撮もある。そのなんじゃこりゃの部分が紹介された映像を見て、勝手にしょぼいイメージで作品のイメージを作っていたみたいです。夢と現実と空想が入り混じった不思議な世界が続きます。どこからどこまでが現実なのかわからない。ひょっとすると物語全体が夢の中なのかも。

ただ、残念ながら都会育ちで日本人の私には「狼（＝野生動物）を恐れる」という感覚がまるでありませんので、作中の人物たちほどにはもりあがれなかつたです。

さて次回コラムの予告。ダリオ・アルジェント監督の初監督作品。「歓びの毒牙」でございます。

歓びの毒牙

1969年イタリア・西ドイツ合作

監督 ダリオ・アルジェント

主演 トニー・ムサンテ、エヴァ・レンツィ

後に「サスペリア」でホラーサスペンスの重鎮となるダリオ・アルジェント監督のデビュー作です。後に「サスペリア2」や「オペラ座・血の喝采」「フェノミナ」「トラウマ」あたりで見せる映像美や独自の手法のルーツがいろんなところで登場します。私はこういう作品けっこう好きですね。

作品世界としては「サスペリア2」に一番似てますね。身体の一部しか見せない殺人者。作品冒頭でいきなり重要な、真犯人特定につながる場面を見せてしまう大胆な演出。ガラス越しの目撃者。ええなあ。

イタリアで女性連続殺人事件が起こります。この事件を「ガラスごしに」目撃してしまうのがたまたまアメリカから来ていたムサンテさま。ムサンテさまは唯一の目撃者ってことで、警察への協力を要請（というか出国させてくれなくなったわけだから強制ですわな）されます。

後の作品同様、色々と事件の背後を探り回るムサンテさま。捜査が核心にふれると、やはり出てくる犯人の脅し。こういう場面も何かの作品でありました。最後に明らかになる意外な犯人。

おお、そうやったんか。ここから先は「サスペリア2」「フェノミナ」と同じ展開です。どちらか一方の映画見た人はおわかりでしょうね。そうです。そういう展開です。さすがダリオ・アルジェント。デビュー作にしてこれだけのクオリティの作品を作っていたのはさすが。えっと。ダリオ・アルジェントって、最初に日本で話題になった「サスペリア」がオカルト（魔女もの）だったせいで、ホラー作家だと思っておられる人が多いと思いますが、この人どちらかといえればホラーサスペンスを得意にしています。

オカルト系の話は「サスペリア」と「インフェルノ」くらいで、あとの作品は見事に「犯人は誰や」系のホラーサスペンスを撮っております。推理系の映画が好きな人は見たらいいんじゃないかと思いますが。でもこの人、殺害場面とかをこれでもかっていうくらいに描くから、血が苦手な人にはやっぱり敬遠されるんだろうなあ。

次回はニコラス・ケイジさま主演「60セカンズ」です。

60セカンズ

2000年アメリカ映画

監督 ドミニク・セナ

主演 ニコラス・ケイジ、アンジェリーナ・ジョリー、ロバート・デュバル、ジョバンニ・リビージ

文字通り60秒以内で高級車をいただいてしまう自動車窃盗のプロたちの物語。かなり昔に、「バニシング・イン・60セカンズ」って映画があったんだけど、そのリメイクなんですか？カーアクション主体のB級映画だったと記憶しているのですが。そもそも「バニシング・イン・60セカンズ」を見てないから何とも言えないです。

さて物語のほうは...

引退した元天才車泥棒がケイジさま。今は田舎のカート場で子供たちにゴーカートを教えています。彼の弟リビージさまは兄の影響で高級車泥棒になっています。彼はアブナイ骨董品屋からの依頼で、五十台の高級車を盗み出す仕事を請け負います。しかし盗む車のリストにあったフェラーリ盗でヘマをして警察にアジトがばれてしまいます。当然それまでにゲットした車はすべて押収。で、リビージさまと骨董品屋との仲介をした男がケイジさまのもとにやってくる。弟を助けたければ期限までに五十台の高級車を用意しろと迫られます。どうしようもないケイジさま、カムバックを決意。かつての仲間のデュバルさまやジョリーさまを召集し、たった一晩で五十台の車を盗み出そうと計画します。一晩で片をつけるってのは、警察の警戒が厳しくなるのを防ぐため。そして決行当日。一時的に身柄を解放されたリビージさま一味を加えた窃盗団の大仕事が始まります。

車泥棒の鮮やかな手口。しかしこういう人たちをヒーローにしちゃいかんわなあ。昨年車を荒らされてカーナビ盗まれた私はむっとしながら見てましたです。とはいえ車窃盗そのものにはあまりウエートを置かずに、その後の骨董品屋との対決がクライマックスになっていたあたりはちょっとだけ好感が持てました。

さて次回予告。「ハリーポッターと秘密の部屋」のご紹介です。

ハリーポッターと秘密の部屋

2002年アメリカ映画

監督 クリス・コロンバス

主演 ダニエル・ラドクリフ、ルパート・グリント、エマ・ワトスン、リチャード・ハリス、マギー・スミス、ケネス・ブラナー

ご存じハリー・ポッターシリーズの第二弾。こういう作品を続けて見ておりますと、第一作ではたよりなかったハリー・ポッター君がだんだん逞しく見えてくるから不思議です。とはいえこういう魔法系のファンタジー作品はかなり苦手。

ハリーポッター＝ラドクリフさまは魔法学校に入って最初の夏休みを、意地悪おじさんのもとで過ごしております。そこへやってきたのは妖精のドビー。彼は「魔法学校に戻ってはいけない」とハリーに警告します。そしてドビーのせいで部屋に閉じ込められてしまいます。友人ロン＝グリントさまの働きで脱出に成功します。やがて新学期が始まります。そこで発生するのは、やはり事件です。魔法学校の生徒たちが次々に石にされてしまう事件が発生します。で、ハリーに疑いがかかったりして。やがて50年前の在校生、リドルの日記が発見され、ハリーは謎に包まれた秘密の部屋の扉を開けることになります。

ラストにつながる重要な伏線が物語中盤にあたりしますですよ。お見逃しなく。

まあ苦手なりに楽しめる作品になっております。

次回はヒッチコック監督の「めまい」のご紹介です。

1958年アメリカ映画

監督 アルフレッド・ヒッチコック

主演 ジェームス・スチュワート、キム・ノバック

ヒッチコック監督の最高傑作のひとつに数えられている名作。これまで「ロープ」や「裏窓」などをご紹介したかと思いますが、こいつもなかなかいい作品ですぜ。

主人公のスチュワートさまは高所恐怖症。それが原因で警察を辞めたという過去をもっております。ある日彼は友人の妻で不審な行動をとっているというノバックさまの尾行を依頼されます。尾行を続けるうち、スチュワートさまは彼女に惹かれていきますが、彼女は教会の鐘楼から飛び降り自殺をはかります。スチュワートさまは高所恐怖症が原因で彼女を見殺しにしてしまうこととなります。自責の念にかられるスチュワートさま。しかし彼の前に彼女そっくりの女性が現れ、彼に意外な事実を伝えます。さてさてその事実とは...

ヒッチコック監督の最高傑作と推す人が多い作品だけあって、なかなかよくできております。念入りに組み立てられた設定がすごく生きてますし、恋愛ものとしてもサスペンスとしても推理ものとしても、そしてトラウマ克服ドラマとしてもよくできている作品です。

逆によくできすぎていて少々お腹にもたれるって人もいるかもしれませんね。

今回は伊丹十三監督の「お葬式」のご紹介です。

お葬式

1984年伊丹プロ・NCP作品

監督 伊丹十三

主演 山崎 努、宮本信子、菅井きん

名匠・伊丹十三監督の衝撃的なデビュー作。伊丹監督はこの一作で名監督として評価されることになります。往年の日本映画を支えてきたベテラン俳優さんたちが大挙して出演されており、それはそれで見ていて楽しいです。

夫婦俳優山崎さまの妻宮本さまのお父さんが亡くなります。で、喪主を山崎さまが務めることになります。しかしお葬式なんてはじめて。一人の人のお葬式が始まってから終わるまでを、皮肉たっぷりユーモアたっぷりに描いた秀作です。お葬式という素材としては難しいものを扱っているためか、逆にコメディタッチの作品にならざるを得なかったんでしょうね。身内の方のお葬式を経験された人なら「ああ、そうやったそうやった」って感覚で見られるのではないのでしょうか。さすがに映画みたいに屋外エッチとかするような喪主さんはあんまりいないとは思いますが。

ラストシーンはけっこうきれいなイメージでまとまっております。私はこの「お葬式」と「マルサの女」くらいしか見てないので、また時間を見つけて伊丹監督の全作品を制覇したいと思っております。

次回予告。ドルフ・ラングレインさまの「レッド・スコルピオン」のご紹介です。

レッド・スコルピオン

1988年アメリカ映画

監督 ジョセフ・ジトー

主演 ドルフ・ラングレイン

「ロッキー4」で強烈な敵役を好演したドルフ・ラングレインさまの初主演作品です。

ドルフ・ラングレインさまはロシアの人ではなくスウェーデン出身の役者さんです。念のため。

キックボクシングや空手で鍛え上げた身体。冷たい機械のようなイメージを持つ人ですね。「ロッキー4」でのドラコ役はまさにはまってました。

今回ラングレインさまが演じるのはソ連の特殊部隊の兵士。南アフリカの反政府運動のリーダーを暗殺するという指令を受けています。しかし作戦に失敗。彼は軍を離脱します。民衆と触れ合ううちに今回のミッションに疑問を持った彼は、単身軍に立ち向かっていきます。

うんうん。よくあるパターン。こういう系統の作品としてはけっこうよくできているほうだと感じました。駄作ではないけれど名作だとも言えない。しかし後半、大暴れするラングレインさまを見ているとやっぱりスカッとするから、よくできている映画には違いないと思います。

ラングレインさまけっこういいです。この人はこのあと「ブラック・ジャック」ってタイトルのジョン・ウーさまの作品に出演します。けっこう好きな役者さんなので、もう少しジョン・ウー監督と組んでももらいたいんだけどな。

次回はサム・ライミ監督作品「ダークマン」のご紹介です。

ダークマン

1990年アメリカ映画

監督 サム・ライミ

主演 リーアム・ニーソン、フランシス・マクドーマンド

「ダークマン」ってリーアム・ニーソンさまが主演してたんですね。知らなかったです。後に「スパイダーマン」シリーズでメガホンをとるサム・ライミ監督のヒーローものの原点...ってあるホームページで書いてましたが。「キャプテン・スーパーマーケット」は原点にならないんだらうか。まあいいか。

ニーソンさまは遺伝子工学を研究する若き科学者。しかしある日、弁護士をしている恋人マクドーマンドさまが持ってきたある事件の証拠書類がもとで悪漢一味に襲われ、全身大火傷を負ってしまいます。彼は自らが開発した人口皮膚をまとい、犯罪組織の撲滅に立ち上がります。うむうむ。絵に描いたようなヒーローもののパターンでございますなあ。

前半、やたら弱っちいニーソンさま。ダークマンになってからもあまり力強い印象を受けなかったのは私だけでしょうか。

後にスパイダーマンで素晴らしい特撮を見せてくれるサム・ライミ監督ですが、この頃はまだ特撮そのものに慣れてないような印象を受けました。

今回はレイ・リオッタさま主演「グッドフェローズ」のご紹介です。

グッドフェローズ

1990年アメリカ映画

監督 マーティン・スコセッシ

主演 レイ・リオッタ、ロバート・デ・ニーロ、ジョー・ペッシ、ポール・ソルビノ

マーティン・スコセッシ監督お得意の社会派系マフィアもの。

とりあえずデ・ニーロさまファンの私としましてはビデオ解禁と同時に見ました。その後、中古でビデオも入手したくらいに気に入った作品。だったんだけど。二回目は見ていません。こういう作品も珍しい。たいていはビデオをレンタルで見て、気に入った作品はビデオを買って、即二回か三回見るんですが。見る気がしなかったんですよね。重い内容の映画だから。

少年の頃からギャングに憧れた男の生き様を通して、マフィアの実態を描いております。実話をもとに作られているそうですが、あんまりドキュメンタリーっぽくないです。映画は主人公レイ・リオッタさまのモノローグによってテンポよく進みます。

絵に描いたようなチンピラのリオッタさま。彼の野望、挫折、そしてその末路が冷徹に描かれます。ラストシーンのリオッタさまの姿がいつまでも瞼の裏に焼きついてしまいます。しかし、途中予想していた結末ではなかったです。ある意味裏切られたラストシーンでした。映画を彩るBGMは懐かしいロックの名曲。それはそれでいけてます～

今回は特撮です。「大魔神」のご紹介です。

大魔神

1966年大映作品

監督 安田広義

主演 高田美和、青山良彦、藤巻 潤、五味龍太郎、遠藤辰雄

大魔神～。

「ハマの大魔神」なんてニックネームの野球選手とかがいたぐらい、一般的になったキャラでございます。大魔神。

えっと、私が昔役者修行してたって話はあちこちに書いてると思いますが、京都の撮影所に仕事に行ったとき、見かけましたよ。大魔神像。

当時の京都には東映・松竹・大映の三つの撮影所がありまして、像を見かけたのはもちろん旧大映撮影所。びっくりしました。おもわず手をあわせてしまいました。

あのね、大魔神って、三部作とかいってもほとんど物語の構造は一緒でして、それを個別にご紹介ってとっても難しいんですが。第一作は謀反がらみのお話。謀反によって父を殺され、命からがら逃げのびた領主の子供たち、青山さま・高田さまが主人公。領民たちは魔神を信仰しております。謀反によって新領主になった元家老、五味さま・遠藤さま。青山さまを捕らえます。で、彼とその手下藤巻さまを磔の刑に処そうとする。それに先立って領民たちに崇拝されている魔神像をとり壊そうとするんですなこれが。

残された高田さま、祈ります。魔神に祈る。きたああああああ。魔神、動く。はい、ここから先のお話はくくだ書かなくてもよろしゅうございますな。

今回は懐かしの名作。「テキサスの五人の仲間」のご紹介です。

テキサスの五人の仲間

1966年アメリカ映画

監督 フィールダー・クック

主演 ヘンリー・フォンダ、J・ウッドワード

この映画は恐らく小学校のころにテレビの洋画劇場で見た映画ですね。ウェスタンコメディーと情報誌に書いてありましたが、ジャンルとしてコメディーになるかどうかは微妙なところ。コメディーとは思わないで見てください。

ただし、めっちゃ面白かった記憶しか残ってないですね。小学生のころだったから、ポーカーのルールだとか全然わからなかったし、レイズだとかなんだとかっていうポーカー用語もまるでわからなかったですわ。

旅の途中でかなり大きなギャンブル大会に出くわした中年夫婦が主人公。この夫婦の夫がヘンリー・フォンダさま。フォンダさま、ギャンブル大好き。もういてもたってもいられない。で、妻の反対を押し切って大会にエントリーしてしまいます。なぜ妻が反対するかっていいますと、フォンダさまには心臓病の持病がありまして。ギャンブルとかで心臓バクバクみたいな状況がとってもいけない。しかしフォンダさまを囲んだポーカー大会が始まってしまうわけです。このポーカーをするのがフォンダさまと奥さんを含めて五人だったはずで、で、「テキサスの五人の仲間」なわけなんです。私からのお願い。ポーカー大会の決着がついてからも集中して絶対最後まで見てくださいますし。

面白いですよお～

次回予告。これまた懐かしの名作。「カサブランカ」のご紹介です。

カサブランカ

1942年アメリカ映画

監督 マイケル・カーティス

主演 ハンフリー・ボガード、イングリッド・バーグマン

もうねえ、ほんま。カサブランカですやん。めっちゃカサブランカ。永遠の名作ですわな。なんせ私の生涯ベストファイブに入る映画だと思いますからね。と、とりあえずは言うておこう。ベストファイブはちょっとオーバーかもしれないですが。でもかなり上位に入ってくる映画です。

ジュリーさまの「カサブランカ・ダンディ」だとかバーディ・ヒギンズさまの「カサブランカ」だとか。かなりのフォロワーがいる映画であることは間違いないです。でもね、実は私はこの映画、まわりが評価するほど評価はしていません。良い映画なんですよ。良い映画には違いありません。

ボガードさまの評価って、「カサブランカ」と他のマーローものとの総合評価だと思うんですね。映画としては好きなんですけど、ボガードさまの映画として見たらマーローもののほうが明らかにカッコよかったです。

この映画の「リック」って、最後はめっちゃカッコいいんですけど、なんかねえ。女がらみで酔いつぶれたり、気をつかって思い出の曲をピアノで弾いてくれるカフェのピアノマン・サムさんを「その曲は弾くな」とか怒鳴りちらしたり、あんまりカッコ良い男ではありません。

物語は...さすがにもう良いですかね。第二次大戦下、フランス領モロッコのカサブランカが舞台。この地は東側の国から西側諸国への窓口みたいな場所だったわけです。そのカサブランカでもだんだんドイツの力が及んできます。ここにやってきたのはフランスのレジスタンスのリーダー。彼はボガードさま＝リックの経営するカフェにやってきます。彼の側にはリックの元カノ・バーグマンさま。リーダーとバーグマンさまは西側に脱出しようとしているわけです。一方のリックもカサブランカを離れようと考えていて、そこでああだこうだあるわけですな。

ボガードさまの永遠の名作っていう思い入れたっぷりの気持ちで見たためでしょうか。冷静に二度、三度と見ると登場人物のエゴっぽさとかウェットな部分がやたら鼻につくように感じてしまいます。それでも私にとって大事な作品には違いないのですが。

次回予告。「大魔神怒る」のご紹介です。

大魔神怒る

1966年大映作品

監督 三隅研次

主演 本郷功次郎、藤村志保

えっと。物語の基本構造は第一作とほとんどかわってないです。

水戸黄門とか遠山の金さんのパターンと同じなんですね、大魔神って。というより必殺に近いのかなあ。

悪代官の圧政に苦しむ領民たち。黄門様のかわりに大魔神様が世直しされます。そういう話。第三作だけはちょっと作品のカラーが変わるわけですが、この第二作は第一作とほとんど同じです。あらすじとか前作のものをコピーして貼りつけて、あとで登場人物だけ差し替えようかなとか思うくらい。ってことであらすじはご期待めされるな。

かわりにちょっくらプチお笑いネタ。私ってねえ、大魔神って、フランキー堺様が青く顔を塗って演じてるのだと思い込んでました。

んなわけないけど、小学生時代はマジそう思い込んでいて、フランキー様のことを「大魔神の人」って呼んで大人たちに笑われていたそうであります。

短い記事でごめんね。

次回は。「五福星」のご紹介です。

五福星

1984年香港映画

監督 サモ・ハン・キンポー

主演 ジャッキー・チェン、サモ・ハン・キンポー、ユン・ピョウ

昔むかしのことじゃった。私が学生時代、おネツをあげていた子がユンピョウ大好き少女でございまして、その頃ジャッキー系の映画をむっちゃ集中的に見ました。

五福星だとか大福星だとかチャンピオン鷹だとか。香港国際警察はいっしょに見に行っただと思えますが。その子、今は何してるんでしょうか。幸せに奥さんとかしているんでしょうか。

さてさて五福星。そんな時期に見た映画ですから、印象ほとんどないです。

ただ、この時期ってジャッキー・チェン、サモ・ハン・キンポー、ユン・ピョウがセットで売り出されていた時期で、またこの三人がプライベートでも仲良かったこともあって、何かにつけて競演しておりましたです。

この映画もそんな時期の一本。主役はサモ・ハン・キンポーらムシヨ帰りの五人組。ジャッキーはどちらかというところの五人にはあまりからまずに、独立してちょこちょこ暴れてを繰り返していたような印象があるんだけど。

刑事ジャッキーさまは巨大ニセ札グループを追っております。こういう映画の定石通り、ミスの連発で格下されたりしています。このジャッキーさまの話が一方の流れ。で、もう一方の話が刑務所で意気投合したサギ師5人組サモ・ハン・キンポーさまらの話。

彼らは出所後、清掃会社を始めます。しかしこれまたパターンで失敗の連続。息抜きにとあるパーティーに潜り込みますが、実はそれはマフィアの主催するパーティで、しかもニセ札製造グループのものだったわけです。おお、黄金のパターンですわな。で、期待通りのドタバタの大騒ぎが始まって、ああだこうだあって、最後は...って感じです。

もうお約束のパターン炸裂しまくり。それだけに安心して見られる作品であることには違いないですね。

次回予告。「インディジョーンズ・最後の聖戦」のご紹介です。

インディジョーンズ最後の聖戦

1989年アメリカ映画

監督 スティーブン・スピルバーグ

主演 ハリソン・フォード、ショーン・コネリー

製作総指揮・ジョージ・ルーカスさま。監督・スティーブン・スピルバーグさまの黄金タッグで贈る、冒険アドベンチャーシリーズの第三弾。いぐわあああ。

相変わらずすごくよくできたお話です。物語の冒頭は少年時代のインディジョーンズのプチ冒険談。若き日のインディジョーンズを演ずるのはリバー・フェニックスさま。考古学教授ジョーンズ=フォードさまが今回探し回るのは、磔にされたキリストの血を受けたという聖杯でございます。大富豪にこの仕事を依頼されたフォードさま、例によってごちゃごちゃ言って仕事を断ろうとしますが、その聖杯を発見しようとしていて行方不明になってしまったのが父コネリーさまであることを知り、その仕事を引き受けます。もうここからはいつものパターンでジェットコースターみたいに物語が進んでいきます。お約束のナチ軍団の登場。ナチに捕らえられていた父との再会。ナチの大佐に捕われるジョーンズ親子。そして脱出。そして最後の戦い。いぐわあああ。

なんかとってもよくあるパターンなんだけど、許しちゃおう。面白いから。

父を演ずるショーン・コネリーさまがとにかくいいです。ずっとぼけた感じがたまらない。ハリソン・フォードさま食われっぱなし。やはりコネリーさまのほうが数段役者が上だったのかな？次回はアニメです。「ポケットモンスターアドバンスジェネレーション・七夜の願い星ジラーチ」のご紹介です。

ポケットモンスターアドバンスジェネレーション・七夜の願い星ジラーチ

2003年ピカチュウプロジェクト作品

監督 湯山邦彦

声の主演 松本梨香、大谷育江

ポケモンってまだ続いているんですね。すごえすごえ。私がスイミングのコーチやってたとき、ポケモンキャラのイラストとかよく書いてました。チビッコエアロ（って要するに幼児クラスの体操の代わりにお遊戯っぽく踊るんですが）では「めざせポケモンマスター」とか踊ってたし。

えっと。ポケモンムービーでは、第一作の「ミュウツウの逆襲」がとにかく大傑作でした。これに関してはほとんどの人と意見が一致しております。もう、泣くくらい感動しました。それ以来、第一作の感動よ再びって感じでほとんどの作品を見ておりますが、いまだに「ミュウツウの逆襲」を越える作品には出会えておりません。

映画版ではミュウ・ミュウツウ・エンテイ・ライコウ・ルギア・ラティアス・ラティオス・レックウザ・デオキシス（って書いてもわからない人多いだろうなあ）など、幻系のポケモンがいつも登場しますが、今回登場するのは幻系かわいいキャラのジラーチと幻系かっこいいキャラのグラードン。

グラードンはマグマをあやつるポケモン。海の王者カイオーガ、成層圏の帝王レックウザと、三匹で最強ポケモンとして人気を分けております。タイトルにもなっているジラーチってポケモンは、確か何でも願い事を叶えてくれる系のファンタジーキャラ。でもこいつはすごいパワーを持っておりまして、このパワーを使って地下からグラードンを甦らせようとする一団がありまして、そこいらへんでバトルが繰りひろげられるわけですね。いつも映画ではテレビほどポケモンどうしが戦わないような気がするのは私だけでしょうか。

今回もミュウツウを越えることはできなかったか、と思いつけて何年になるんだろう。でもやっぱり来年の新作も見ちゃうんだろうな、やっぱり。

次回予告。「コブラ」のご紹介です。

コブラ

1986年アメリカ映画

監督 ジョージ・P・コスマトス

主演 シルベスタ・スタローン、ブリジット・ニールセン、レニ・サントーニ

自信に満ちた表情で公安刑事が続ける。

「念のために伺っておこう。君の所属と階級は？」

俺はこの男のように階級や立場をかさにきた物の言いかたをする人種は虫が好かない。

「...スタローンはお好きですか？」

「スタローン？」

「シルベスタ・スタローンですよ。彼に落ちこぼれポリスをやらせると天下一品です」

「何を言いたいのかね？少なくとも私はああいう二流役者の映画を見ているほど暇ではない」

「コブラでしたっけね。あの映画は面白かった... 」

「君。聞かれていることに答えたまえ」

「...おまじないを忘れてますよ」

「あ？」

「お願いします、です」

おお、これは自作小説の一場面です。

いきなりびっくりしました？自作の中で登場させるくらい大好きな映画。というか、この場面が好きなんですね。上司だったかな？なんせ上の立場にある人にえらそうに指示されるわけです。スタローンが。で、スタローン、「マジックワードを忘れてるぞ」って言う。マジックワードはおまじないとか魔法の言葉とかに訳すと思うんですが、字幕と吹き替えで訳が違っていたような記憶があります。そのマジックワードは「プリーズ」だったってオチ。これをそのままいただいたのが上述の場面。映画を例に出してえらそうな奴をチクリと牽制する。そういうキャラなんですね、この話の主人公。

さてさてコブラ。

コブラってのはスタローンが演ずる刑事のニックネーム。狂信的犯罪団体のリーダーの顔を目撃した女性がおりまして、集団から命を狙われている彼女の警護の命を受けた刑事の大活躍アクション。

で、スタローンはその女性の命を守り抜く、みたいな。

この作品とほとんど同時期にシュワ様が「ゴリラ」ってタイトルの刑事ものを撮って、ぶっちゃけどっちがどっちだかわからなくなってます。申し訳ない。今回ちゃんと見て覚えておこうと思っております。

リング

1998年東宝作品

監督 中田秀夫

主演 松嶋菜々子、真田広之

鈴木光司様原作の傑作ホラー小説の映画化。

原作では主人公は男性でしたが、映画版では女性の松嶋さまを主役に配しております。

ここらへんが中田監督マジックなのでしょうか。

主人公松嶋さまはライターでございます。

彼女は変死した親戚の女の子（なんと竹内結子さま）の葬式に行き、そこで「呪いのビデオ」の話聞きます。

女の子はどうやらそのビデオを見たい。松嶋さまは一人でそのビデオの調査をはじめます。女の子が友人たちと泊まったというペンションに行き、そこで見てしまうわけですな、呪いのビデオを。

松嶋さまはそこからそのビデオを持ち出し、元カレで友人の大学講師・真田さまに相談しまして、ダビングしたビデオを彼に見せるわけです。

真田さまと松嶋さまはビデオに写っていた画像から一人の女性にたどりつきます。女性の名前は山村貞子。

彼女は昭和初期に超能力婦人と噂になった女性の娘だったわけです。

貞子とはとくに死んでいるわけですが、彼女の怨念がビデオに移ったのではないかと考えるわけです。

おお、すげえ。

貞子の怨念を鎮めるために、二人は貞子が殺され、封印されたといわれている井戸から貞子の遺骨を探し出し、供養して怨念を鎮めようとするんですが...

原作三部作をお読みになられた方はおわかりだろうと思いますが、「リング」「らせん」「ループ」の三作で「リングワールド」は完全に完結します。

というか「ループ」で作品世界が閉じてしまいます。

そこらへんのことをみんなわかっているから「ループ」は映画化されないのかなあ。

現在日本版で「リング」「らせん」「リング2」「リング0バースデー」「貞子3D」、USA版で「ザ・リング」「ザ・リング2」、二時間ドラマ版で「リング」、連続テレビドラマ版で「リング最終章」「らせん」が映像化されております。

まだまだ「ループ」で世界を閉じることはできないようですね。

というか「ループ」は映像化不可能かもしれませんね。

らせん

1998年東宝作品

監督 飯田譲治

主演 佐藤浩市、中谷美紀、真田広之

いぐわあああ。来る。来る。来る来る来る来る。

貞子が来る。

リングワールドの小説上の続編「らせん」の映画化でございます。

ややこしくならないように説明しますが、小説上の「リングワールド」は「リング」「らせん」「ループ」の三部作なんですね。

で、「リング」そのものは四回映像化されております。二時間テレビドラマ版（高橋克典さま主演）・映画版（松嶋奈々子さま主演）・連続テレビドラマ版（柳葉敏郎さま主演）・USA映画版（ナオミ・ワッツさま主演）があります。

高橋さま版リングには続編はありません。

松嶋さま版リングには異なる物語展開の二つの続編があって、ひとつがこの「らせん」、もう一つが中谷美紀さま主演の「リング2」。

で、松嶋さま版リング以前の物語が「リング0・バースデイ」で、柳葉さま版リングの続編が岸谷悟郎さま主演の連続テレビドラマ「らせん」です。

USA版「ザリング」の続編は「ザリング2」ね。

えっと、「らせん」に繋がる世界と「リング2」に繋がる世界は、スタートからの設定が違っていますねえ。

前作の最後で明らかになった「貞子の呪い封じ」は有効ではなかったとするのが「らせん」の話。

有効だったとするのが「リング2」の話。

で、とりあえず「らせん」の話を続けると...

前作、最後で生き延びた（であろうと思われていた）二人。この一方はルールどおりに一週間後に死んでしまいます。

貞子の呪いは解けていなかったわけです。そのショックで動揺したもう一人も自動車事故で死亡。

物語はそこからスタートします。数少ない前作からの連続出場組、中谷さまは引き続き貞子の呪いについて調べておりますが、そのなかで貞子の呪いで死んだ真田さまを解剖した医師の佐藤さまにたどりつきます。

佐藤さまは数年前、息子を水難事故で亡くしております。

さあここからさらにとんでもない物語が紡がれていくことになります。

呪いのビデオを見ても死んだり死ななかつたりするのは何故か。そこには貞子の意図があつたりします。

呪いの正体はウイルスだということが明らかにされるに至って、ストーリーは文字通り螺旋状に複雑化しながら次の次元、次の次元へとステージを変えていきます。

なんか自分が立っている世界がぐらぐらに崩れる感覚で、ええ感じにブルーになれる作品でございます。

大魔神逆襲

1966年大映作品

監督 森一生

主演 二宮秀樹、堀井晋次

若い頃の劇団時代。「必殺」のエキストラの仕事が入りまして、京都に行きました。当時、必殺は松竹の京都撮影所で撮られておりました。会社名は京都映画やったかな。劇団の制作さんに「京都映画」って言ったら誰でも知ってはると思うから」って言われて行ったんですが。

「あのお、京都映画ってどこですやろ」

「京都映画？ 知らんなあ。松竹か大映か東映か、どれや？」

みたいな。

地元の方は、「東映」「松竹」「大映」で覚えてはるんですね。

とりあえず場所聞いて行ってみたら、そこは大映の撮影所でした。

制作部ってどこやろって探しながらうろうろしてたら、なんと、シャッター開けっぱなしの倉庫の入ってすぐのところに、大魔神のでっかい人形が保管されておりました。

役者離れて感激した記憶があります。

そんな大魔神シリーズの最終作品です。

大魔神ってコンセプトはすごくいいと思うんですが、やっぱり第一作第二作の流れはまずいんじゃないかと思ったようです、大映さん。

第三作の本作で大きく作品のコンセプトが変更されます。これまでの二作で魔神を動かすのは純真な乙女の祈りだったわけですが、この作品に関しては「少年の心」です。

でもねえ、それ以外は前作までと大きくは変わらない物語内容になっております。

つまりねえ、第一作第二作と今回とで、大きく変わったのは主人公くらいで、物語そのものはほとんど変わっていないわけで。

こういう状況じゃあやっぱり打ち切られてしまいまさあね。

危惧していた通り、大魔神シリーズは本作で製作打ち切り。時代劇系特撮の主流は大魔神シリーズから妖怪シリーズへ変わっていきます。

ご存知でしょうか。「鉄甲機ミカズキ」。

あれみたいだね、悪代官が操る巨大カラクリ人形像対大魔神みたいな作品があってもよかったですんじゃないかと思いますが。

今回祈りを捧げる少年役は二宮秀樹様。「マグマ大使」でガムを演じていたあの少年でございます。

プレデター

1987年作品

監督 ジョン・マクティアナン

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー、カール・ウエザース、ジェシー・ベンチュラ

「エイリアンVSプレデター」とか「プレデターズ」とか、今でも続編が制作されている人気シリーズの第一作。

あのエイリアンと戦うほどメジャーなキャラになったようですね。プレデターさんて。

私的には確かにおいしいキャラではあると思いつつ、エイリアンほどの突出した名キャラではないと思います。

プレデターの行動の秘密というか、パターンというか、それは第二作のほうがわかりやすいです。

この第一作では、こいつはとりあえず謎の生命体で、訳わかんないけどとにかく攻撃してくるものだから反撃せねば...みたいなノリでございました。

シュワルツェネッガーさまは米軍の特殊部隊員。

荒くれ者たちとの混成部隊で、ある作戦を任されます。

とりあえずミッションを受けてジャングルをさまようことになるシュワルツェネッガーさま。

そして仲間の兵士たちが、一人またひとりと殺されていくわけですね。

最初はその敵の存在さえ気づかなかったけれども、やがてその敵は自分の姿を周囲の景色と同化させることのできる、とんでもない科学力をもった戦闘エイリアンだったってえことがわかるわけですね。

まあこのエイリアンにしてみれば、たまたま当たったのがシュワルツェネッガーさまだったってえのが運が悪い。

シュワルツェネッガーさまかスタローンさま以外ならなんとかなったと思うんだけど。

映画的にはほぼ最強の人間に当たってしまったとは全くもって運のないエイリアンです。かわいそうに。

おそらく人類最強の男の手によってボコボコにされてしまったプレデターくん、2以降で人類にリベンジをはかるんだけれども、2以降はなんだかものわがりの良いキャラになっていくような気がするのは私だけでしょうか。

スズメバチ

2002年フランス映画

監督 フローラン・エミリオシリ

主演 ナディア・ファレス、ブノワ・マジメル、サミーナ・セリ

あんまり面白くないだろうなあ、でもまあいいか、てな気持ちで見始めたんだけど、映画見たら想像していた以上に面白かったです。

ジャンルとしてはバイオレンス映画になるのかなあ。

例えて言うなら、ゾンビを出さずに「ドーン・オブ・ザ・デッド」を撮ったらこうなりました、みたいな感じでしょうか。

三組の主人公グループがおります。

まず五人組の窃盗団。老人と若者が組む倉庫警備員。逮捕されたマフィアのボスを護送する特殊部隊チーム。

普通に考えると出会うことのあり得なかった三組の主人公グループが出会ってしまうまでが前半の物語。

窃盗団は倉庫に侵入、二人の警備員を縛り上げ、倉庫に山積みされた大量のパソコンを失敬して売りさばこうとしております。

一方の特殊部隊チーム。マフィアのボスを裁判に出頭させるために護送していたわけですが、マフィア側の周到な計画によって予定の輸送コースから外され、完全武装されたマフィアの「軍隊」の集中砲火を浴びることになります。

囚人を乗せた装甲車は多大な犠牲を出しながら逃げて、襲撃現場の近くの倉庫に隠れます。

で、その倉庫こそ窃盗事件が現在進行中だった「窃盗団と警備員の倉庫」だったわけです。

ここから先はもうほとんど「ドゥーン・オブ・ザ・デッド」ですわな。

完全武装したマフィアたち。暗視カメラと赤外線センサー。催涙ガスや手りゅう弾、ロケットランチャーまで持っております。

暗視カメラの目の部分が赤く光っているところなんかエイリアンかゾンビみたい。

三組のグループは倉庫に籠城して助けが来るのを待つことになります。

一人また一人とやられていく仲間たち。何人が生き残ることができるのでしょうか...

特殊部隊チームのリーダーがなんと女性でございます。こういう設定、ちょっといいですね。

窃盗団チームのメンバーの一人の女性と心が通い合うみたいな場面もあって、ちょっとほっとできたりしました。

スパイキッズ3・ゲームオーバー

2003年アメリカ映画

監督 ロバート・ロドリゲス

主演 アンтониオ・バンデラス、カーラ・グギーノ、ダリル・サバラ、アレクサ・ベガ、シルベスタ・スタローン、リカルド・モンタルバン、忘れちゃいけないジョージ・クルーニー

どの資料を見ても「主演 アンтониオ・バンデラス」と書いてありますが、過去二作以上に今回は出番が少ない。

本当の主役はスパイキッズの弟の方、ダリル・サバラさまです。で、影の主役はリカルド・モンタルバンさまかな？

スパイ・キッズ・シリーズもええ感じでトリップしてまいりまして、ここまできると予測不能のしっちゃかめっちゃか、みたいな感じです。

今回の敵はトイメーカー＝スタローンさま。彼は世界中の子供たちを支配するためにゲームソフトを開発。大統領＝クルーニーさま率いるスパイ組織は、その陰謀を察知し、スパイキッズ・ベガさまをゲームの世界に送り込みます。

しかし彼女はゲームの世界から戻れなくなってしまいます。彼女を救いに行くのは弟のサバラさま。

彼は組織への不信感のためスパイ活動から遠ざかっていましたが、姉の危機を救うため、単身ゲームの世界に入り込みます。

しかし協力者がいないわけではない。ゲームのモニターとして選ばれた子供たちと協力しながら、彼はゲームの最終ステージを目指すことになります。

とちゅうからベガさまとサバラさまの「おじいちゃん」、モンタルバンさまが参戦。

ここらあたりから物語はスラップスティックな方向に走りはじめますが...

まあいいか。スパイ・キッズだし。

ポップコーンとコーラ片手に見ていただきたい映画です。ポップコーンは塩味じゃなくてキャラメル味だろうなあ、この作品に似合うのは。

スウィングガールズ

2004年フジテレビ・アルタミラピクチャーズ作品

監督 矢口史靖

主演 上野樹里、貫地谷しほり、本仮谷ユイカ、豊島由佳里、平岡祐太、竹中直人、渡辺えり子

「ウォーター・ボーイズ」で脚光を浴びた矢口監督。今度はジャズのビッグバンドにチャレンジする女子高校生の青春群像を描きます。

以下はこのコラム書いたときのブログの本文です。

「申し訳ないんですが、私って若い女優さんの名前とかすっげえ弱い。それなりに何本か映画やドラマに出てはじめて名前覚えるタイプでして。

最近ようやく石原ひとみと宮地真緒の名前覚ええました。セカチュウの子は映画もドラマも名前覚えてないし、1リットルの涙の子はフルネーム怪しいし。そんなオヤジなんで女優さんの名前とかわかりません。ごめんなさい」

...時代を感じるわ。このコラムをブログにアップしたのは2005年。

テレビ版の「ウォーター・ボーイズ」で石原さとみ様、宮地真緒さまはかろうじて知っていたようです。当時の私。ちなみにセカチュウの映画版は長澤まさみさま、ドラマ版は綾瀬はるかさま。「1リットルの涙」の子は沢尻エリカさまです。

今では上野樹里さま、貫地谷しほりさま、本仮谷ユイカさまの三人は主役級の大活躍をしております。

えっと。上野さま（担当楽器はサクソ）は、無目的に学生生活を送るだらけた感じの少女。夏休みは毎日補習授業です。

夏休みといえば野球部の試合。吹奏楽部員たちは補習組を尻目に当然応援に行くわけですね。ところが行き違いがあって吹奏楽部員たちが乗るマイクロバスの出発に弁当が間に合わなかった。補習授業をさぼりたかった彼女たちは「弁当届け役」を買ってでます。しかし彼女たちは実にテキトーに弁当を運んだので、届けた弁当は腐ってしまっておりまして、吹奏楽部のみなさんは弁当を食べそびれた男の子、平岡さまを除いて全員食中毒になっちゃいます。

でも野球部の次の試合が近づいてくる。吹奏楽部は臨時のメンバーを大募集。やっぱり補習をさぼりたい彼女たち、吹奏楽部の臨時メンバーに応募します。

彼女たち以外にやってきたメンバーにはなぜかエレキギターやエレキベースとかだし、人数は中途半端だし。しかたないからジャズのビッグバンド編成で野球部の応援しようってことになります。

主要キャラはサクソ・トロンボーン・トランペット・ドラム・ピアノにうまく振り分けられます。

次第に音がまとまり、音楽が面白くなってきた矢先、吹奏楽部のメンバーが揃って復帰。

彼女たちは音楽と楽器をとりあげられてしまうことになってしまいます。

物語は、音楽をとりあげられた彼女たちの夏からビッグバンドとして地域学生音楽祭のステージ

で彼女たちが演奏する冬までを、明るくコミカルに描きます。

矢口監督は若い役者さんを生き生きと描くのが本当に巧いですね。

感心してしまいました。ビッグバンドの中で唯一の男の子、平岡祐太さまはこのあと2005年のウォーターボーイズ主演グループに抜擢されます。

あと竹中直人さんが本当にうまい。達者な役者さんですねえ。

理由

2003年日本テレビ作品

監督 大林宣彦

主演 村田雄浩、寺島咲、岸辺一徳、大和田伸也、久本雅美、宝生舞、風吹ジュン、柄本明、小林聡美、勝野洋、西岡徳馬、山田辰夫、永六輔。

宮部みゆきさまの大ベストセラーの映画化。

圧倒的な人数の俳優さんたちが、ノーメイクに近い状態で出演。それによって強烈なリアリティを出すことに成功しております。

そもそも宮部さまの原作ってのが、ノンフィクションの手法を使い、「関係者の証言」と「報告者の立場からの筆者の視点」を織り交ぜながら、とんでもないスケールの物語を組み立てた作品です。

驚異的な作品世界を名匠、大林宣彦監督が原作の空気そのままに、テレビのドキュメンタリー番組のような構成を使い、主に「証言の積み重ね」と「回想シーンの積み重ね」で複雑な構造を持つ「事件」が語られます。

そびえたつ高級分譲マンション。ある嵐の夜、そこで転落事故が発生します。落ちたのは住人の若い男。

それだけではなく、その男の部屋を調べると、彼の家族三人が惨殺されていたのが発見されます。

しかしそれはまだまだとんでもない謎の入り口。調べれば調べるほど物語が入り組んできます。その部屋に住んでいたのは父・母・サラリーマン風の息子・車椅子のおばあちゃん。転落死したのは息子。しかしその部屋にはその四人のほかにも、中学生くらいの男の子や水商売風の女や中年サラリーマンなんかが出入りしていることも目撃されています。

さらには部屋で殺されていた「父」の妻なる女性が現れ、事件はさらに迷走をはじめます。

事件とは全く関係のなさそうな人物のちょっとした証言が物語の流れを大きく変えたり、関係なさそうな人がとても重要な役割を持っていたり。

宮部さまの原作の持つ力が存分に発揮されたすばらしい作品でした。

アンブレイカブル

2001年アメリカ映画

監督 M・ナイト・シャマラン

主演 ブルース・ウィリス、サミュエル・L・ジャクソン

「シックス・センス」のM・ナイト・シャマラン監督が、ブルース・ウィリスさまに加えてサミュエル・L・ジャクソンさまを起用。

ウィリスさまとジャクソンさまの豪華な演技合戦が楽しめる一編です。

131人が犠牲になった列車事故。乗客乗員のなかで、ただ一人無傷の男がいました。

それがウィリスさま。ウィリスさまはスタジアムの警備員です。ある日、彼に謎の男が接触してきます。この男がジャクソンさま。

彼は先天的な障害をもって生まれてきております。骨が脆い。転倒するだけで何箇所かの骨を骨折するような男です。子供の頃から部屋に引きこもっていた彼はコミックスの世界は実在すると信じています。そして、生まれつき脆く弱い身体を持つ自分と対極に位置する「強い」男、コミックスの主人公のような不死身の男が存在するはずだと思っております。

ジャクソンさまはウィリスさまに「特殊な能力」が備わっていないかを訊ねます。事実ウィリスさまは武器を持ってスタジアムに入ろうとする者がわかったりして。

つまりウィリスさまには他人の悪意を読み取る力が備わっていたわけであります。

そこまでわかるのであれば、やるべきことはわかるはずだ、そうジャクソンさまは言います。

ウィリスさま、人ごみの中に立ち、いろいろな人の悪意を読み取ります。そして監禁事件を起こしている男の存在を知り、監禁されている女性たちを解放しようと単身犯人の家に乗りこみます

...

途中までサミュエル・L・ジャクソンさまのキャスティングがけっこう謎でしたが、物語中盤から後半を見てこの人が起用された理由ってやつがわかったような気がしました。

シャマラン監督お得意の二段オチ三段オチ。最後のドンデン返しはけっこういけてました。けっこうびっくりしましたです。

LOVERS

2004年中国映画

監督 チャン・イーモウ

主演 金城 武、チャン・ツイイー、アンディ・ラウ

金城 武さま主演で、タイトルが「ラバーズ」だから、宮廷恋愛叙事詩みたいな作品だと思っておりまして、全然違うんでびっくりしました。

中国戦国叙事詩みたいな感じですね。「ヒーローズ」みたいな世界です。

金城さまとラウさまは中国の田舎町の役人。軍は出沒する盗賊集団対策に頭を悩ませています。二人は「盗賊団の棟梁の娘は盲目で、手裏剣の使い手。女は盗賊団から離れ、単独で行動している」という情報を手に入れています。

ちょうどそのころ、彼らの管轄下の遊廓に盲目の踊り子が現れたという情報が。

金城さま、身分を隠して遊廓に偵察に赴きます。盲目の踊り子はツイイーさま。捕らえてみればやはり彼女は盗賊の娘。金城さまとラウさまは再び一計を案じます。

金城さまの身分は娘にはばれていない。ならば彼女を逃がすふりをして、盗賊のかくれがまで案内させ、そこに軍を派兵して一網打尽にしようと、こう考えるわけです。

彼女を信用させるためにおとりの兵士に彼女を襲わせたりする念の入れようでございます。

しかし細かい計画を知らされていない兵士が派遣されたがため、やがて金城さまとツイイーさまは本気で軍隊と戦いながら逃げることになってしまいます。

軍隊に囲まれ、絶体絶命の二人。そこで彼らを救ったのはラウさま。

しかし彼はこれ以上の協力はできないと金城さまに告げ、作戦の中止を告げます。

そして「彼女を本気で愛するな」との言葉を残して去ります。

事実、金城さまはツイイーさまに惹かれはじめておりまして。

いぐわああああ。しかしお役目。ツイイーさまに別れを告げる金城さま。しかしその後、襲ってくる軍隊。

ツイイーさまへの思いを止めることができず、再びツイイーさまを助けるために戦う金城さま。

おお、ラバーズやあ。

ここからの展開がすごい。ネタバレになるので書けません。残念。

チャンバラあり舞踊ありラブシーンあり。なんでもありのてんこ盛り。日本映画もこれくらいがんばってほしいものですね。

隣のヒットマン

2000年アメリカ映画

監督 ジョナサン・リン

主演 ブルース・ウィリス、マシュー・ペリー、ナスターシャ・ヘンドリッジ

こいつはすっげえ普通のコメディ映画だと思っていましたが、思っていたよりずっとブラックな笑いに満ちていて、とっても楽しめた映画です。

主人公ペリーさまは歯科医。妻と義母から稼ぎの多くをむしりとられる、いわば金づる状態の毎日を送っております。

彼の歯科医に最近やってきた女性助手さんの優しさにけっこう助けられている毎日です。

ある日、彼の家の隣に男が引っ越してきます。男はマフィア伝説のヒットマン、ウィリスさま。警察にボスを告発し、今では組織から命を狙われています。ひよんなことからペリーさまは「隣のヒットマン」に気にいられてしまい、家に招待されたりします。

それを知った妻、組織に彼の居場所を知らせ、ボスの息子から謝礼をもらえとけしかけます。適当にごまかそうと思っていたペリーさまですが、強欲妻はきっちりマフィアにアポをとっていたりして、結局彼はマフィアに隣人を売ることになってしまいます。

えらいこっちゃ。で、あろうことかヒットマン・ウィリスさまの妻とデキてしまったりします。マフィアにウィリス殺害の手引きをすると約束させられた歯科医、自宅に戻るともっととんでもない話が。

なんとかわいい女性歯科助手は妻に雇われた殺し屋。妻は自分を殺して保険金を手に入れようとしているらしい。

ここらあたりから歯科医は開き直りはじめます。おたおたしながら事態に振り回されていましたが、次第に積極的に問題解決に向かって動きはじまるわけです。

ここからの展開がとにかく面白い。ネタバレになっちゃうから詳しくご紹介できないのが残念。コメディって苦手分野なんですけど、こいつはかなり楽しめました。

ボディ・ガード

1992年アメリカ映画

監督 ミック・ジャクソン

主演 ケビン・コスナー、ホイットニー・ヒューストン

ホイットニー・ヒューストンさま、亡くなってしまいましたね。

良いシンガーだったのに。ご冥福をお祈りいたします。

えっと、かなりベタベタのラブサスペンスアクションでごぜえますだ。

当時のスーパースター、ホイットニー・ヒューストンさまが映画初主演。しかも主題歌まで歌った作品。

ヒットしないわけがない。事実映画は大ヒット。しかも主題歌も大ヒット。

物語そのものはあんまり難しくない話です。むしろ単純。スーパースターのシンガー、ヒューストンさまが何者かに命を狙われていることがわかります。

彼女のエージェントは百戦錬磨のボディガードを雇い、護衛にあたらせます。このボディガードがコスナーさま。

最初のうちはとってもわがままなスーパースター。しかし殺し屋の影が現実に見えはじめ、次第に協力的になってきます。

物語前半は「暗殺者は誰なのか」という話と「依頼人は誰なのか」という話が、ボディガード・コスナーさまの活躍と並行して描かれます。

物語中盤で依頼人が明らかになりますが、暗殺者への殺人依頼はすでに中止できなくなっていることがわかり、後半からクライマックスにかけては「スーパースター暗殺の阻止」だけに焦点が絞られて描かれていきます。

ラストでやっぱりお約束の主題歌が流れます。

うんうん。予想していても胸が熱くなる系の名場面。うおおお。ケビン・コスナーさまかっこええ。

ちなみにヒューストンさまのマネージャー役で出演しているのは、元スパンダー・バレエのギタリストで役者に転向したゲイリー・ケンプでございます。

パンフレット見てむちゃびっくりしましたです。

ケープ・フィアー

1991年アメリカ映画

監督 マーティン・スコセッシ

主演 ロバート・デ・ニーロ、ニック・ノルティ、ジェシカ・ラング、ジュリエット・ルイス、ジョー・ドン・ベイカー。

なんとグレゴリー・ペックとロバート・ミッチャムも出演しております。

1962年に製作された「恐怖の岬」のリメイクです。前作で弁護士役だったグレゴリー・ペックさま、異常者役だったロバート・ミッチャムさまも特別出演しております。

前作はいかにも悪役顔のペックさまが善玉、善人キャラのミッチャムさまが犯人役と、意外なキャスティングが話題になった作品です。

本作はというと...うむむ。デ・ニーロさまの悪役は「アンタッチャブル」とか「フランケンシュタイン」で見てるから、もひとつ新鮮味はなかったですね。

ノルティさまも悪役やってた記憶があまりないくらいの善人キャラだし。

キャスティングの妙に関しては前作に軍配があがりますね。

さてストーリー。デ・ニーロさまは前科者。婦女暴行の罪による14年の刑期を終え、出所します。

彼は服役中、ひたすら身体を鍛え上げ、同時にある男を恨む言葉の刺青を身体に入れております。

デ・ニーロさまが恨むのは弁護士ノルティさま。彼のせいで自分は投獄されたのだと逆恨みしております。

この男の恐ろしいところは、服役中にひたすら法律を勉強していたところ。

出所したデ・ニーロさまは法にふれないぎりぎりのところでノルティさまをつけ狙い、彼らの家族にいやがらせを繰り返します。

身の危険を感じたノルティさま一家（妻はジェシカ・ラングさま、娘はジュリエット・ルイスさまです）、片田舎に所有していたボートに避難し、水上生活をして男のいやがらせをかわそうとしますが、それもまた狡猾な男に予測されていました。

逃げ場のないボートの中で、ノルティさまとデ・ニーロさまの対決となります。

デ・ニーロが異常者の復讐鬼を怪演。なかなかの迫力。それ以前に超ムキムキにまでなってしまう「変身役者」デ・ニーロさまの凄さを改めて感じてしまいましたです。

監督 ハロルド・ライミス

主演 ロバート・デ・ニーロ、ビリー・クリスタル

ロバート・デ・ニーロさま主演のコメディです。

全米ではかなりヒットした映画ですが、日本ではあまり評価されなかったようです。

そもそもハリウッドコメディって日本ではヒットしにくいってジンクスがあるそうです。

笑って難しい。

その国の言葉だとか文化だとかが理解できてないと、本当の意味では笑えないわけです。

この映画でとりあげられている「セラピー」だとか「心理カウンセラー」だとか、それどころか「マフィア」からして、今でこそけっこう浸透した言葉ですが、公開当時は、皮膚感覚として自分たちがどれだけ理解できているかわからない感じでしたし。

そんなビハインドをスタートラインから背負った映画であります。

デ・ニーロさまはマフィアのボス。原因不明の発作を繰り返しています。病院でついに「パニック症候群」と診断され、精神分析医のクリスタルさまのもとへ。

そもそもクリスタル先生、渋滞した道路でボスのボディガードの車に追突してしまったって弱みがあります。

仕方なくデ・ニーロさまの治療を引き受けるクリスタルさま。

しかし彼にとってこれが受難の始まりだったわけで。

クリスタルさまは自分の結婚式を台無しにされたり、FBIに捜査協力を要請されたり。どんどん状況が悪化していきます。

かわいそう。

あがけばあがくほど状況が悪化していくってあたり、なんか馳星周さまの某小説みたい。

ヒューマンドラマなんかにしたらけっこう面白い話になったかもしれないですが、これだけ馴染みのない世界を描かれるとやっぱりわかんないって感想しか残らないです。

中盤から後半にかけて、ちょっと長さを感じてしまいました。

私、あまり映画の長さを感じないタイプなんです。やれやれ。

ア・フュー・グッドメン

1992年アメリカ映画

監督 ロブ・ライナー

主演 トム・クルーズ、ジャック・ニコルソン、デミ・ムーア

かなり前になりますが、関西の某ラジオ番組に井筒監督が出演されておりました。その年の映画をメッタ斬り。特に厳しい評価を受けていたのはその年公開の「宇宙戦争」「スターウォーズエピソードIII・シスの復讐」「三丁目の夕日」などなど。

特に「宇宙戦争」の評価は正にボロクソ。

「トム・クルーズなんてねえ、笑うか怒るか泣くかしか表情ないやないか」...まさにボロクソ。そんなトム・クルーズさま主演の秀作。実はトム・クルーズさまってすぐ消える系の役者さんだと思っておりました。

最初にブレイクしたのは「トップ・ガン」だったですよ。

実はその前に「タップス」って作品でとんでもない印象的な演技をしておりました。そこからは「カクテル」だとか「デイズ・オブ・サンダー」とか、本当に「笑ってるか怒ってるか泣いてるか」みたいな役ばかりやっておりました。

でもですねえ、「レインマン」「ザ・ファーム」あたりで急におお化け。ただの二枚目俳優ではないことを実力で証明しました。

さて、「ア・フュー・グッドメン」。

クルーズさまは新米弁護士。海軍基地で起こった隊員殺人事件の謎に挑みます。

軍の機密、軍内部の上下関係・力関係。真実にたどりつくためには様々な壁がありまして。

被告席に座るのは軍の名将、ニコルソンさま。

後半はクルーズさまとニコルソンさまの演技合戦の様相を呈します。法廷シーンの盛り上がりは素晴らしいの一言。

ニコルソンさまの「性悪演技」にひっぱられて、クルーズさまがんばります。

なかなかの名作でございます。

ハードターゲット

1993年アメリカ映画

監督 ジョン・ウー

主演 ジャン・クロード・バンダム、ランス・ヘリクセン、アーノルド・ヴォスルー、ヤンシー・バトラー

ジョン・ウー監督のハリウッドでの初メガホン作品。なんか微妙に力が入っておりますなあ。それらそうでしょうなあ。

とりあえず、ジョン・ウー監督、いいところ全部見せようって勢いで作品作っております。

スローモーション、二丁拳銃、そしてハト。この作品以降の諸作品で使われる重要ツールがバンバン出てきますよ～

バンダムさまもええ感じ。この人、ええ感じで監督に恵まれていますよね。ジョン・ウーと組んだり、ピーター・ハイアムズと組んだり。

ベトナムで精神的にやられてしまった父を探す女性弁護士。

彼女を助けるのは謎の船員、バンダム。ほんま謎やわ。なんでこんなに強いのでしょうか。

マーシャルアーツの達人の船員。バンダムものでは格闘技の達人の消防士とかいましたけど。

セガールの作品でもありましたなあ。あれは元特殊部隊のコックでしたが。

さてさて「ハード・ターゲット」でございます。

女性弁護士の父親はニューオーリンズで行われていた人間狩りの被害者になっていたってことがわかります。

そしてお約束。秘密に近づいたバンダム、今度は狙われる側になってしまいます。

しかし天下のバンダムですからね。ワルをやっつけちゃうことはキャスティングみた時点で確定です。

ガンアクションでひたすら見せてくれたあとは肉弾アクション。

まわしげり炸裂。いぐわあああ。

ジョン・ウー監督、香港時代も実はこんななんでもありヒーローアクションやりたかったんだろうなあ。

クイック&デッド

1995年アメリカ映画

監督 サム・ライミ

主演 シャロン・ストーン、ジーン・ハックマン、レオナルド・ディカプリオ、ラッセル・クロウ

サム・ライミ監督のウェスタン。しかも主演はシャロン・ストーンさま。

すっげえ期待して見ました。

感想は... そうですねえ。サム・ライミさまらしくないというか、サム・ライミさまでなくてもいい題材だったんじゃないかなあ、ってのが正直なところ。

演出もちょい個性に欠けます。でも面白い映画であることは間違いないです。

ハックマンさまが市長をつとめる西部の町。そこでは早撃ちトーナメントが開催されています。参加するのはハックマンさまの息子のディカプリオさまだとかハックマン市長本人だとか、元ならず者の牧師クロウさまだとか。

そこに女性ガンマン・ストーンさまが現れ、トーナメントに参加します。

ん？この時点で誰がどう戦ってどんな結末のなるのかわかるような気がするのは私だけでしょうか。

ええ感じで予想通りトーナメントは進みます。途中クロウさまとストーンさまが当たって、ストーンさまが負けてしまいます。

ちょっと意外。逆やと思ったんですが。

でもストーンさまは死んでなくて、クロウさまとハックマンさまの決勝戦に乱入。

しかも大爆破大会のおまけつき。いぐわあああ。

しまった。ネタバレ書いてしまったあ。

クロウさまとハックマンさまが決勝で戦うってことは、レオさま、早々にご退場されます。ほんま、かわいそう。

物語の展開とか、もう少し変えたらもっとええ感じでもりあがったんだと思いますが。

この作品構造だと、どうしても対決の繰り返しになってしまうので、後半にいくにしたがって「もうええがな」って気分になってしまいます。

そんな私ってわがままな観客なのでしょうか？

金融腐蝕列島・呪縛

1999年東映作品

監督 原田真人

主演 役所広司、椎名桔平、仲代達也

DVDを手にとってキャストを見て、「うわ、すげえ、重いキャストじゃあ」って思ってそのまま見てしまった作品です。

だって役所さま・仲代さま・椎名さまだけでもめっちゃ重いのに、他に石橋蓮司さまとか佐藤慶さまとか出てるんですよ。

証券会社への利益供与で地検の強制捜査をうけた巨大銀行が舞台。

銀行の将来に危機感をもった役所さま・椎名さまら、もう若手ともいえない中堅若手銀行員たちは、経営陣たちを相手に戦います。

ここからどんどん物語はディープな展開になっていきます。

いきなり入院する取締役がいたり、こういう物語につきものの「罪をぜんぶひっかぶって自殺する」キャラがいたり、あーだこーだの駆け引きがあったり。

おお、さすが経済小説の大家、高杉良さまの原作小説ですなあ。

高杉様の小説は、スイミングから今の仕事にうつるとき、「小説・消費者金融」って作品を拝読致しました。

そのとき、就職希望先企業リストに消費者金融の会社がありまして、つい読んでしまいましたかな。

構成とか作品の設定がすげえ緻密で、面白い作品を書かれる人ですよ。

映画の原作は「金融腐蝕列島上・下」、「呪縛 金融腐蝕列島II」。

重いキャストイング、強烈すぎるテーマ。でも見終わったあとは何か元気になれる作品。

古い経営陣がとらわれている「呪縛」を解き放ち、その先にある「再生」を目指そうという熱いメッセージは、すべての「経営者を除く」サラリーマンの胸に届くはず。

うちの会社の中堅社員がこういう映画見ないといけないんだけど。

でもあの人たち馬鹿だから、この映画のメッセージちゃんと受け止められないかもしれないなあ。

ってこそっと毒吐いてしまった。

地獄の黙示録

1979年アメリカ映画

監督 フランシス・フォード・コッポラ

主演 マーロン・ブランド、マーティン・シーン、ロバート・デュバル

「ゴッドファーザー」で名匠の仲間入りを果たしたコッポラ監督。

巨匠がマフィアの次にとりあげた題材はベトナム戦争でございました。

私が小学校五年で本格的に映画をみはじめたころには、コッポラ監督はすでに大巨匠でございました。

でも「ゴッドファーザー」を実際に見たのはかなり大きくなってから。恐らくテレビのオンエアではじめて見たように記憶しています。

コッポラ監督の作品を初めて見たのはたぶんこの作品のほうが早かったんじゃないかなあ。

中学生とか高校生とか、そんな時期に見ました。とにかくわけわからなかったです。

「2001年宇宙の旅」見たときみたいな、「ほげえ〜」みたいな印象だけしか残らなかったです。

前半はいいんですよ。なんとなくついていけたし。しかし中盤から急に戦争映画から哲学映画みたいになってしまって、とりのこされたまんま物語だけが進んでいくような感じでした。

ベトナム戦争下での「狂気」と「精神の迷走」をテーマにしているんだろうとは思うんだけど。ああいう表現しかなかったのかなあ。

狂気だけなら「フルメタルジャケット」、精神の迷走なら「プラトーン」のようによくできていたように思うんだけど。

作品の舞台はベトナム。米軍の大佐ブランドさまは軍を脱走し、山奥の村で自らの「王国」を築き、支配者として君臨しております。

そんな事態を容認することができない軍上層部は、彼の暗殺を企てる。

その暗殺者として選抜されたのがマーティン・シーンさまでありまして、彼は王国を目指す旅を続けながら「戦争の狂気」を体感しつつけていきます。

その旅のなかで、シーンさまはブランドさまの精神世界に同調しはじめる。

果たして彼は使命を果たすことができるのでしょうか。

後半になってバンバン現れる不気味なイメージショット。

その画像の意味するところを理解するのが嫌だったから、少年時代の私は「わけわかんない」って思ったかったのかもしれないね。

映画の突きつけるベトナムの現実はかくも辛辣だったのだあ、って感じですかな。

リング2

1999年「リング2」製作委員会作品

監督 中田秀夫

主演 中谷美紀、松嶋菜々子、真田広之、柳ユウレイ、深田恭子

リングの続編。「リング」「らせん」「ループ」と続く原作本の世界とは別の設定の続編です。そもそも中田監督の「リング」と飯田監督の「らせん」は同時上映の作品で、「さあみなさんどっちが恐いですか」みたいなノリでした。

で、やっぱり断然「リング」のほうが恐かったわけで、じゃあ「らせん」のことはおいといて、映画版独自の続編作ろうよ、ってのがこの「リング2」でございます。

前作（「リング」）ラストで明らかになった貞子の呪い封じ。

その甲斐あってか、主人公二人（松嶋さまとその息子）は生き延びます。

お話は前作の一週間後。例のビデオを見た者と、そのビデオを見て生き残った者から次の呪いが広がっていくわけですな。

今回の主人公は前作でイマイチ印象が薄かった中谷美紀さま。真田広之さまの研究室の学生です。

今回は彼女が「呪いのビデオ」の謎を追いますが、彼女には不思議な力がありまして。そういう力で謎を追うわけですな。

それとは別に、松嶋さまの部下もビデオテープの謎を追います。ってことで、ちょっと複雑な構造のお話になっています。

深田恭子さまの出演場面が妙にコワイ。かわいいんだけど。

でも続編としては私的には「らせん」のほうが好きだなあ。

メリーポピンズ

1964年アメリカ映画

監督 ロバート・スティーブenson

主演 ジュリー・アンドリュース、ディック・バン・ダイク

世界で一番長い単語はなんでしょうか。ある本によると、この映画の中にでてくる「元気になるおまじないの言葉」、「スーパーカリフラジェリスティックエキスピアドーシャス」ってのが世界一長い単語だそう。

でもね、まあこの言葉は造語だから、公認されないでしょうし、別の文献によりますと、この言葉より長い言葉(医学用語らしいです)が存在するそうでございます。

ディズニー懐かしの名作。小学生の私はおばあちゃんに連れられてこの映画を見にいきました。

傘をさし、風に乗ってやってきた不思議なお手伝いさん、メリーポピンズ。演ずるのはもちろんジュリー・アンドリュースさま。

彼女の仕事先は銀行員の家。わんぱく盛りの二人の子供がおります。

彼女には煙突掃除人のディック・バン・ダイクさまみたいなわけのわからん友人がおります。

二人は不思議な呪文を唱えて歌い・踊り、ついにはアニメの中に子供たちを連れていったりします。

ありえへんけど、こういうのは夢があってよろしい。

銀行員の父は、子供たちに貯蓄の大切さを教えようとします。しかし二人は、銀行の目の前にある公園にいるハトのためにお金を使いたいと思っています。

父と子供たちの気持ちの行き違いが、やがてとんでもない騒ぎをひきおこすことになります。

とにかく銀行員のお父さん酷い目にあいすぎ。

それでも最後は心温まる結末。ええなあ。さすがディズニー映画やわ。

ってやさしい気持ちになる作品でございます。

ディック・トレイシー

1990年アメリカ映画

監督 ウォーレン・ベイティ

主演 ウォーレン・ベイティ、マドンナ、ダスティン・ホフマン

おお、ディック・トレイシー。

かなり好きな世界でございます。

いかにもいかにもアメリカンコミックスの世界。

なんかねえ、画面の雰囲気から何から登場人物の造形から、とってもアメリカンコミック。アル・パチーノさまだとかダスティン・ホフマンさまだとか、原型をとどめない特殊メイクで、コミックスのキャラクターを熱演しておられます。

監督・主演のウォーレン・ベイティからしていかにもいかにもなキャラクター設定に演技ですよ。

ほんま、コミックスの探偵そのまんま。むっちゃええ感じ。

そしてそして。「マダーナ」。カツヤ・コバヤシさま風に書いてみました。マドンナさまでございますね。

マドンナさまもまた、まんまアメリカンコミックスから抜き出てきたようなキャラでございます。

刑事ディック・トレイシーがベイティさま。彼が追う暗黒街のボスがパチーノさまです。

パチーノさま、クラブの歌姫マドンナさまを手に入れるために、彼女の勤め先のクラブのオーナーを殺害します。

情報屋のホフマンさまからこの情報を手に入れたベイティさま、マドンナさまに証言を依頼するわけですが、彼女は言うわけですな。

「証言するかわりに、欲しいものがあるの。それはあなたの愛よ」みたいな。

でもベイティには彼女がおって。

うううううん、めっちゃアメコミ。

いかしてる。ええ感じ。とにかく細かいことは抜きにして、ベイティさま流のアメリカンコミックスワールドをお楽しみいただけたらと思える作品でございます。

ロング・キス・グッドナイト

1996年アメリカ映画

監督 レニー・ハーリン

主演 ジーナ・デイビス、サミュエル・L・ジャクソン、パトリック・マラハイド

リリース直後、あんまりチェックしてなかったんです。この映画。でもなんかやたら評判良いし。で、テレビのオンエア見まして、やっぱりすんげえ面白かったです。

サミュエル・L・ジャクソンさま、いつもながらええ感じです。

しかし言わせていただきますと、この役って私的にはダニー・グローバーさまのキャラやないかなあと思うのですが。

どうでしょうか。

デイビスさまは主婦。むっちゃ主婦。ただしこの人、記憶喪失なわけです。そんな彼女が交通事故にあってしまいます。

それによって彼女は思い出してしまうわけです。なんと彼女は超実力者の女性特殊工作員だったわけで。

で、工作員であることを思い出してしまったことが平和に暮らしていた彼女を新しい事件に巻き込んでいくわけですな。

ジーナ・デイビスさまという女優さん、この作品を見るまで知らなかったです。どんなキャリアの女優さんなんですか。

途中の展開なんかほんまええ感じです。アクションもサスペンスも大好きな私はかなり楽しめました。

サミュエル・L・ジャクソンさま、相変わらずかっこええ。

ジーナ・デイビスさまはもちろんええ味だしてますが、ジャクソンさまがとにかくええです。

おいしいところ全部もっていった感があります。

是非お楽しみいただきたい作品でございます。

バグズ・ライフ

1998年アメリカ映画

監督 ジョン・ラセター

ピクサー・プレゼンツのアニメです。

アニメといいながら圧倒的な質感をもつ映像。

さすがフルCG作品でございます。こういう映画の解説ってすごく書きにくいんですが。

虫たちの世界を描いた物語。

主人公は蟻。発明家の蟻フリックがいる集落では、ホッパーって奴が率いるバッタ（イナゴでしょうか）一族の略奪に苦しんでおります。

フリックは収穫の食料を川に流してしまうという大失敗をしてしまい、その責任をとって食料をバッタたちから守ってくれる用心棒を探して旅に出ます。

で、彼は旅芸人たちの一座に出会うわけです。

ここでとんでもない勘違い。

芝居小屋での出し物見て、この一座をすげえ武芸者集団だと勘違いしたフリックは、彼らに用心棒を依頼します。

芝居小屋の虫たちはその依頼を興行依頼だと勘違い。

かくして旅芸人の虫たちとフリックは、奇妙な勘違いをしたまま、蟻たちの集落に向かうことになります。

さて、彼らの運命は...

いやはや、とんでもなくすごいレベルのCGでございます。フルCGというと「トイ・ストーリー」「ファインディング・ニモ」あたりの作品を思い出します。

「トイ・ストーリー」だと、おもちゃたちの造形はとってもよくできていたのですが、その持ち主の人間たちがちょっと変なデザインだったのが残念でございました。

人間がでてきたとたん、リアルさが急速に失われてしまうというか。

この「バグズライフ」では人間が登場しない分、最後まで集中して楽しむことができましたです。

作品の最後におまけのNG集まで作ってしまう余裕。この遊び心がこの楽しい作品を支えているといえるでしょうね。

リング0・バースデイ

2000年「リング0・バースデイ」製作委員会作品

監督 鶴田法男

主演 仲間由紀恵、田辺誠一、田中好子

鈴木光司様原作の大河ホラーシリーズ「リング」、禁断の完結編。

日本版「リング」は本作をもってシリーズ完結です。

とはいいながら、なにも完結しないわけでありまして。これまでの諸作品に登場してまいりました山村貞子がいかにして「リングの貞子さん」になるに至ったかがネチネチと描かれる作品です。

。

主人公貞子を演じるのは仲間由紀恵。

しかしリングシリーズってすごいですねえ。竹内結子・松島菜々子・中谷美紀・深田恭子・仲間由紀恵が出演している映画シリーズって、よく考えればすごいことです。

しかし仲間由紀恵ってこの作品の時点ではまだまだ芝居も覚束ないし、表情も曖昧です。

今や大女優の風格さえでてきた仲間様、今ではこの「リング0・バースデイ」と「ガメラIII」だけのご自身のフィルモグラフィーから抹消したいんじゃないでしょうか。

物語はですねえ...みなさん見てなくてもわかると思うんですが。

超能力者の娘として生まれ、母親である「超能力者・山村志津子」の娘にしては母親よりもはるかに強い力を持っていた貞子の青春時代の姿と、その「力」の覚醒の様子、そしていかにして彼女が「井戸」で最後を迎えるに至ったかを描きます。

しかしシリーズものの宿命でしょうか、作品を重ねていくごとにクオリティが下がっていくのは仕方ないところです。

第一作リングほどの怖さもインパクトもなく、「らせん」「リング2」ほどにも物語は動かない。結末がどうなるかは観客のほとんどが知っているという、スタートラインからビハインドを背負った作品となってしまいました。

不利な要素目いっぱい背負った割には物語後半のホラー描写なんかは善戦してたんじゃないかと思います。

追記です。やはりやはり、リングワールドは「リング0・バースデイ」では完結せず、「貞子・3D」で復活でございます。

もうええって。

新幹線大爆破

1975年作品

監督 佐藤純弥

主演 高倉 健、宇津井 健、千葉真一、丹波哲郎

おお、懐かしい。この映画が公開された頃って、小学生くらいだったんじゃないでしょうか。むっちゃ珍しい、高倉健様の悪役演技が見られます。

この作品って、オンエアのタイミングがむっちゃ難しい作品です。爆破テロとかがあったり、列車事故とかがあったりしたら、即オンエア中止になります。

この話はUSA版「ゴジラ」のときにちょこっと書きましたが。

新幹線に爆弾が仕掛けられます。この爆弾は新幹線が時速80キロ以下にスピードを落とすと爆発する仕組みになっている、と国鉄に脅迫電話があります。

ん？どっかで見たような話。

恐るべし佐藤純弥監督。かの「スピード」のはるか前にこんな話を映画化していたとは。

物語はこの新幹線爆破予告事件を通して、犯人（高倉さまがリーダーです）・国鉄（新幹線運行責任者が宇津井さまです）・新幹線乗員と乗客（千葉さまが運転士です）・警察（もちろん丹波さま）のそれぞれの人間模様を丁寧に描きます。

長い映画ですが、とても丁寧に人物が描かれているので、ほとんど長さを感じさせません。

犯人グループの一人が事故死したり、要求を呑んだ警察に爆弾の場所と起爆装置の解除法を示した凶面を隠してあった喫茶店が火事になったり。

とにかくこれでもかというくらいいろいろな事件が起こります。

めっちゃ面白い映画です。画面のあちこちに、年代を実感させるような小道具が登場したりします。それはそれで見ていて楽しいかもしれませんね。

ちなみにちょっとだけネタバレさせますが...

映画の中では実際には新幹線は爆破されません。

爆破シーンがありますが、関係者の想像って描写でございます。しかしちょいチャチです。

今だとCG炸裂でしょうね。列車爆破シーンでは「皇帝のいない八月」のほうが迫力ありました。

サウンド・オブ・ミュージック

1965年アメリカ映画

監督 ロバート・ワイズ

主演 ジュリー・アンドリュース、クリストファー・プラマー

「ドレミの歌」「エーデルワイス」など、今も歌い継がれる名曲を世に送り出したミュージカルの傑作でございます。

スクリーンの向こうにはめっちゃ雄大な自然が広がって、いい感じ。いぐわあああ。

オーストリアの軍人のクリストファー・プラマーさま。

妻を亡くした彼は子供たちにめっちゃ厳格な躰をしています。そんなプラマーさまファミリー（役名ではトラップファミリーですよ）の前に風によって家庭教師が現れます。

映画が違うっっちゃうねん。風にはのらへんっっちゃうねん。風にのるのは「メリーポピンズ」やっちゃうねん。

でもまあ若干キャラがかぶっているのは確かですわな。同じジュリー・アンドリュースさまだし。

風にのったりせず、普通に現れたアンドリュースさまは子供たちに、自然の中で楽しく歌い、心のままに音楽を楽しむ素晴らしさを伝えようとしています。

最初は彼女のやりかたに眉をひそめていたプラマーさまですが、やがて彼女の純粋な心に惹かれはじめます。

で、最後には家族で合唱コンクールに出場したりしようとするわけだなこれが。プラマーさまは最終的にはアンドリュースさまを妻として迎えます。

でも純真無垢なファミリーにも戦争の影、ひたひた。有能な軍人だったプラマーさまのもとに、オーストリアを併合したナチスから軍人として復帰する命令書が届くわけです。

で、プラマーさま一家は中立国スイスに亡命することを決断します。

この亡命シーンでも背景の自然の美しさったらないです。もう、ほんまにすごい。

ロバート・ワイズって「ウエストサイド物語」の監督さんですよ。この映画では大事な場面ではロケ技術を駆使して、奥行きのある雄大な画面を作り出すことに成功しています。

この映画に比べると、「メリー・ポピンズ」とか「ウエストサイド物語」とかはちょっと画面が平板っぽい印象が残りますね。

とにかく見て損はない名画だと思いますです。

世界の中心で、愛をさけぶ

2004年「世界の中心で、愛をさけぶ」製作委員会作品

監督 行定 勲

主演 大沢たかお、柴咲コウ、森山未來、長澤まさみ

えっと。日本じゅうに「セカチュー」ブームを巻き起こした噂の名作です。

恋愛映画の苦手な私ですが、やっぱりこいつは外したらだめかなあ、とか思っていました。

主人公は大沢さま。回想シーンの彼の青年時代が森山さま。

で、森山さまの彼女が長澤さま。大沢様の彼女が柴咲さまね。

大沢さまは高校時代、彼女・長澤さまを白血病で亡くしています。大沢さまはまだ彼女を亡くしたってことから立ち直ってはいないわけです。

大沢さまとの結婚が近い柴咲さま。彼女が大沢さまの古い荷物を整理していたら、子供時代のカーディガンを見つけ、そのポケットに残されていたカセットテープを見つめます。

それを聞いた彼女は、大沢さまが青春時代を過ごした町へ向かいます。

偶然テレビのニュースで彼女の姿を見つけた大沢さま、彼女を追って故郷へと向かうことになります。

その故郷ってのはつまり、亡くなった長澤さまとの思い出がいっぱい残されている町なわけです。

大沢さまは柴咲さまそっちのけで長澤さまとの思い出にふけることになってしまっていて。

そこから長澤さまとヤング大沢さま＝森山さまの思い出が綴られるわけですな。

同級生だった彼女を女性として感じる瞬間だとか、彼女とケンカして彼女の大切さに気づくとか。

二人の思いは、お互いに相手へのメッセージを入れた「カセットテープの交換」っていう方法で綴られていきます。

うむうむ。こういうツールって、考えようによっては残酷なツールですよ。亡くなった彼女の肉声が入ったテープなんて、聞きたいけど聞けないものだろうな～

回想シーンでは、二人がお互いを意識しはじめてから白血病が二人の仲を引き裂くまでを丁寧に描いていきます。

そしてインサートされる現在の大沢さまの姿。

こちらでは故郷に立って、長澤さまとの思い出に終止符をうち、新しい人生を踏み出す大沢さまの姿が描かれます。

うん。良い映画なんだけど。私的には、映画のほうでもドラマ版みたいに360度回転カメラとか使って欲しかったです。

シー・オブ・ラブ

1989年アメリカ映画

監督 ハロルド・ベッカー

主演 アル・パチーノ、ジョン・グッドマン

最近ちょっと作品に恵まれていない感のある名優アル・パチーノさま。

なんかねえ、すんげえいろんな作品にご出演されておられますが、「ゴッドファーザー」シリーズ以外の良い作品にイマイチ恵まれていないって印象があります。

うむむ。あれだけいろんな作品に出演しているのに、ちょい輝かしさに欠るなあ。

こんなこと書いて響感かわないでしょうか。

だって私的には本当そうなんですよ。けっこういろんな作品で見かける割に、いまいちいけてないですわなあ。

アル・パチーノさまとほとんど同世代で、何かにつけ比較され続けてきたダスティン・ホフマンさまなんかは、「代表作ってどれ？」って聞かれたら逆の意味で困るくらい作品に恵まれているのと対照的です。

この作品もちょいいけてないです。

スタンダード曲の「シー・オブ・ラブ」のメロディとともに起こる殺人事件。

この殺人事件に挑むのがパチーノさまでございます。

しかし容疑者の女性にパチーノさまが惹かれていきます。果たしてパチーノさまは真実にたどりつくことができるのでしょうか。

どっかで見たような設定。どっかで見たような物語展開。どっかで見たような場面。

ちょっとついていくのがしんどかった作品ではあります。

んっとねえ、「恐怖のメロディ」と「氷の微笑」を足して二で割ったような世界が繰り広げられます。

ってことはね、それぞれの作品で見たような世界があちこちに出てきまして、ちょっと集中できなかったです。

ええ雰囲気かもしだしている割に、ちょっと残念な感じのする作品でございます。

2001年フランス映画

監督 ジェラルド・クラブジック

主演 ジャン・レノ、広末涼子、ミッシェル・ミュラー

おお、「ワッサービ」。主演のジャン・レノさまって俳優さんは、本当に器用な人だなあって思いますね。

「レオン」だとか「ニキータ」みたいな作品もこなすし、「ミッション・インポッシブル」とか「クリムゾン・リバー」みたいな娯楽作品もできる。

「ゴジラ」みたいな作品もこなせる。トミー・リー・ジョーンズさまみたいです。緒形拳というか。

ていうか、アメリカの緒形拳って称号は以前、トミー・リー・ジョーンズさまにさしあげたので、「フランスの緒形拳」または「フランスの竹中直人」って称号を差し上げたいと思います。

パリ警察の特別捜査官レノさま。

彼はかつて任務で日本に滞在したことがありました。ある日日本から使者が来ます。レノさまが愛したただ一人の女性、これが日本人なんです、その女性が死んだと使者は言います。

レノさまは突然姿を消されたような形で彼女と分かれておりまして、突然の知らせに驚いて日本を訪れます。

それだけでもとんでもない話なわけですが、実は自分と彼女との間に娘がいたとか、彼女は莫大な遺産を残して死んだとか、びっくりするようなとんでもない話がたくさんありまして。

とりあえず「母の友人」として娘・広末さまと行動を共にすることになったレノさま。

荼毘にふされる直前の「愛した女性」の姿を見て、レノさまは彼女が事故死に見せかけて殺されたのだということに気づきます。

そして娘を守りながら事件の謎を解き明かそうと独自に調査を開始するわけです。

って書くとシリアスな物語を創造すると思いますが、コメディタッチで物語が進みます。

ジャン・レノさま大活躍。しかもすっげえ良い味だしております。

思っていたよりはるかに面白かった、と高評価をつけておきましょうぞ。

ファム・ファタール

2002年アメリカ映画

監督 ブライアン・デ・パルマ

主演 レベッカ・ローミン・ステイモス、アントニオ・バンデラス、ピーター・コヨーテ

とにかく作品の出来不出来の差が激しいブライアン・デ・パルマ監督の作品。

この作品はみたときすんげえびっくりしました。

全くチェックとか入っていないくて、見るつもりはなかったんですが、デ・パルマ監督の作品だってテレビオンエア直前に気づきまして、こいつは録画せなあかんわあってあわてて録画した作品です。

見たらほんまびっくりですわ。作品のあちこちで、これまでにデパルマ監督が手がけた作品へのオマージュみたいな場面がたくさん出てきます。

冒頭いきなりの宝石泥棒のシーンでは「ミッション・インポッシブル」みたいな窃盗団が登場するし、その直後、仲間割れしてホテルの吹き抜けを投げ飛ばされて落ちていく～、みたいな場面は「アンタッチャブル」みたい。

その他にもスプリット・スクリーンもスローモーションもバンバン使われます。

さっすがデ・パルマってえ感じですよな。

宝石窃盗団の一味。その中の一人が仲間を裏切り、宝石を奪って逃げます。

これがレベッカ・ローミン・ステイモスさま。

一味の残されたメンバーはステイモスさまを追います。ステイモスさまはとんでもない方法で姿を消すわけです。

数年後。カメラマンのアントニオ・バンデラスさまはある女性のスクープ写真をモノにします。

で、その画像には姿を変えたステイモスさまが写されておりまして。

さてさて。どうするどうなる、って話ですよ～

物語の展開もすごく面白かったです。デ・パルマ監督の映像もたっぷり堪能できました。

一回で二度おいしい映画ってのはこんな感じなのかもしれませんね。

ゴジラ・ファイナルウォーズ

2004年東宝作品

監督 北村龍平

主演 松岡昌宏、菊川 怜、ドン・フライ、北村一輝、宝田 明、国村 隼

そしてゴジラ、モスラ、ラドン、アンギラス、マンダ、キングシーサー、クモンガ、カマキラス、エビラ、ヘドラ、モンスターX、カイザーギドラ

ゴジラシリーズ最終作だそうです。

ゴジラもミレニアム越えを果たし、一段と特撮がすごくなりました。

しかしそれはゴジラの登場シーンではないんですね。ちょっと屈折しているわけですが、ゴジラってのはあくまでもスーツアクターが着ぐるみ着て演ずる世界なんだってこだわりが、ゴジラの実命線なんだと思うわけですね。

だからCGでゴジラを表現した「USAゴジラ」は、見た人ほとんどが、「これは違うんじゃないか」って思ったんじゃないでしょうか。

そこいらは当然、東宝の特撮の人はよくおわかりのようです。映画を見ていて、着ぐるみに対するこだわりみたいなものがひしひしと伝わってきます。

で、何がどう特撮がすごいのかって話ですが、実は特撮部分ではなく、ドラマ部分の特撮、ワイヤーアクションとか格闘アクション、CG合成アクション。

ここらがものすごいわけですね。こいつは必見です。

宇宙のはるか遠くから、X星人が飛来します。

彼らは怪獣たちを操り、世界中を攻撃させます。文明を破壊されなくなかったら降伏しろと、こういうことですね。

地球防衛軍は怪獣たちとX星人の円盤からの攻撃で、壊滅的な打撃をこうむります。

X星人に立ち向かうのは、海底軍艦・轟天号。

艦長が格闘技のドン・フライさまでのが泣かせます。ちなみに防衛軍のリーダーは船木誠勝さまだったりします。

防衛軍は、人間界に生まれた、身体能力に優れた「ミュータント」を隊員として採用していましたが、そのミュータントはX星人のテレパシーに操られるDNAをもっていて、防衛軍そのものが反乱軍になるだとか、すごく細かい設定がされています。

で、ミュータントなのに宇宙人のテレパシーに操られないのが松岡さまでして、操られるケイン・コスギさまとCGワイヤー大アクション格闘大会を繰り広げたりします。

なんかわけわからなくなってきた。もう、ええから、とにかく見なさいって感じの映画です。

グリーン・デスティニー

2004年アメリカ中国合作

監督 アン・リー

主演 チョウ・ユンファ、ミッシェル・ヨー、チャン・ツイイー、チャン・チェン

「LOVRS」のチャン・ツイイーさま。007のミッシェル・ヨーさま。
もうそれだけでお腹いっぱいでございます。すでにいっぱいいっぱいのところに加えて、香港の小林旭（と、竹中直人さまがテレビで言うておられました）チョウ・ユンファさまが競演。
うひょおおお。しかもユンファさまもツイイーさまも空とか飛ぶし。
ま、この作品の主役は間違いなくチャン・ツイイーさまでございます。
秘剣、「グリーン・デスティニー」ってのがありまして、その秘剣をめぐる攻防でございます。
ユンファさまは剣の使い手だったりしまして、ツイイーさまは女盗賊の一味。
これまたすげえ剣の使い手。で、刀を盗みに入ったツイイーさまがユンファさまと戦ったりヨーさまと戦ったりするわけですね。
けっこう入り組んだ話なんで、とりあえずはこういうあらすじだと思ってください。
実際は剣を盗んで、返して、また盗んでなんだけど。
ツイイーさまもユンファさまも空を飛びます。
なんでやねん。飛ばへんやろ、普通。
それとも何かい、剣の達人になったら空飛べるんかい。
ってつっこみながら見てしまいました。ジェット・リーさまやったら飛んでもおかしくないんだけど。
ってチョウ・ユンファさまを差別してしまった。
本作の主演のチャン・ツイイーさま、ミッシェル・ヨーさまともに、この後、スピルバーグ監督の「SAYURI」にご出演されております。

恋におちたシェイクスピア

1998年アメリカ映画

監督 ジョン・マッデン

主演 グウイネス・パルトロウ、J・ファインズ、ベン・アフレック

その年のアカデミー賞七部門を受賞したむっちゃ恋愛映画。

若き日のシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」誕生秘話ってお話です。

喜劇作家のシェイクスピア＝パルトロウさま、スランプで良い作品が書けない病。

そんな彼はやんごとなき身分の役者志望の娘と恋に落ちます。

娘は役者志望なもんだから、シェイクスピアって才能にほれ込んだりしているわけすな。

パルトロウさまはロミオよろしくバルコニーで求愛したりします。娘はやっぱりやんごとなき人だから、パルトロウさまとの間にはめっちゃ障害があったりするわけで。

パルトロウさまはそんな実体験を戯曲に重ね合わせながら名作「ロミオとジュリエット」を書くわけで。

それとは別に新作戯曲の上演権をめぐるのいざこざだとか、友人の作家が殺されたりだとか。

恋だとか悲劇だとか、いろいろな要素がからまりあって、物語はラストに向かって進みます。

映画を見ながら思いましたが...

やっぱりラブストーリーって苦手やわあ。

衣装や小道具は見事。絢爛豪華な貴族の世界と、泥臭い役者の世界。

すっごくよくできてるんやけど、うむむ。やっぱり恋愛映画って苦手やわあ。何回も書かなくていいんだけど。

「そうかいな、へえ、よかったやん」みたいな感じで見てしまいます。

けっ。どうせ燃えるような恋愛からは遠ざかってますよ。恋愛映画苦手ですよ。悪うございましたねえ。

インディペンデンス・デイ

1996年アメリカ映画

監督 ローランド・エメリッヒ

主演 ウィル・スミス、ビル・プルマン、ジェフ・ゴールドブラム

SFパニック超大作であります。

遙か宇宙から、すげえでっけえUFOが大量に飛来します。

当初は友好的な宇宙人の訪問だと歓迎していた能天気な人々は、最初の攻撃でレーザー光線の餌食になってしまいます。

そこからは宇宙人様、やりたい放題です。軍人でパイロットのウィル・スミスさま、研究者のジェフ・ゴールドブラムさま、元パイロットの大統領ビル・プルマンさまの三人が中心になって物語が進んでいきます。

宇宙人の円盤の攻撃はとにかく強烈。しかもバリアとかはあって、攻撃さえできない。

人類は壊滅的な危機を迎えます。

そんなとき、パイロット、ウィル・スミスさまがドッグファイトの末、敵の攻撃用小型宇宙船をやっつけて、宇宙人と宇宙船を手に入れることに成功します。

ゴールドブラムさまは円盤のバリアを無力化させる方法を思いつき、大統領はじめ飛行経験者たちはそれぞれに飛行機に乗り込み、アメリカ合衆国の独立記念日に勝利を勝ち取るために飛び立ちます。

おお、ええ話や。

攻撃部隊が飛び立つ直前、大統領のプルマンさまが兵士たちに演説する場面がありますが、その演説シーン見るだけでけっこう値打ちがあると思います。

まあちょっとベタかもしれませんが、こういう世界大好きです。

圧倒的なスケール感ですね。むっちゃええ感じ。

でも前にも書いたかもしれませんが、「V」と「スターシップ・トゥルーパーズ」とこの映画、けっこう同じ時期に見ましたので、この三本の映画がいっしょになってしかたないです。

やっぱり同時期に同じ系統の映画見るのはよくないですよ。

ザ・コア

2003年アメリカ映画

監督 ジョン・アミエル

主演 アーロン・コッカート、ヒラリー・スワンク、デルロイ・リンド、チャッキー・カリョ

ボストンの町で百人以上の市民がほぼ同時に死亡するという異常事態が発生します。

死亡した人はみな心臓にペースメーカーを装着していました。

さらにロンドンでは、鳩が異常行動を起こします。

地球物理学者のコッカートさまはこの事態の原因は電磁波の影響によるものだと気づきます。そして独自のシミュレーションの結果、地球の中心部、「コア」が活動を停止した結果、そのような異常事態が起きていると考えます。

彼は地球物理学の世界的権威にこの理論を報告。

地球を救うために地下潜行艇が派遣され、「コア」付近で核爆発を起こし、その衝撃でコアの再活動をさせようってことになります。

潜行艇はマリアナ海溝から地中に突入。悲しい犠牲を出しながらコアを目指します。

地中版「アルマゲドン」ってところです。

一人また一人とクルーが犠牲になっていくところなんかはいかにも地球を救えの自己犠牲系映画によくある設定でございますね。

ラストのオチがとてもしっかりいんですが、そこに至る必然性がイマイチ弱いんですね。

というよりそもそも途中から出てきた「天才ハッカー」が作戦本部に招かれる理由がよくわからないから、このハッカー君が出てくるところすべて「この人が出てくる設定は説得力ないなあ」って思いながら見てしまいました。

いい感じで話が展開していただいただけにちょっと残念でしたです。

ハイランダー・最終戦士

2000年アメリカ映画

監督 ダグラス・アーオニオコスキー

主演 クリストファー・ランバード、ドニー・イエン

永遠の命を与えられ、戦いつづける戦士、ハイランダーを描くシリーズの第四弾。

このお話ってそもそも刀で戦う系のファンタジー作品なんですよ。

こういう系統の作品はとても苦手だと、たびたび書いてきたかと思います。

物語のそもそもの発端は300年くらい前のヨーロッパってことでごさいます。うわあ。苦手な時代のお話です。

不死の戦士ハイランダーって人がおりまして、それが中世の世界におると。まあ彼らは死なないっていう特殊な人だもんで、やっぱり人々から迫害されると。

まあ魔女狩りみたいな目にあって、家族を殺されたりしているわけですね。

そんな戦士ハイランダーが現代に現れる。まあ不死の戦死だから、現れるでしょうね。現代にも

で、現代でハイランダー同士が戦ったり、ハイランダーに身内を殺された者が復讐しようとしていたり、ああだこうだ。

ハイランダーは不死ではあるのですが、さすがに首をはねられると死んでしまいます。

不死やないやんけ。まあ、「首をはねられない限り死なない」と、そういう設定でごさいます。

物語は中世の世界と現代とをいったりきたりします。

現代でハイランダーたちが戦うことの必然性が過去になったりするわけですが、そのへんの設定がちょっと整理できていないような印象をうけてしまいました。

後半はSF X炸裂。すげえすげえ。

刀と銃を使い、馬の代わりにバイクを使ったりするなんでもありの世界です。

うん。

いいんだけど。

過去の因縁は置いといて、もう少し単純明快な活劇にしたほうがよかったんじゃないかなと思いました。

第一作から第三作までを見ていないのであまりえらそうなことは書けませんけど。

ちょっと消化不良でした。この映画って劇場公開はされなかった作品のようですね。やっぱりそうだろうな...

リトル・ダンサー

2000年イギリス映画

監督 スティーブン・ダルドリー

主演 ジェイミー・ベル、ジュリー・ウォルターズ

炭鉱町に住む少年が、偶然迷い込んでしまったダンス教室で知ってしまったダンスの世界にはまってしまい、周囲の反対を押し切ってダンサーを目指すという物語。

主演のジェイミーベルさまはとんでもない倍率のオーディションを勝ち抜いた少年でございます。

いやはや、すごい才能です。びっくりしました。

炭鉱町に住む11歳のベル少年。こういう町だからとにかく強い男になるんだ系のノリで、ボクシングジムなんぞに通わされています。

しかし彼はとんでもなく弱い。居残り練習を命じられたついでに、練習会場の鍵を返しにいった、そのままバレエ教室に参加させられてしまいます。

でもバレエ教室の先生は彼が持つ才能を一目で見抜いたりするわけです。

ベル少年がだんだんダンスにのめりこんでいく様子がすごく巧く描かれています。

なんだか劇団でバレエとかがんばっていた頃のこと、思い出しちゃいました。

やがて彼はバレエ教師の勧めでロイヤルバレエ学校に進学する夢をもちはじめます。

しかしバレエをやっていることが父親にばれてしまいます。もちろん父は大反対。バレエ教師は無償で彼にバレエを教えようとしています。

さてさて、11歳のダンサーの未来はどこに繋がっているのでしょうか？

Tレックスだとかクラッシュだとかジャムだとか、とっってもご機嫌な曲が流れます。

これだけでもうれしい。それだけじゃなく、ジャムのナンバーをバックにベル君が踊るダンスは圧巻であります。

むっちゃすごい。才能のある子って、やっぱりいるんだなあって思いました。

ニューシネマ・パラダイス

1989年イタリア・フランス合作

監督 ジョゼッペ・トルナトーレ

主演 ジャック・ペラン

久々に数珠つなぎでございます。とりあえずひとつ前にとりあげました、「リトルダンサー」から、名子役つなぎで「ニューシネマ・パラダイス」でございます。

この映画はとにかく好きな人が多いですね。まさに映画ファンのために作られたような映画でございます。

第二次世界大戦直後のシチリア島の村が舞台です。

村唯一の娯楽は映画。映画館「シネマパラダイス（シネーマ・パラディッソって発音してましたなあ）の映写技師と、映画が大好きな少年トトとの交流を描く前半部。

青年になったトトの恋愛・そして彼が町を去るまでを描く中盤部。

そして映画監督として大成した彼が故郷に戻る後半部。

とにかく前半部を丁寧に描いていることと、中盤部がうまく後半部につながっていることが高ポイントの理由ではないかと思います。

劇場公開版と、劇場公開時にカットされていたシーンを追加編集した（というかこれがオリジナルですかいなあ）三時間にわたる完全版があります。

どちらも見ましたが、個人的には劇場公開版のほうが好きですね。完全版はトトと恋人との再会シーンがありまして、まあこれはあってもなくてもねえ、って感じでございます。

元恋人との再会シーンがあったからなかったからといって作品的な構造は変わらないと思います。

ってことは映画的には不要なシーンだったのかなあ、やっぱり。

劇場公開版のほうが好きだって人も多いみたいだし。

ただね、特に後半の物語をリードするのはあくまでもノスタルジックな感情だから、壮年って年齢になってむりやり過去の恋愛に決着つけなくても、って思います。

でですねえ、物語ラストで、前半で張られた伏線が一気に生かさでましてですなあ。

この映画の結末知らない人は少ないだろうと思うのですが、とりあえずはっきり書かずにこのへんで止めておきましょうね。

疑惑

1982年松竹・霧プロ作品

監督 野村芳太郎

主演 桃井かおり、岩下志麻、鹿賀丈史、仲谷 昇、柄本 明

前回に続き、子役が印象的だった映画。少し前に紹介した「大魔神逆襲」の主役の二宮秀樹さまもなかなか印象的だったんですが、こいつは紹介済みなので別の作品。

「A. I.」も「シックスセンス」も紹介してますからなあ。こうなっちゃいます。

原作は松本清張さまの傑作推理小説でございます。

この作品に出ていた、当時子役の丹呉年克君（だったと思うんですが）は、この映画のほかにNHKドラマの「妻たちの反乱」って作品にも出ておられました。

私より少しだけ若い人なので、今ではもういいお年になられてると思います。

たまたま同時期に二作品を続けてみたので、よく覚えております。

保険金殺人を疑われる女性が桃井さま。その国選弁護人が岩下さま。死んだのは仲谷さま。桃井さまの元恋人が鹿賀さま、桃井さまを追う事件記者が柄本さま。こんな感じのキャスティングです。

車が人を乗せたまま海に飛びこみ、運転していた仲谷さまが死体で発見されます。

助手席に乗っていたのは桃井さま。仲谷さまには多額の保険金がかけておられました。

すわ保険金殺人、ってな感じで、事件記者の柄本さまだとかが動きます。

で、桃井さまは悪女なんだってキャンペーンをはって、日本中が桃井さまを「疑惑の女」として見ることになります。

弁護士の岩下さまは小さな事実をつなぎあわせ、やがて真実にたどりつく。そういう物語。

噂の丹呉さまは、前半はめっちゃ地味な感じで登場しますが、中盤から後半にかけてはめっちゃキーマンになるというオイシイ役。

ナチュラルで、とても良い演技をしておられました。

「あ、この子なかなかいいな、先が楽しみだなあ」って思っていたんですが、それから先はほとんどお見かけしていないので、役者引退したのかもしれないね。

しかし引退したとしてもうらやましい。ずっと未来まで残る仕事をされたわけですからね。

野村監督は、もうすんげえ安定した演出を見せてくださいます。

裁判ネタなので、字幕使ったりしてリアルに見せてくれますが、もう安心してどっしり構えて見られる作品ですね。

名作でございます。

砂の器

1974年松竹・橋本プロ作品

監督 野村芳太郎

主演 加藤 剛、緒形 拳、島田陽子、丹波哲郎、森田健作

なんか周期的に推理小説原作のお話をご紹介しますですね。

前回、クリスティ作品をわわっとご紹介したときの流れで、横溝先生の作品を数本ご紹介しましたが、本来ならばこの流れでご紹介しておかなければならなかった名作であります。

なんだかんだ言いながら、365作品ご紹介ブックも大詰めまでできておまして、現時点で344作品までできました。

もちろん「トワイライトゾーン」とか「世にも奇妙な物語」なんかは一本としてカウントしております。ここらで私が大好きなミステリーものを取りあげておかいと、第二集に持ち越しになっちゃう。

てことで、ミステリー特集いきたいと思います。

故・松本清張先生の傑作推理小説の映画化。ではありますが、原作は実は連続殺人事件です。

映画はあえて厳密な意味での殺人は最小限に抑えて、殺人事件を通してその背景に隠された人間の「宿命」というものを描きます。

映画後半の盛り上がりが素晴らしいです。何がどう素晴らしいかということを説明しようと思うと、ここで犯人ぶっちゃけないといけなくなりますので、あえて書かずにおきましょうね。

もっともこの作品、予告編見たら犯人がわかってしまうという悲しい「宿命」をもった映画です。

数年前、スマップの中居さま主演で連続ドラマ化されておりましたですね。

これも面白かったですが、ドラマでは物語後半の「少年時代の犯人の運命を決定づけてしまった、彼の父親が抱えていた問題」を人道上の理由からか避けて通ってしまったのがちょっと残念でした。

蒲田の操車場で、一人の男性の遺体が発見されます。

顔を潰され、身元さえわからない。警察はまず「被害者は誰なのか」、そして「何故彼が東京で殺されたのか」を調べます。

そしてそれと並行して描かれる謎の「紙ふぶきをまく女」。

そんなパーツが組み合わさり、とても悲しい殺人者の姿が浮かび上がります...

とにかく映像が美しい。なんかその美しい映像を見るだけで泣きそうになります。

是非ご覧いただきたい日本映画の傑作でございます。

天城越え

1983年松竹作品

監督 三村晴彦

主演 渡瀬恒彦、田中裕子、平 幹二郎、伊藤洋一

数珠つなぎです。先日から松本清張先生原作の作品をご紹介します。

「あなたとお～越えたい...アマギ越～え～」石川さゆり様の熱唱が聴こえてきそうざんす。

ちなみに石川さゆり様の「天城越え」はこの作品の少し後の歌だったと思います。

ですから、この映画の主題歌などではありませんので念のため。

原作は松本清張先生の中編小説です。

物語は現代からはじまります。町の印刷工場で働く男（平さま）。彼は癌を患っており、余命わずかです。

彼のもとに謎の老人（渡瀬さま）が現れます。彼は男に印刷を依頼します。四十数年前の、ある事件の調書。

その事件ってのが、少年時代の平さまが深くかかわっていた事件だったわけで。平さま、その事件を静かに回想します。

～四十年前。男は十四歳（伊藤さま）。彼は母の情通の現場を目撃してしまい、家出をします。

彼は一人で天城峠越えをしようとします。

そこで彼が出会ったのが娼婦のハナ（田中さま）。彼女は優しい。少年はハナに憧れにも似た恋愛感情をもちます。

ちょうどその日、天城峠で土工風の男が惨殺されます。

警官（渡瀬さま）は土工と娼婦が話をしていたという目撃証言をもとにハナを逮捕し、取り調べを行います。

凄惨な取り調べってこういうことをいうのでしょうか。結局ハナは犯人として処罰され、事件は決着します。

しかし事件の真相は果たしてそうだったのか。

刑事はこの事件を、自分のかかわった事件の中で唯一の間違いとして追いつづけていたわけですな。

果たして事件の真実やいかに。

このコラムを書くにあたって、いくつかの映画紹介サイトに目を通しましたが、あかんやないの。

ミステリーのネタバレ書いたら。

松竹ホームビデオのホムペでさえ犯人書いてました。

というか、犯人を書かないと伝わらないことってあるわけで。難しいなあ。

キャストの中ではやはり田中さまの名演技が光ります。

クライマックスの雨のシーン（見た人はおわかりかな）の台詞のない名演技は絶品。

伊藤洋一さまもなかなかいいです。

この人、テレビドラマの「浮浪雲」で「しんさん」役をした子ですよ。

1983年当時に本当に14歳だったとしたら、この人、もう四十です。ほんま、びっくりしてしまうわ。

わるいやつら

1980年松竹・霧プロ作品

監督 野村芳太郎

主演 片岡仁左衛門（当時孝夫）、松坂慶子、藤田まこと、梶芽衣子、宮下順子、藤 真利子、神崎 愛

原作の松本清張先生と野村監督による、製作集団「霧プロダクション」と松竹との第一回提携作品だそうです。

この作品、清張先生もののなかではあまり好きじゃない部類に入ります。

「砂の器」とか「天城越え」、「疑惑」あたりのできがよすぎたからでしょうか。

絵に描いたようなボンボンの色男・片岡さま。

彼は大病院の院長です。羽振りはやさそうだが病院の経営は火の車。何人もいる愛人から貢いでもらった金で赤字補填をしております。

めっちゃ情けないおっさんですなあ。

片岡さまにとっての本命・愛人1号はファッションデザイナー。で、金づるは愛人2号、材木商のおかみと愛人3号、料亭のおかみ。

材木商のおかみは病床の夫を毒殺しようとしています。

片岡さまに毒薬を処方してもらい、一服盛って殺し、その死亡診断書を片岡さまが書くと、こういう手口でございます。

殺人はまんまと成功するわけですが、材木商の家族が妻を疑いはじめ、彼女は片岡さまに貢ぐことができなくなるわけです。

そうなるこんな危険な女には用はないわけでございまして、片岡さま、愛人第4号の婦長（今は師長と呼ぶようになっておりますなあ）と共謀して愛人2号を殺害します。

で、愛人3号からも同様の依頼をうけてしまって、愛人2号の夫を殺したときの手口で殺害。なんかこう書くと殺人マシンみたいな感じですが、映像の上ではそんな感じじゃないので念のため。

どっちかというとおタオタしてる間に事が進んでいく感じです。

ここらあたりから事態は片岡さまの手を離れて暴走をはじめるわけですね。

果たしてプレイボーイ院長の末路やいかに。

この映画を見た当時、片岡孝夫（当時）って名優のことをよく知らなくてですねえ。

「片岡孝夫」なんてめっちゃ普通っぽい名前だったもんで、歌舞伎界の重鎮だとは知りませんでしたがあ。

いっしょに映画見てたおかんに「この人有名？」とか聞いた覚えがあります。

いやはや、消してしまいたいくらい恥ずかしい記憶ですなあ。

だって歌舞伎わかんないんだもん。ちなみにこの作品、豊川悦史さま主演でドラマ化もされております。

獄門島

1977年東宝作品

監督 市川 崑

主演 石坂浩二、加藤 武、佐分利 信、司 葉子、大原麗子、太地喜和子、草笛光子、浅野ゆう子

数珠つなぎでございます。原作ものの推理小説つながりで、「獄門島」のご紹介。

市川監督のメガホンによります金田一シリーズ第三弾。

原作を読んでからシリーズをずっと見てこられた人ならおやっと思われのような作品選定。

しかし映画を見終わって納得。って書いてどういう意味かわかりますでしょうか。

かなりわかりにくいかもしれないから、今回はネタバレさせていただきます。

で、このコラム読んでしまうと「犬神家の一族」「悪魔の手毬唄」「女王蜂」、あと次に紹介する「病院坂の首くくりの家」の犯人もわかってしまうかもしれません。

ごめんなさい。

えっとですねえ、この映画、「原作の横溝正史も犯人を知らない」ってのが映画化のときのウリだったんです。

つまり、原作とは別の人が犯人ですって話だったんですね。

さあ犯人は誰でしょう、みたいなキャンペーンしていたような記憶があります。

でもですねえ、市川監督がこのシリーズで一貫して描いてきたのは「母性の犯罪・女性の犯罪」だったわけです。

これは見事に一貫しております。

恐ろしいことに、平成版「八つ墓村」・内田康夫先生原作の「天河伝説殺人事件」にまでも共通しております。

犯人が男性だった「女王蜂」でさえも、結局「母性と女性」の事件だったわけだし。

となると、犯人わかってちゃうでしょ？そうです。その人です。

さて物語。「私が戦死すると三人の妹たちが殺される。生きて帰ってその殺人を止めて欲しい」名探偵金田一＝石坂さまにそう遺言して死んだ戦友。

彼との約束を果たすために彼は戦友の生まれ育った島に赴きます。

しかし金田一の目の前で、次々と殺される美貌の姉妹。彼女たちは、逆さに吊るされたり、釣鐘の中に押し込められたりして殺されるわけでございます。

やがてそれが和歌に見立てられた殺人だとわかった金田一、事件の全貌を解き明かすわけです。

やはり犯人の設定に難ありですね。

むりやりこじつけたような印象がぬぐえません。

原作小説の犯人像の意外性も、（その人を犯人にしなきゃならなかったために）半減って感じ

です。

やはり原作通りに作っていただきたかったです。

病院坂の首縊りの家

1979年東宝作品

監督 市川 崑

主演 石坂浩二、加藤 武、あおい輝彦、桜田淳子、佐久間良子、萩尾みどり、草刈正雄

数珠つなぎでございます。前回の「獄門島」から金田一耕介ものつながりで「病院坂の首縊りの家」。

原作には「金田一耕介最後の事件」とクレジットされております。

原作はぶっとい上下巻の文庫だったですなあ。上巻の半分くらいまで読んで途中リタイアした記憶があります。

映画版と小説版は結末だとか物語展開とかが違うって話があったので、以下はあくまでも映画版の話ってことで。

えっと。首吊り自殺が起きた洋館がありまして、その洋館は廃屋になっております。

その家が病院に通じる坂の途中にあったから、「病院坂の首縊りの家」ね。わかりやすいなあ。

その洋館で、不思議な写真が撮影されます。婚礼写真なんだけど、花婿は髭モジャの男（あおいさま）。花嫁（桜田さま）はまるでクスリやってるような様子に変。

呼びつけられた写真屋さん、出来上がった写真をもって洋館に行ったら、きゃああああああ。花婿の男の首がぶらさがっておりました。

ここから事件が始まります。

花婿はどうやら若者に人気のジャズトランペット奏者らしい。名探偵金田一の推理が始まります。

原作は読んでないけど、書評は読んでおります。

とにかく複雑に入り組んでいて、ややこしい原作ですので、やはり二時間程度の映画の尺で消化するのは難しかったようです。

なんでここがこうなっかってこう繋がるの？

みたいに疑問に思えた個所がいくつもありました。結末が悲しくて悲惨なもの「市川版・金田一シリーズ」の定石通り。

石坂さま＝金田一さんは作品最後でアメリカに旅立ち、以降市川版金田一さんは平成に入ってトヨエツ版「八つ墓村」が製作されるまで封印されることになります。

悪魔が来りて笛を吹く

1979年角川映画作品

監督 齊藤光正

主演 西田敏行、夏八木 勲、齊藤とも子、鰐淵晴子、仲谷 昇、宮内 洋

数珠つなぎでございます。昨日の「病院坂の首縊りの家」から、金田一耕介ものつながりで「悪魔が来たりて笛をふく」でございます。

一時期、空前の金田一耕介ムービーブームってのがありましてですねえ。

東宝は石坂浩二さま、松竹は明日紹介予定の渥美清さま主演でそれぞれ作品を製作。

テレビのほうでは古谷一行さまが連続ドラマで金田一を演じておられます。

「犬神家の一族」以降、少々出遅れた感のあった角川、本作をもって一発逆転を狙いますが、作品的には「残念でしたあ」って感じです。

テレビCMでは横溝大先生自らがご出演され、「この作品だけは映画化したくなかった」とおっしゃいます。

この言葉が映画宣伝用のコピーじゃないとしたら、映画化したくなかった理由って何やらって考えたいような普通の作品です。

トリックも物理トリックばかりだし、謎の根幹をなす「フルートを吹く男」の正体は「なあんだ」みたいな感じだし。

思うに、作品のスタートラインにあった事件が、かの「帝銀事件」をモチーフにしているから「禁断の」みたいな感じになったのではないかと私は勝手に推察いたします。

銀行毒物現金強奪事件が発生し、犯人の似顔絵からやんごとなき身分のお方（元子爵でございます）が容疑者として取り調べされます。

元子爵はその直後に失踪。やがてこの子爵ファミリー内部のどろどろとした内紛劇がはじまるわけですね。

どうやら子爵ファミリー、いろいろともめております。

そしてそして、音楽家でもあった元子爵が作曲したという「悪魔がきたりて笛をふく」という曲のメロディにのせて繰り広げられる殺人劇。

きゃあああ。しかしですねえ、この作品における最大かつ最高の仕掛けは犯人が暴かれてから明らかになるものですし、そのトリックを見抜くためにはある特殊知識が必要で、さらに言うと、そのトリックを現実に効果的なものにするためには、ある条件を満たす「作品」が必要で...

映画をご覧になられたらわかると思いますが。

このトリック、初めてみたときはかなりびっくりしましたが...

（ここからネタバレっす）このトリックを成立させようとする、少なくともフルートの運指を作中でめっちゃ丁寧に明らかにしなければいけないし、「悪魔がきたりて笛をふく」の運指をめっちゃ丁寧に描かなければフェアじゃないような気がします。

惜しいんだけど。

八つ墓村（1977）

1977年松竹作品

監督 野村芳太郎

主演 萩原健一、小川真由美、渥美 清、山崎 努、夏八木 勲

「祟りじゃああああああ」という流行語を生んだ、横溝ミステリーの話題作。

話題作イコール名作とは限らないのが辛いところですわな。

私的にはこの作品大好きなんです。

この映画で一番有名なのはやっぱりこのシーンかなあ。

頭に二本の懐中電灯をさし、猟銃と日本刀を持って走り回る山崎 努さま。

この場面は夢にでてくるほど怖かったです。

主人公萩原さまは飛行場で着陸誘導員などをしている普通のサラリーマン。

彼のもとに突如、連絡が入ります。中国地方（だったと思います）のある村で、彼を当主として迎えたいと、こういうことでございます。

わけわからないまま、村に行く萩原。

村には分家の令嬢・小川さまがおります。村には不吉な伝説が残っておりまして、その昔、村に逃げ延びてきた八人の落ち武者（頭目は夏八木さまです）を、村人たちが軍資金目当てに惨殺しまして、そのときに落ち武者の頭目が「八代先まで呪ってやるう」などと言ったわけですね。

軍資金も結局手に入らなかった。それからというもの村には不吉なことが続き、祟りを恐れた村人が落ち武者八人の墓を建てたと。

だからこの村は八つ墓村。

萩原が村に着くやいなや、自分の兄だと名乗る当主の山崎さま（二役。日本刀を持って走り回ったのは山崎さま・萩原さまのお父さんってことになってます）が毒殺されます。

祟りじゃあ。ここから先の話は次回に続く。だって次回も「八つ墓村」なんだもん。

この作品は、ミステリというより、かなりオカルトチックな作りになっています。

（ここからネタバレ）物語クライマックスで、犯人はまさかの大変身。

呪いの権化みたいな姿で主人公を追いまわすし、クライマックスのクライマックスでは、炎上する当主の屋敷を村の高台から見下ろす落ち武者の霊を描いたり。

怖い怖い。オカルトチックな物語展開があって、ヒーヒー言いながら逃げ回る萩原がいて、だからここの物語には淡々と推理を語る設定の探偵渥美さま＝金田一みたいなキャラが必要だったのかもしれない。

次回は東宝・市川版「八つ墓村」です。

八つ墓村（1996）

1996年東宝作品

監督 市川 崑

主演 豊川悦司、浅野ゆう子、高橋和也、宅麻 伸、喜多嶋舞、岸辺一徳、加藤武

推理小説原作つながり、というか、ここんところ金田一耕介ものを集中してとりあげております。

賛否両論、というよりあからさまな「否」の声のほうがよく聞こえてくるトヨエツ版金田一耕介唯一の作品。

続編が製作される予定もなさそうなので、やっぱり東宝制作部も「イマイチ」って思ったんでしょうね。

本作では主人公は高橋和也さまです。

しかしこいつがどうも... あまり前に出てこない。

そういう描きかたをしたのかどうかわかりませんが。

えっと、山奥の村に高橋がやってきて、彼がやってきたのと時を同じくして村に連続殺人事件が起きます。

当主（本作では岸辺一徳さまです）が毒殺されたのを皮切りに、どんどんと人が殺されていきます。

で、金田一耕介の登場となって、例によって事件がほぼ集結した段階で謎をとく。

タイミングずれてますよね、金田一さんって。

この作品はなにかにつけ松竹・野村監督版と比較されますが、とにかく主人公の高橋が少し弱いので、結果的に主人公の視点がぼやけちゃうみたいなところがあります。

かといって金田一さんは物語ひっぱっちゃいけないし。

市川監督はすごくオーソドックスな演出をされておりまして、そのオーソドックスさが逆に淡泊な感じにつながっているような気がしましたです。

悪くはないんだけど、松竹版に比べると、どうしても物足りない印象がこのりますです。

それにしても浅野ゆう子さま。

「獄門島」ではまだまだ若手っぽい役だったのですが、この作品では堂々の主演女優ぶりです。隔世の感がありますね～

悪霊島

1981年角川春樹事務所作品

監督 篠田正浩

主演 古尾谷 雅人、岩下志麻、鹿賀丈史、室田 日出男、岸本 加代子

推理小説原作つながりです。この作品以降、横溝正史先生原作の金田一耕助ものはしばらく映画化されなくなります。

物語は古尾谷を軸として進みます。冒頭からしていいですね。

1980年12月の、ジョンレノン殺害のニュースをオフィスで聞く古尾谷。

そこから彼は自らの青春時代、解散直前のビートルズを聴きながら旅したときに遭遇した、忌まわしい事件を回想すると、こういった作品構造です。

いきなり「ゲットバック」なんかが流れ、クライマックスでは「レットイットビー」が流れる。

それだけで印象ポイントがグググって上がってしまいます。

作品の舞台は瀬戸内海に浮かぶ小さな島。青春時代の冒険旅行を楽しんでいる古尾谷は、フェリーで金田一＝鹿賀さまと名乗る男と知り合います。

どうやら彼は人さがしをしている様子。

フェリーが到着した島で、瀕死の状態の男性が見つかります。

実はその男こそ金田一が探していた男で、「島には悪霊がいる、鵜の鳴く夜には気をつけろ」という言葉を残して死んでしまいます。

うおおおお。島の旧家には双子の若い少女。

少女の母もまた双子らしい。ビートルズナンバーに彩られた明るい雰囲気とはうらはらに、物語の舞台はいつもの横溝ワールドでござんす。

クライマックスには腰のところで繋がった二重体児のミイラなんかがでてきまして、ほんま、いぐわああああって感じです。

鵜について少々。

この物語の鵜ってのは、1153年に源頼政によって退治されたと伝説にある鵜ではございません。

ですから、猿の身体に鳥の羽根...みたいな妖怪の「鵜」はでてきませんので念のため。

ここでいう鵜は鳥の鵜です。そもそも鵜伝説の鵜って、「鵜のような声で鳴く妖怪」だから鵜って名前と呼ばれているだけでございます。

ここいらのことは、市販の妖怪ブックなんかに詳しく載っておりますです。

天河伝説殺人事件

1991年「天河伝説殺人事件」製作委員会作品

監督 市川 崑

主演 榎木孝明、岸 恵子、日下武史、財前直見、山口粧太、加藤 武、岸田今日子、石坂浩二

推理小説原作つながりです。内田康夫先生原作の浅見光彦もの。

この作品も、かつての「獄門島」のように、映画と原作では犯人が変えられているようです。

原作は残念ながら未読なので詳しくは語ることはできませんが。

しかし...市川監督でしょ？

で、原作とは犯人が変えられているって情報があって、そこまでわかっててキャスト欄みたら犯人わかってしまいますよね。

そうです。そいつが犯人です。

私は「犯人を変えている」って情報は知らずに映画を見ましたが、その人が出てくる最初のショットで犯人わかった。

意味ありげに描きすぎ。というか、作品中で人間ドラマを描きたかったから、あえてあそこで犯人を暗示したかったのかもしれないなあ。

新宿の高層ビル街で一人の男が毒殺されます。

男の持ち物に不思議なものがありまして、調査の結果、それは奈良県吉野郡天川村の天河神社の御神体をかたどった鈴であることがわかります。

警察の加藤さま、奈良県へ調査のため派遣されます。

「よし、わかった」のキメセリフはそのままですが、金田一シリーズの等々力警部とは別人という設定ですのでお間違いなく。

で、この天川村には能楽師の一族がおりまして、そこが跡目相続の問題でもめておるわけでございます。

宗家は日下さま。その孫が山口さまと財前さま。

山口さま才能ばっちりの能楽師だけど、お妻さんの子で、彼が宗家になることを財前の母である岸田今日子さまが反対しているという構造です。

雑誌の取材で「たまたま」この天川村に来ていたルポライターの浅見光彦＝榎木さま。殺人事件に巻き込まれていきます。

クライマックスの薪能の場面はかなりいい感じ。

横溝作品ほどどろどろしてないし、適度に大仰で、とても良い感じでございます。

劇団四季の日下さま、さすがに巧い。演劇集団円の岸田さまも達者。

新劇のベテラン組が出るとさすがに重厚な感じに仕上がりますよね～

浅見光彦の兄役として市川作品でずっと金田一を演じてきた石坂浩二さまが特別出演。

こういうお遊びの感覚も大好きです。

狼の挽歌

1970年イタリア映画

監督 セルジオ・ソリーマ

主演 チャールズ・ブロンソン、ジル・アイアランド、テリー・サバラス

今は亡きチャールズ・ブロンソンの代表作でございます。

この頃のブロンソンは、フランスとかイタリアとかで活躍しておりました。

この作品は、ブロンソンがアメリカに戻る直前の作品です。印象としてはかなりブロンソンのアーリーな時期の作品だという感じですね。

今、資料をちょこちょこ見ておりましたら、「さらば友よ」とか「雨の訪問者」とかはヨーロッパで活躍していた時期の映画でございます、この作品よりも前だったんですね～

「さらば友よ」なんかはこの作品よりも後の作品だと思っていたんだけど。

ブロンソンさまはフリーの殺し屋。

殺し屋にフリーも何もないかと思うんですが。

彼には恋人がおります。演ずるのは実生活でもブロンソンさまの妻のジル・アイアランドさまでございます。

彼女と楽しんでおりましたら、何者かが襲ってくるわけです。

で、いきなりのカーチェイス。ブロンソンさま、相手を仕留めたものの、自らも傷を負い、気を失ってしまいます。

意識朦朧とする中で、彼は自分の雇い主と恋人が逃げていく姿。

復讐を誓うブロンソンさま。

ここからは冷徹な殺し屋ブロンソンさまがアイアランドさまを追いつめていく過程が描かれています。

雇い主はかなり早い段階でやられてしまいますが、後半になってかのテリー・サバラスさまが登場。

ごっついええ感じで悪役を演じておられます。

これはこれで必見かと思えます。

しかしこの映画、とにかくラストが素晴らしい。映画史に残るといっても過言ではない名シーンです。

第三の男

1949年イギリス映画

監督 キャロル・リード

主演 オーソン・ウェルズ、ジョセフ・コットン、アリダ・バリ

こういう渋い映画はもうBSでしか見られないんでしょうね。

NHK教育の映画劇場はもうやってないみたいな感じだし。

もうとっくに紹介したと思っていた作品ですが、調べてみたらここまでご紹介した作品の中には入っておりませんでした。

大学生くらいまで、私の人生ベストワンの映画はこの「第三の男」でした。

劇団始めてから「コーラスライン」だとか「蒲田行進曲」だとか「天井桟敷の人々」とかの「ダンス・芝居がらみ」の名作にふれるまでは、この作品がダントツで好きでしたね。

主人公、ジョセフ・コットンさまの友人、ハリー・ライム＝オーソン・ウェルズさまが死んでしまいます。

彼は警察から追われている疑惑の男でした。コットンさまはウェルズさまの葬式の時、誰も知らない「第三の男」がそこにいたことを知ります。

親友ウェルズさまのことを調べるうち、コットンさまは「彼は生きているのではないか」という疑惑を持ちはじめます。

そしてやっぱり、彼の目の前にウェルズが姿を見せるわけでございます。

もうとにかく登場からラストまで、オーソン・ウェルズさまの存在感に押されっぱなし。

通り過ぎる車のヘッドライトにウェルズの悪戯っぽい表情が浮かび上がる登場シーンから、映画史に残る観覧車の場面、地下道でのラストまで、ウェルズの悪役の魅力たっぷりの痛快な作品。並木道のラストシーンも名場面でございます。

故松田優作様が出演しておられた「大都会パート2」の、風吹ジュン様がゲスト出演しておられたエピソードで、これとほとんど同じエンディングがありました。

そのエピソードの監督さんも「第三の男」、大好きだったんだらうなあ。

アビス

1989年アメリカ映画

監督 ジェームズ・キャメロン

主演 エド・ハリス、メアリー・エリザベス・マスラントニオ、マイケル・ビーン

大好きなジェームズ・キャメロン監督作品。

「ターミネーター」でお気に入りの監督になって、「エイリアン2」ではまってしまいました。ちなみに「トゥルーライズ」はこの作品の数年あとになります。

しかしこの作品、ジェームズ・キャメロンファンの間でも賛否の分かれている作品でございます。

この作品に関していえば、監督の旺盛なサービス精神が裏目に出た感じですね。

アメリカの原子力潜水艦が謎の物体に遭遇し、深海で座礁するのが事件の発端。

折からのハリケーンで救出チームが近づけない。そこで近くの海底油田で作業をしていた民間の作業員と海軍の潜水部隊がチームを組んで救出に向かうことになります。

マイケル・ビーンさまは海軍の軍人。彼の指揮で潜水艦に入りますが、乗組員は全員死亡しております。

悪いことに設備のクレーンがハリケーンによって破壊され、チームは海底に取り残されてしまいます。

そこで登場するのが深海エイリアン。

どうつながるっていうの？みたいな感じになってきます。

前半の海洋サスペンシブな展開はどっかにいってしまって、ここからはエイリアン遭遇ものに話がシフトします。

しかしエイリアンとの遭遇でパニックに陥ったビーンが、機密保護のため潜水艦を爆破しようとするに至り、またしても海洋サスペンシブになって、最後はまたエイリアンものになっちゃいます。

。

どないやねんな。

海洋ものなら海洋もの、エイリアンものならエイリアンものって感じで、テーマを絞ってほしかったですね。

映画を見終わったあとの印象が散漫になっちゃいました。

ラストも...うむむ。賛否、わかれますよね。このラスト。

夢のあるファンタジー的なラストではあるんだけど、ちょっとついていけなかったです。

どうせだったらエイリアンとかを出さないで、海洋サスペンシブアクションで突っ走ってほしかったです。

ザ・シークレットサービス

1993年アメリカ映画

監督 ウォルフガング・ペーターゼン

主演 クリント・イーストウッド、ジョン・マルコビッチ

クリント・イーストウッドさまが演ずるのは、JFK暗殺を止めることができなかったシークレットサービス。

ここらですでに私的には大混乱。この作品とかなり近い時期に見た「ボディガード」とだぶっちゃいます。

あれはレーガン暗殺未遂事件のときに大統領を守れなかった男が主人公。

しかもイーストウッドさまとコスナーさまはこのあと「パーフェクトワールド」で競演。ややこしいことしてくれます。

イーストウッドは要人警護の仕事を引退し、普通の警察官として仕事をしております。

彼が不審者通報で踏み込んだ部屋には、若き日のイーストウッドの写真。

そこに男から電話が入ります。大統領暗殺を予告する電話。

さあここから暗殺者と刑事の息詰る戦いが始まります。

なんといっても光っているのは犯人役のジョン・マルコビッチさま。

こういう作品の場合、悪役のキャラが良いとそれだけで見ごたえがでできます。

そういう意味ではマルコビッチさまの起用は大正解。

それに比べてイーストウッドがちょい弱い。貫禄・迫力ともに十分ですが、いかんせん年とりすぎ。

もうちょっと若いころにこの題材に取り組んで欲しかったですね。

ホワイトナイツ～白夜

1985年アメリカ映画

監督 テイラー・ハックフォード

主演 ミハイル・バリシニコフ、グレゴリー・ハインズ

大好きな映画「コーラスライン」で、こんな台詞がありました。「コーラスライン」というまでもなくオーディションの映画。

早い段階でオーディションで落とされたダンサーが帰ろうとするところに、これからオーディションを受けるダンサーが声をかけます。

「彼らは誰を探してる？」（どんなダンサーを探してる、と訳すんでしょか）

「バリシニコフ...」

日本語版字幕では「状況は？」「厳しい...」と訳されていました。

とりあえず「バリシニコフ」という人がとんでもないダンサーだとわかっていないと成立しない会話ですよ。

バリシニコフさまの凄さは冒頭のダンスシーンだけで十分わかります。

映画の主人公は実際のバリシニコフ同様、ロシア（ソ連ですわな）からアメリカに亡命したバレエダンサー。

公演旅行で世界じゅうを飛び回る彼ですが、思わぬエンジントラブルで、搭乗した飛行機がロシアに不時着してしまいます。

哀れバリシニコフさまはソ連政府に囚われることになります。政府の狙いはただひとつ。バリシニコフさまをもう一度ロシアで踊らせること。

頑として踊ることを拒むバリシニコフさまの説得に現れたのは、アメリカからソ連に亡命したタップダンサー・ハインズさま。

当初は微妙な雰囲気だった二人。やがてハインズさまはバリシニコフさまとともにソ連を脱出しようと考えます。

果たして二人の運命やいかに。

バリシニコフさまもハインズさまも、ジャンルは違えども世界最高峰のダンサー。

その割にダンスシーンが少なかったような気がします。冒頭の創作ダンス（バリシニコフさま）・ハインズさま登場時のミュージカル調タップ（ハインズさま）・中盤のハインズさまのタップダンス（バックで流れる曲はそのものズバリ「タップダンス」って曲です）・同じく中盤のバリシニコフさまの創作ダンス・「プルーブ・ミー・ロング」をバックにバリシニコフさまとハインズさまが踊る。これぐらい。

もっと踊って欲しかったです～

ちなみにラストで流れるテーマ曲はライオネル・リッチーさまの「セイ・ユー・セイ・ミー」。これも時代を感じさせますね。

灰とダイヤモンド

1958年ポーランド映画

監督 アンジェイ・ワイダ

主演 ズビグニエフ・チブルスキー

この映画を見たのは、確か大学一年か二年のころ。

劇団をはじめて間もないころだったように記憶しています。

そのころテレビでオンエアされていたタモリさんの「今夜は最高」で、ゲストの誰かがポーランド映画が好きだって言っていたのを覚えておりまして、NHK教育の映画劇場でオンエアされたものを録画して見ました。

タモリさんの番組では「灰とダイヤモンド」と「地下水道」のタイトルがでてましたが、「地下水道」のほうは残念ながら未見。

チャンスがあれば見ようとは思っているのですが、傑作との誉れの高い「灰とダイヤモンド」にしても、果たしてどこまで理解できたのかと考えると、ちょっと自信がないですね。

理由は簡単。ポーランド映画だからです。

ご存知の通り、ポーランドって国は実に微妙な社会情勢をかかえていた国。

そんな国の作品ですし、この作品が制作された1958年って、けっこう微妙な時期だったし。しかしポーランドって国のことをちゃんと理解できているわけではないですから、作品背景とかちゃんとつかまえずに見てしまったんですね。

そんな感じでしたから、かなり上っ面しか見てなかったようです。

主人公チブルスキーさまは第二次大戦中、レジスタンス運動に没頭していた青年。

彼は戦後、テロリストとなり、要人暗殺を指示されます。

この暗殺場面がすごく印象的。映像的にすごくインパクトのあるシーン。

テロリストである彼の末路は哀れで悲しいものです。彼の最期の場面もまた映画史に残る名シーン。

とにかく中盤の暗殺シーンとラストシーンだけで映画一本分以上の値打ちがあると思うのは私だけでしょうか。

フォー・ウェディング

1994年イギリス映画

監督 マイク・ニューウェル

主演 ヒュー・グラント、アンディ・マクダウエル

何度でも言おう。私はラブストーリーが苦手だ。

この映画は当時つきあっていた彼女がどうしても見たいっていうもんで、嫌だ嫌だといいながら見に行ったことをよく覚えております。

だいたいさあ、どんなリアクションとればいいわけ？

他人の恋愛ですよ。しかも自分よりいい男が、すげえ美人といちゃいちゃするわけだ。

しかも物語はひたすら恋愛を軸に進むでしょ。

お前なあ、恋愛以外にやることあらへんのんかいな、って素直に思います。ま、いいか。恋愛映画だし。

「フォー・ウェディング」のフォーはf o rではなくf o u r。

「結婚のために」、とか「結婚にむけて」の恋愛物語だと思っていたら、「四つの結婚式」を描いた映画だったわけです。

物語で描かれるセレモニーは、四つの結婚式と一つのお葬式。

友人・知人の結婚式に参加していたら偶然にも何度も出会う女性がおりましてですなあ、主人公がそんな女性との間に本当の愛を見つけるというロマンティックラブコメディでございます。

ええやん。見つけたらええやん。

主人公たちをとりまく恋愛関係のほとんどがうまくいってないというのが、なんかとっても皮肉が効いていて面白かったですね。

そんな中で唯一うまくいっているのがゲイのカップルだったってえ笑えないジョークのような設定もありました。

後に「ミスター・ビーン」で人気者になるローワン・アトキンソンさまが、新米司祭役で出演しております。

テレビオンエア時、某テレビ情報誌なんかでは、そのことをメインに書いておりました。

あかんやろ。

なんぼなんでもそれをメインにしたら。

それにしてもヒュー・グラントさま、ええ感じで優柔不断で...めっちゃむかつく。

ブリジット・ジョーンズの日記

2001年アメリカ映画

監督 シャロン・マグワイア

主演 レニー・ビルウィガー、ヒュー・グラント、アンディ・マクダウエル

ヒュー・グラントさま、ええ感じで優柔不断で...めっちゃむかつく。

ってえ言葉で前回のコラムは締めたと思うんですが、「フォー・ウェディング」の兄ちゃんがそのままおっさんになったら「ブリジット・ジョーンズの日記」のヒュー・グラントさまみたいになるんじゃないでしょうか。

主人公のブリジット・ジョーンズが日記に書いた一年間の出来事が綴られていきます。

だからブリジットジョーンズの日記。わかりやすい。

ビルウィガーさま演ずる主人公がめっちゃかわいいです。

年増女だけどかわいい。年とってるだけに、やっぱり男性に必死でアプローチするし、崖っぷちだからふられたあとの凹みも大きい。

若い子だったら余裕のあるシチュエーションでも、真剣に悩んで真剣に喜んで、みたいな感じで、見ていて感情移入しやすいです。

出版社に勤務するブリジットが、パーティで知り合った若い独身弁護士と、上司の書籍編集長の間でふったふられた、好きだ嫌いだったのを繰り返します。

恋愛映画なんだけど、「ええやん、勝手にしたら」って気分にならないのは、ひとえにビルウィーガーさまの巧さにつきます。

とにかくすごく巧い女優さん。超ハリウッド美人、って感じでもなく、どっかそのへんにいそうなお姉ちゃんなんだけど、とにかくかわいい。

それでいて編集長役のヒュー・グラントさまがええ感じでダメダメ男なんで、こっちとしては気持ち良いです。

やっぱねえ、色男はダメダメでないと、恋愛ものは楽しめませんね。

そろそろ365本カウントダウンですので、次回からは自分にとって大事な映画を続けてご紹介しますね。

ラストエンペラー

1988年イタリア・イギリス・中国合作

監督 ベルナルド・ベルトリッチ

主演 ジョン・ローン、ジョアン・チャン、ピーター・オトゥール、坂本龍一

私、この映画が製作される前年の1987年10月、劇団の海外公演で中国に行きました。

順序が逆だったらもっと楽しい中国旅行になったんでしょうね。

この作品の舞台となった紫禁城は残念ながら舞台の準備のために見られなかったですが、西太后の別荘（「い和園」っていうんですが。漢字わかんないです）は見学できました。すっげえでかさでしたね。

中国清王朝最後の皇帝、溥儀の「時代に翻弄された人生」を壮大なスケールで描きます。

西洋人には初めて撮影が許可された紫禁城でのシーンはまさに圧巻。とにかくとんでもない規模でございます。

物語が始まるのは太平洋戦争後。中華民国から戦争犯罪人として裁判にかけられようとしている男、溥儀。

彼は自分の半生を回顧するわけですね。

彼は西太后から皇帝の位を授けられ、幼児にして中国最高の位につきます。

しかし彼の知らないところで時代が動いていきます。

清から中華民国へ。彼は紫禁城の中だけの最高権力者。

やがてその紫禁城からも追放されることになります。

中国最後の皇帝であった彼に目をつけたのは、満州国の侵略をはじめた日本軍でした。

清王朝最後の皇帝は、満州国の皇帝へ。しかし皇帝とは名ばかりで、彼には何ひとつ実権などなかったわけです。

彼は日本軍傀儡政権のシンボルとして利用されることになります。

やがて戦争は終わる。溥儀には戦争犯罪人として裁かれる未来がだけ待っているわけです。

ジョン・ローンさま、ジョアン・チャンさま、ピーター・オトゥールさま。みんなすっげえ達者。

特にジョン・ローンさまの巧さには脱帽です。

これはジョン・ローンさまを起用したベルトリッチ監督の功績でしょうね。

アカデミー音楽賞を受賞した坂本龍一さまの音楽も素晴らしい。

坂本龍一さまも出演されております。存在感はたいしたもの。まあ演技の話はおいておきましょうね。

本職じゃないわけですから。

恋におちて

1984年アメリカ映画

監督 ウール・グロスバート

主演 ロバート・デ・ニーロ、メリル・ストリープ

この作品は、私が自信をもって他人にお勧めできる恋愛映画。

もうええやろってくらい書き続けておりますが、私は恋愛映画が苦手でございます。

それでもこの映画はやっぱり好きな映画上位に入ってきてしまいますね。

結局この映画を語るってことはデ・ニーロさまの演技を語ることになるんですが。

「ゴッドファーザー・パート2」で鮮烈な世界デビューを果たし、「タクシー・ドライバー」で再び世界を驚かせ、「レイジング・ブル」で完璧な俳優の称号を得たデ・ニーロさま。

その後、ベルトリッチ監督の「1900年」だとかマイケル・チミノ監督の「ディア・ハンター」だとかの映画史に残る傑作に出演し続けます。

これまでどんな作品に出演しても強烈な存在感を感じさせ、恐ろしいまでのオーラを放っていたデ・ニーロ。

そんなデ・ニーロ様が全然目立たなかった映画が二本。

私が知る限りにおいてはこの二本くらいなんです。

「ニューヨーク・ニューヨーク」とこの「恋におちて」。

「ニューヨーク・ニューヨーク」はライザ・ミネリさま主演で、ショービジネスの世界を描いた作品。

ライザ・ミネリさまはシンガーで、デ・ニーロさまはサクソ奏者。

この「恋におちて」は普通の妻子もちのおじさま。

こちらはメリル・ストリープさま主演。

どちらも女性が主人公で、デ・ニーロさまは決して目立ってはいけない役柄です。

そんな役柄になぜデ・ニーロさまを起用したのか、映画を見るまでわからなかったんですが、映画を見て妙に納得したりして。

つまり、デ・ニーロさまがシナリオをとってもよく理解して、監督のイメージに近く演ずれば、デ・ニーロさまの演技はまったくデ・ニーロさまらしくない、いわば透明な演技になってしまうわけですな。

この映画を見て、「らしくないなあ」とか最初は思いましたが、デ・ニーロさまらしくないってことは、結局そういうことございまして、ってことは彼を起用した監督が大正解だったわけですわな。

私が本当の意味で「デ・ニーロさまってすごい」って実感したのはこの映画でございました。

この映画での存在感と、圧倒的に出演シーンの少ない「アンタッチャブル」とか「未来世紀ブラジル」あたりの存在感を比較したとき、どちらの演技が印象に残るかって話です。

これはこれですっげえ恐ろしい演技やなあと、妙な納得のしかたしてしまいました。

ストーリーを軽く。

妻子もちの男デ・ニーロさまと、夫をもつ女ストリープさまが本屋で出会って、恋におちる。

そんな映画でございます。一行で終わってしまった。

ラストはとってもアメリカン。日本映画だと、クライマックスの電車のシーンで「完」ってなるんでしょうね。

あのラストをつけるところがいかにもアメリカ的だなあと感心してしまいました。

コーラスライン

1985年アメリカ映画

監督 リチャード・アッテンボロー

主演 マイケル・ダグラス、グレッグ・バージ

全ての映画のなかで最も回数見た映画がこの作品になると思います。

映画館で四回、ビデオでは少なくとも十回くらい見てると思います。

私はこの映画を見る前に劇団四季のミュージカルを見ました。

俺ってさあ、実はさあ、ミュージカルを生で見たんだよね。ミュージカル映画なんて見てられないよね。

と、妙な特権意識むきだして映画館に足を運んだわけですが...映画のほうが素晴らしかった。

劇団四季の皆様には申し訳ないですが。

スケールもダンサーのレベルも違いました。それぞれのキャストの役者としての才能もすごかったです。

ブロードウェイ。

ほとんどの舞台のキャスティングがオーディションで決まります。

大演出家ザック＝ダグラスさまの舞台で、男女各四人が選ばれるオーディションが行われます。

といっても今回のオーディションはコーラスの選考。

いわば舞台での「その他大勢」が選抜されるわけです。

膨大な人数の参加者が、ダンス選考で落とされていきます。

十名前後に絞られた参加者たち。参加者たちに「自分自身のことを聞かせてほしい」と言うダグラスさま。

それをオーディションの評価に加えると言います。

女性経験を話す黒人の若者。初めての夢精のことをユーモラスに話す白人青年。

ある女性は整形をして自信に満ちたダンサーになることができたと誇らしげに語り、少女期に家庭に問題があった女性は通っていたバレエ教室が自分の家のように話したと話し、演劇学校に通っていたプエルトリカンの女性はクラスメートたちみんなができる「感じる」ということができずに悩んだ経験を披露します。

そんな中でただ一人、話すことを拒む青年がいたりするわけですね。

やがて彼は演出家に、自分はゲイで、女装してステージに立っている姿を両親に見られ、死にたいと思った経験を涙ながらに語ります。

そんなオーディション会場に、元スターダンサーでダグラスさまの元カノがオーディションを受けにやってきます。

「私に踊らせて」と彼女は訴え、オーディションに加わります。さてさて、オーディションの結果やいかに。

コーラス・ラインとは舞台中央に引かれている線のこと。

その他大勢であるコーラスたちは、そのラインを超えることは許されません。

ラインより前は主役の領分なわけです。物語クライマックスでこのコーラス・ラインがとても深い意味をもつ場面があります。

お恥ずかしいですが、舞台ではその意味がわからなかったです。お見逃しなきよう。

1945年フランス映画

監督 マルセル・カルネ

主演 ジャン・ルイ・バロー、アルレッティ、ピエール・ブラッスール、マルセル・エラン

いよいよ通算365作品目でございます（この記述に関して、誤りがありましたので、次回記事にて訂正させていただきます）。やりはじめたころはどうなることかと思いましたが、なんだかんだ言いながら365作品達成ですね。すごいです。そもそも元コラムはテレビのオンエアの感想コラムでした。

シリーズ最初の作品としてとりあげたのがたまたま見た「スピーシーズ」。

なんかすげえ適当に始まったコラムだったんですが、せめて最後くらいは名作で締めようと思ってこの作品を温存しておりました。

映画史上に燦然と輝く名作中の名作。

三時間以上ある作品で、ビデオでも二巻組。

それなのに長さを感じさせないです。作品そのものが第一部と第二部に分かれております。

第一部・犯罪大通り。

19世紀半ばのパリ。美しい芸人ギャランス（アルレッティさま）は、「犯罪通り」と呼ばれる場所でスリと間違えられます。

彼女を救ったのはパントマイム役者バチスト（バローさま）。彼は彼女に好意を抱きますが、ワルの詩人ラスネール、役者志望のフレデリクも彼女に思いをよせています。

パリの雑踏の中でギャランスをめぐる男たちの戦いがはじまるわけですね。

第二部・白い男。

バチストはその芸を認められ、パントマイム役者として認められます。

バチストの舞台を見て、彼にひかれるギャランス。

しかし彼女に求婚する伯爵が現れ、事態はとってもややこしくなります。

バチスト・フレデリク・ラスネール、そして伯爵。さあどうなる。

パリの雑踏から始まる物語は、パリの雑踏で終わります。

そのラストシーンはとても哀しく、そして美しい。

ラストの余韻まで大好きな作品です。

長い映画ですが、できるだけインターバルをとらずに一気に見ていただきたいと思います。

とにかくバチストのパントマイムを見るだけでも価値があるし、映画史に残る悪役ラスネール、そして映画史に残るラストシーンと、見どころも満載の一作。

未見の方は是非是非ごらんくださいませ。

アジョシ(書き下ろし)

2010年韓国映画

監督 イ・ジョンボム

主演 ウォンビン、キム・セロン、キム・ヒウォン

えっと。長い間、前ページの「天井桟敷の人々」のご紹介で365本達成だと信じておりましたが、今回、パブ版のアップで... なんと一本足りないことに気づいてしまった。

ホームページ版の読者さんごめんね。ただ、第一集第二集ともに、ホームページ版の原稿をもとに進めさせていただいておりますので、ちょこっと作品をずらすとか難しいので...

第一集最終作品は、書き下ろしです。

韓国映画です。「アジョシ」。実は私、見た映画のタイトルをメモ帳にちっこい汚い字でメモしているんですよ。

そのメモ帳には、もちろんあの店行った、この店行ったって予定も、ライブの練習のスタジオの予定も、会社の会議も、友達と飲みに行く約束なんかも書いていってあります。

あとで見たら何書いてるか全然わからなくなったりします。字が汚いから。

この映画のメモもまさにそれでございます。

「アジョシ」。そう、この映画のタイトルを「あじよし」と読んでしまったらもう抜け出せません。

「味よし」...どこの店やっけ？ 誰と行ったっけ？

みたいな勘違い、ほんまにしてしまいました。

「アジョシ」ではなく、「アジョシ」でございます。韓国語で「おじさん」って意味。

実にぱっとしない質屋の「おじさん」がウォンビンさまでございます。

彼を慕うのが近所に住む少女、キム・セロンさま。

この人、韓国で十一年に一人でるかでないかの天才子役といわれているらしいです。確かにすごい演技力です。

セロンさまの母親は水商売をしている女。だもんで、少女はとっても孤独。

そんな寂しさからでしょうか、セロンちゃんはウォンビンさまの質屋に通って、いっしょに食事したりするような仲になっているわけでございます。

そんな中、事件は起きちゃう。

セロンちゃんの母が事件に巻き込まれちゃうんですな。

彼女は店の客から麻薬がどっさり入った鞆を失敬してしまい、その鞆をウォンビンの質屋に預けてしまったりします。

出来心で許される話ではないってことで、ヤバイあんちゃんがウォンビンさまの質屋に現れ、鞆を奪って逃げていく。

これはただごとではないと気づいたウォンビンさま、セロンちゃんのもとへ急ぎます。案の定、セロンちゃんは母とともにいずこかへ拉致されてしまいます。

それを追うウォンビンさま。

その追いかたが半端じゃない。

早い早い。こいつ、ぜったいただものやないやんけ。

実はウォンビンさま、元特殊部隊のエリート隊員だったわけでございまして。

たった一人の元秘密工作員は、拉致された「自分をアジヨシとよぶ幼い友達」を救うため、暗黒街の一味と戦うことになるのでありました。

めっちゃええ作品でした。

ウォンビンさまめっちゃええ感じ。それ以上に何ととってもやはりキム・セロンちゃん。

この人の他の作品も見てみたくなってしまうくらいの名演。

こいつは必見でございましょう。

ってことで、今度こそ、365本のご紹介、終了でございます。

あとがき

あとがきです

みなさま長らくのおつきあいありがとうございました。

ようやく365本の映画のご紹介、終了でございます。

365本分の映画のコラムなんて書けるやろかっておっかなびっくり始めたホームページ連載でございましたが、ホームページ上では二年目を終了し、現在三年目の途中で休筆状態となっております。

せっかくなんでこの機会に、三年目の分まで仕上げてしまって、第四集からはちょっと形を変えて映画コラムまたはじめようかって構想だけはありますので...

みなさま、長丁場になるかとは思いますが、これからもよろしく願い申し上げます。

ではみなさま、第二集のまえがきでお会いしましょう。